文の理解にはたす助詞の働き

—日本語と韓国語を中心に—

伊藤武彦
田原俊司　著
朴　　媛淑

風間書房

はじめに

統語的な機能と語用論的な機能を併せ持っている日本語の助詞、特にハとガの使い分けの問題は、言語学者にとって難物であるだけでなく、日本語を習得しようとしている外国人にとっても、そのレベルを問わず初級から上級まで学習者を悩ませる問題である。また、日本語母語話者においても、助詞ハとガは2歳前後に初出するように、早期に出現する文法項目であるにもかかわらず、本書で明らかにされるように、実際に子どもが助詞ハとガの使い分けを獲得するようになるのはかなり遅い時期である。

なぜ助詞ハとガの使い分けが外国人日本語学習者にとって習得が困難であるのか、また、なぜ日本語母語話者においても獲得が遅れるのかを、本書では助詞が多重機能性をもつという理論的枠組みに基づいて検討を進めた。その助詞の多重機能性の中で、本書では助詞の統語的な機能に問題を限定し、この機能がどのように獲得されていくかを日本語と朝鮮語(以下韓国語と表記)を中心とした交差言語学的(cross-linguistic)視点で明らかにした。

本書は、伊藤武彦が東北大学教育学研究科で取得した教育学博士論文「日本語における助詞の獲得:ハ・ガ・ヲの発達心理学的研究」(1990年2月)がもとになっている。今回は同論文の統語機能に関する部分に加筆・訂正を加え、その分野でその後得られた新たな知見を加えたものをまとめて刊行する。

なお、伊藤武彦の博士論文の第六章「助詞ハとガの談話機能の発達」および第八章「韓国語助詞との談話機能の比較」は本書に収録されておらず、田原・伊藤(1985a)と田原・伊藤・朴(1990)として公表されている。

本書の一部は、伊藤武彦の博士論文以外に、すでに次のように公刊されている。

第二章：伊藤武彦 (1986). 日本語の助詞ハとガの多重機能性. 和光大学人文学部紀要, **21**, 95 − 105.

第三章：Kilborn, K. and Ito, T. (1989). Sentence processing strategies in adult bilinguals. In B. MacWhinney and E. Bates. (Eds.), *Cross-linguistic studies of language processing* (pp.257 − 291). New York : Cambridge University Press.

第四章：伊藤武彦・田原俊司 (1986). ハとガの動作主性の発達. パン, F. C.・八代京子・秋山高二(編). ことばの多様性(pp.87 − 106). 文化評論出版.

第五章：伊藤武彦・田原俊司・朴　媛淑 (1991). 被動作主をあらわす助詞ヲの獲得. 教育心理学研究, **39**, 75 − 84.

第六章：田原俊司・朴　媛淑・伊藤武彦 (1987b). 韓国語単文理解における主題助詞と主格助詞の動作主性とその発達：日本語の助詞ハとガとの比較. 教育心理学研究, **35**, 213 − 222.

第八章：伊藤武彦 (1987). 日本語の特徴：文理解の方略の言語間の比較から. 和光大学人文学部紀要別冊「エスキス '87」,76 − 88.

補　章：伊藤武彦・田原俊司・朴　媛淑 (1989). 格標識としての日本語助詞：言語間および言語内の発達心理言語学的比較. パン, F. C.・パン, V.・三宅英文・佐々木真・渡部鉄太(編). 個人の言語と社会の言語(pp.93 − 114). 文化評論出版.

本書の研究のために、伊藤武彦は1986年度と1988年度の文部省科学研究費(奨励研究(A))を受け、田原俊司は1988年度東京大学海外研究補助金および1989年度の文部省科学研究費(奨励研究(A))を受けた。本書の公刊は1992年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(一般学術図書)の援助を受けている。

本書が、日本ととなりの国の言語発達研究にささやかなりとも貢献できれ

ばと思う。最後に本書の出版にあたりお世話になった風間書房の風間務社長ならびに、大貫祥子さんに心から感謝を申し上げる。

1992年　6月

伊藤武彦(いとう たけひこ)
田原俊司(たはら しゅんじ)
朴　媛淑(パク ウォンスク)

目　　次

はじめに
第一章　本研究の課題と方法……1
第二章　日本語の助詞ハとガの多重機能性……9
第三章　日本語の単文理解の方略：
日本人・二言語併用者・アメリカ人日本語教師・
アメリカ人日本語学習者の比較……27
第四章　ハとガの動作主性の発達……53
第五章　被動作主をあらわす助詞ヲの獲得……73
第六章　韓国語単文理解における主題助詞と
主格助詞の動作主性とその発達：日本語の助詞ハと
ガとの比較……89
第七章　被動作主をあらわす韓国語の
助詞eul／reulの獲得……109
第八章　文理解の方略の言語間の比較からみた
日本語の特徴……129
第九章　本研究のまとめ……147
補　章　助詞ヲと助詞eul／reulの理解の発達の比較……155
《参考文献》……175
おわりに……185

第一章　本研究の課題と方法

第一章では、本研究の目的と、言語発達の問題、日本語の助詞の交差言語学的な位置づけの問題、日本語と韓国語の助詞の共通性、本研究の方法的枠組み、本書の構成について説明する。

1－1　本研究の目的

本書は日本語における助詞の獲得についての心理学的研究である。本研究は、交差言語学的な枠組みのもとで、日本語における助詞が、韓国語を含めた他の言語と比較してどの様な特徴をもつのかをふまえ、とりわけハ・ガ・ヲについて問題にしている。これらの助詞の機能を比較し、その獲得過程について実験的な方法を用いて検討することが本書の目的である。

1－2　言語発達の問題

子どもが言語行動の基礎をつくるのは、乳児期、すなわちPiagetのいう感覚運動的段階である。乳児は大人(母親など)との相互の社会的関係をとおしてコミュニケーションのルール(ターン・テイキング等)を身につけ、大人に見守られ意味づけられながら、物の操作を通して外界物の性質や関係を学んでいく。乳児期後期になると対物・対人の各関係が結合し«子ども－事物－母親»という三項関係が成立する。つまり、子どもと母親の間で事物を交換し共有するやりとりが発展する。文法的構造に置き換えると「…が…に…を…した」という関係が成立するといえる。このような経験が基礎になり、指さし等の伝達的身ぶりが発生し、象徴機能の成立により言語という記号の使用ができるようになる。

本書で問題とする助詞ガとヲは、格関係、例えば動作主－被動作主をあら

わす働きを持つ。このような格関係の理解は、上に述べた三項関係の中での「やりとり遊び」・「やりもらい遊び」にその起源を求めることができる。また、文の主題を提示する係助詞ハのもつ機能の起源も、この三項関係とその前提である母子の間での「注意の共有」ということに求められよう。子どもが視線や身ぶりによって母親に伝達したい自分の関心物を示すように、助詞ハは聞き手に今何について話(陳述)をしようとしているのかを示す働きがあるからである。このように助詞ハ・ガ・ヲ等の機能の認知的・社会的基盤は発達初期にまでさかのぼることができる。また、これらの助詞の出現は、大久保(1967)・宮原と宮原(1973, 1976)・前田(1977)の観察によれば、2歳以前であり、早期から使用される語である。

しかし、使用を開始してから文法的に正しく使うことができるまでの間には長い時期がかかる。このことを本研究で実験的方法により示すことにする。またそのように習得期間が長いのはなぜなのかを明らかにすることも本研究の目的である。助詞は文の構成素の間の関係をあらわす機能語であり、日本語の文法で重要な役割を果たす。とはいえ、第二章で紹介するように日本語の助詞の中でハとガは、外国人の日本語学習者にとっても獲得困難な文法項目なのである。このような難しさのあるハとガは日本の子どもにとっても習得するのが大変な文法項目であることも本書で示されよう。

1－3　日本語の助詞の位置づけの問題

同じ意味内容をあらわす場合でも、言語の違いにより様々な表現方法がある。例えば本研究でとりあげる言語の中でも、格関係をあらわす文法標識marker には、語順(英語・中国語など)、格助詞(日本語・韓国語)、冠詞と(代)名詞語尾変化(ドイツ語など)、名詞の接尾辞(トルコ語)など様々である。これらの文法的標識が文の格関係の決定のために働く影響力(手掛りの強さ)は各々の文法標識により異なり、それらはまた言語の種類により異なる。格関係の理解にはこれら標識以外の手掛りも用いられる。このような手掛りの強さの違

いや、文を理解する上での方略の言語差を実験的に調べることにより、他の言語と日本語の共通性と差異性が明らかになるだろう。本研究はこのような交差言語的な展望をもって進められてきた。その中でも、本書では特に韓国語との比較により両言語の特徴を明らかにすることにする。

1－4　日本語と韓国語との助詞の共通性

日本語を母語とする成人にとっては当然ながら、助詞ハとガの使い分けはさほど困難ではない。しかし、外国人日本語学習者にとって、この使い分けは非常に困難であり、誤用の多い文法項目であることが指摘されている(例えば鈴木, 1978)。ところが、助詞ハとガの習得に困難をきたすことの多い外国人日本語学習者の中にあって、韓国語を母語とする者は日本語の助詞ハとガの使い分けを比較的容易に学習することが日本語教育界で知られている。これは韓国語がSOV言語(基本語順が主語－目的語－動詞の言語)であり、後置詞言語(名詞の後に助詞が付く)であるとともに、主題をあらわす助詞eun/neunと主格をあらわす助詞i/gaが存在し、日本語のハとガに対応した用法を持っているためであると考えられる。韓国語の主題と主格それぞれの助詞の対は、名詞句が母音で終わるか子音で終わるかで使い分けられる。すなわち、名詞句が子音で終われば主題の場合eun(ウンと発音)、主格ではi(イと発音)、名詞句が母音で終われば主題の場合neun(ヌンと発音)、主格ではga(ガと発音)が用いられる。例えば、NAN(蘭)は子音Nで終わるので主題の場合eun、主格ではi、SO(牛)は母音Oで終わるので主題の場合neun、主格の場合gaで受ける。Li and Thompson (1976)は、日本語と韓国語を主題と主格の両標識を併せ持つ言語として、世界の言語の中で同じグループに分類している。また、韓国語言語学でも、日本語と韓国語の助詞の主題と主格の用法の共通性が指摘されている(洪, 1983)。

本研究の目的の一つとして、以上述べたように日本語と類似した文法標識である韓国語の助詞との比較を通して、日本語の助詞の特徴を明らかするこ

とが挙げられる。

1－5　本研究の方法的枠組み

本書では日本語の助詞ハとガは、後に第二章でのべるように様々な機能をあわせ持っているという視点に基づき検討を進めている。このような複雑な機能を持つハとガについて本書では特に両助詞の「統語的な機能」に焦点をあて、その統語的な機能がどの様に獲得されるのかを明らかにする。さらに、他の言語との比較をとおして日本語の特徴を心理言語学的に示すことを試みている。

他の言語と日本語とを直接比較することが可能なのは、本書が二つの先行研究に強い影響を受けているからである。

ひとつは、カリフォルニア大学バークレー校の Dan Slobin が主宰する「言語獲得の交差言語的研究」であり、いま一つは、Elizabeth Bates と Brian MacWhinney による「競合モデル competition model による文処理の実験心理学的研究」である。

Dan Slobin らの研究プロジェクトは、世界各国の子どもの言語発達の過程を比較することにより、認知発達の共通性と言語構造の差異による言語的特殊性が子どもの文法獲得にどの様に現われてくるかを比較し、人間の個体発生における文法獲得の諸原則 (Slobin はこれを操作原則 operating principles と呼ぶ) を明らかにすることにある。このプロジェクトの成果は日本語の研究 (Clancy, 1985) も含め、Slobin (1985) としてまとめられている。

Slobin や Clancy の子どもの文法発達研究は、自然的な場面での子どもの発話を記録したものの分析が主な研究方法であった。しかし特定の文法項目に対してそれを機能的に分析するためには実験的な手法がどうしても必要となる。このことについて、我々が強い影響を受けたのは Elizabeth Bates と Brian MacWhinney による「文の産出と理解についての競合モデル 」という実験心理学的パラダイムである。この競合モデル (例えば、Bates & MacWhinney, 1987;

MacWhinney & Bates, 1989を参照)は、文の聞き手(または話し手)が文を聞く(話す)際、なんらかの統語的決定を下す根拠を得るために、いくつかの手掛りcueを利用すると仮定する。そして、これらの手掛り——例えば、表現の手段である、文法項目(助詞などの形態素・語尾変化などの屈折)・名詞の意味・語順等——が「競合competition」すなわちお互いに反対・対立の働きをする条件と、「連携coalition」すなわち諸要因間で同方向に作用するような条件を実験的につくり出し、言語行動者の反応をみるものである(競合モデルのさらに詳しい説明については本書の補章を参照のこと)。この方法により多くの言語間の比較が実験的に可能である。本研究での実験計画ではこの枠組みを用いた。

1－6　本書の構成

各章の構成を以下に述べよう。

第二章は、本研究を進めるにあたり、全体的な問題の所在と日本語の助詞の理論的な枠組みとを述べた章である。ここでは、助詞ハとガの問題を中心に、これまでの言語学とくに語用論pragmaticsとよばれる分野での知見をふまえ、理論的な整理を試みる。なお、助詞ヲも(標示する格の違いはあるが)助詞ガと同じ機能を持つと位置づけられる。ここでわれわれが提出する中心概念は「多重機能性」である。この概念はKarmiloff-Smith (1979)を参考にしたもので、複雑な文法的機能を持つ語に対してその諸側面を相対的に独立したものとして抽出する。具体的には、久野(1973)などをふまえ、ハとガ(およびヲ)の用法の違いを三つの機能、すなわち、統語機能・談話機能・対照比較機能という観点から特徴づけ、本論文の基本的な理論的枠組みとして論じる。

第三章は、日本語に対する成人の文理解の方略の実験的研究である。これは、第二章でいう助詞ハとガの統語機能を、発達的にではなく大人についてのみ調べたものである。ここでは日本人母語話者の方略を日英二言語併用者・英日二言語併用者・アメリカ人日本語学習者の方略と比較している。第1言語(母語)で獲得された文理解の方略の様式が、第2言語(外国語)における方

略に影響を与えることが示された。

第四章は、ハとガの統語機能について、日本人の幼児から大人までを発達的に比較することによりいつ頃獲得されるのかを実験的に調べたものである。第三章で提起された問題を第1言語の獲得という面から発達心理学的に論じた、「格標示力」(どの程度の強さで名詞句間の格関係——たとえば動作の主体と客体など——を表すか)を「動作主性」(その名詞句を動作主として知覚させる強さの度合)の観点から明らかにした。対象は保育園年中児から成人までの8群である。ガの格標示力がハの格標示力よりも強いことが示された。

第五章は、助詞ヲの統語機能の発達を実験的に検討したものである。前章と比較することにより、日本語の3つの助詞ハ・ガ・ヲを、(動作主か被動作主かの違いはあるが)格関係標示という機能の観点から、獲得の困難度を明らかにしようとするものである。第四章と比較し得る実験を助詞ヲについて保育園年中児から成人までの8群に対して行い、ヲの格標示力がガ・ハよりも強いことを明らかにし、その理由について論じた。

第六章は、第四章でおこなわれた主題助詞と主格助詞の統語機能の発達を、韓国語について調べ、日本語のハとガと比較したものである。日本語のハとガと同様の区別が行なわれているとみられる韓国語の主題助詞 eun/neun と主格助詞 i/ga について、第四章の文理解の方略の実験と同型の実験を韓国語母語話者の幼児から成人8群に対して行った実験の報告である。

第七章は、第五章でおこなわれた目的格助詞ヲの統語機能の発達を韓国語の目的格助詞 eul/reul について調べ、日本語の目的格助詞ヲと比較し、日・韓両言語の格助詞の獲得における類似と差異について論じた。被験者は幼児から成人までの8群である。韓国語においても、目的格助詞の格標示力が主格助詞・主題助詞よりも強いことが明らかとなり、助詞の統語機能の獲得に対して第五章で展開した操作原理を韓国語の助詞の獲得に対しても適用することができることを示した。

第八章では、第三章から第七章までの実験をふまえ、日本語の助詞の特徴

を、成人と幼児・児童に対する諸言語の文理解の方略の実験的研究を比較することによって明らかにすることを試みた。このような交差言語的比較により、日本語における助詞の文処理に果たす役割の強さと、語順の果たす役割についての弱さについて、これを英語・韓国語・イタリア語・ドイツ語・オランダ語など、様々な言語と比較して論じた。

第九章では、各章ごとに総括的なまとめをおこなった。全体の総括として、文法問題に対する心理言語学的アプローチの有効性と限界、日本語助詞ハとガの獲得困難性を第1言語において明らかにしたことの意義、多重機能性という枠組みの有効性、助詞の文法的機能の相対性、の4つの点から総合的考察を加え、今後の研究課題についての提案を行なった。

補章は、日本語の助詞ヲと韓国語の助詞eul/reulの理解の発達を比較したもので、そのデータは本書の第五章と第七章のものと同一である。ここでは「競合モデル」の説明と、両言語の目的格助詞による文処理と他の手掛りによる文処理の発達的な比較をおこなった。第五章と第七章の理解の助けになればと思い、本書に収録した。

第二章　日本語の助詞ハとガの多重機能性

【要約】第二章は、本研究を進めるにあたり、全体的な問題の所在と日本語の助詞の理論的な枠組みとを述べた章である。ここでは、助詞ハとガの問題を中心に、これまでの言語学とくに語用論とよばれる分野での知見をふまえ、理論的な整理を試みる。なお、助詞ヲも(標示する格の違いはあるが)助詞ガと同じ機能を持つと位置づけられる。ここで本論文が提出する中心概念は「多重機能性」である。複雑な文法的機能を持つ語の諸側面を相対的に独立したものとして抽出する。具体的には、ハとガ(およびヲ)の用法の違いを三つの機能、すなわち統語機能・談話機能・対照比較機能という観点から特徴づけ、本論文の基本的な理論的枠組みとして論じた。助詞ハとガが、日本語を第2言語(外国語)として学習する際に、頻繁に使用する助詞でありながら、使い分けが難しい文法項目であることを示した。しかし、韓国語を母語とする学習者はこの限りではない。それは、韓国語が日本語のハとガと同じように、主題助詞と主格助詞の使い分けをおこなうという言語であるからである。このような類似点に着目して第六章・第七章の実験がおこなわれた。日本語を母語とする幼児についてこれまでの助詞ハとガの研究を概観すると、その出現は1歳台で早期であるが、本研究で明らかにしたように文法にかなった機能的な習得が完成する時期は遅く、思春期にまで及ぶことが示される。このような獲得の難しさの理由として、ハとガに多重機能性があるということが指摘された。統語機能・対照比較機能・談話機能という3つのレベルは、機能的に連関しあっている。

2－1　外国人にとってハとガの獲得は難しい

日本語以外の言語を母語とする者が日本語を第2言語として学習する時、最も習得が困難な文法項目の一つにハとガの用法の区別の問題がある。例えば、雑誌『言語』1984年8月号の「日本語学習者の声」に寄稿した留学生の記事

を分析すると、10記事のうち4人がハとガの習得の難しさを指摘している。かれらが書いた記事の該当部分を以下に紹介しよう。

ニール・ダル(インド)‥‥日本語の文法についていうと、非常に、簡単に見える「は」と「が」という助詞を使う時、今でもすごく間違ったりする。

シーラパッタクン・ワンチャイ(タイ)‥‥私にとって一番難しいのは日本語の助詞の使い方だと思う。それがよく分かるように勉強したり先生に聞いたりしていたが、助詞の問題点はまだたくさんある。例えば「は」と「が」の問題はある場合に日本人でも「それがなんとなく正しい」と言ってくれたが、理由がはっきり説明できなかった。以前私は助詞が大嫌いだったが、助詞の利点に気づいてからそんなに嫌いでなくなった。利点とは助詞が文の中の言葉の関係を示す事だと私は思う。それでもっと努力して助詞の勉強をするつもりでいる。

ウォラウット・チラソンバット(タイ)‥‥(動詞と形容詞の活用形も難しいですが)もっと複雑なことは助詞の問題です。日本語の助詞はたくさんありますが、私は「は」と「が」の使い方で困ったことを述べたいです。「は」と「が」のことは博士論文の研究題目のような難しいことですが、日本語のテキストには初めから「は」と「が」の問題が出てきます。「私はタイ人です。」という文章は私が初めて習った日本語の文章で、しばらくたって「本があります。」と「本はありません。」という文章を習いました。これは非常に難しいです。なぜかというと、これはただ文法の規則だけでなく「は」と「が」の使い方は日本人の考え方と気持ちも含まれると思います。「は」と「が」の使い方は日本人は分かっていますが「どうしてこの場合は『は』を使うのか。どうしてこの場合は『が』を使うのか。」と普通の日本人に聞いても、なかなか説明できないに違いありません。ですから、外国人にとって「は」と「が」の使い方は頭の痛い問題です。

伊勢島明美(ブラジル日系人)‥‥「は」と「が」は一番使われる助詞でありな

がら、よく生徒の頭を混乱させます。この二つの助詞はある程度までは、はっきりと区別することができるけれども、文の意味を強める場合、どちらも強調する役目も果たすので、具体的に「は」と「が」の違いを説明するのは難しいと思います。

これらの日本語学習者の手記から以下のことが読み取れよう。ハとガの区別は学習の初級から(“今でもすごく間違ったりする”ように)上級まで学習者を悩ます難しい問題であること、ハとガは日常の日本語に頻出する基礎的な助詞であること、普通日本人はハとガを正しく直観的に区別することができるがその理由を分析的に説明することは大変困難であること、ハとガの問題は日本語の専門家にとっても解明されていないことの多い(“博士論文の研究題目になるような”)厄介な問題であること、ハとガの使い分けには文法的な規則によるだけではなく心理的な要因(“日本人の考え方と気持ち”[(1)])がからんでいるらしいこと、等である。日本語教育の長年の経験をふまえて、鈴木(1978)は日本語学習者による助詞の誤用のパターンをまとめているが、その中でハとガの誤りの占める割合は極めて大きい。助詞ハは、日本語の教科書で第一課より出てくるし、ガも初級の初期の段階で出現する。ハとガだけの問題を取り扱った自習書である野田(1985)のような本も出ているほどである。野田はハとガの用法を五十の文例によって解説している。両助詞の区別は文法的にみてかなり複雑なのである。

さて、日本人の成人母語話者は、ハとガの分析的な説明はできなくても、いわば直観的にハとガを困難なく区別して使用している。複雑なハとガの用法は、日本語を母語(第1言語)とする人においては、どの様な過程をたどっていつ頃完全に獲得されるのであろうか。この問題についての今までの諸研究を次節で概観したい。

2－2　日本語で育つ子どもは、早くからハとガを使い始めるが、正しく使用できるまでには長い期間を要する

日本語幼児は、いつごろから、どのように、ハとガの2つの助詞を使い始めるのであろうか。ハとガの出現の時期は、大久保(1967)の観察によれば、ハの初出は1歳6ヶ月以前であり、ガの初出の1歳9ヶ月より先行する。しかし、宮原と宮原(1973, 1976)の観察では、生後16ヶ月で2語発話が出現し、18ヶ月時に終助詞ネ、ヨ等が出現した後、生後20ヶ月目にほとんど同時期にガとハが2語発話の中にあらわれたとしている[(2)]。また、前田(1977)の観察によれば、1歳8ヶ月時に「オトウチャンハガッコー」、1歳9ヶ月時に、「ベンキョー、ココ、オトウチャンハ」といったハを含む平叙文の発話が出現している。初期の発話におけるハとガの機能の発達的変化ついては、今後の研究をまたねばならないが、出現の時期についてはハとガの両者とも1歳後半にすでに出現していることで、以上の3つの研究に共通点がみられる。この時期の子どもの言語発達は個人差が大きいので、すべての子どもが2歳前にハとガを使い始めるというわけではないだろうが、言語発達の初期からハとガが出現していることは間違いない。日本語教育にハとガが初級から出てくることと同じく、第1言語としてもハとガは使い初めの時期が極めて早い。それはハとガが日本語の基本構造にかかわる重要な文法項目であるからであろう。

横山・Schaefer (1986b)は自分の子どもの発話記録に基づいて1歳半ばから3歳までの助詞の誤用について調べた。ハとガについてみると、本来ガを使用するべきところにハを誤って使用した数よりも、ハに対してガを誤って置換して用いた回数のほうが4倍も多いことがわかった。

幼児期におけるハとガの使用と脱落について、Miyazaki (1979)は野地(1976)による発話の資料を分析した。ガは2歳4ヶ月以前は60%以上脱落していたが、2歳10ヶ月以降は10%台以下の脱落率となり、大人(10.2%)に割合が近づくことより、この時期を獲得の時期としている。一方、主題のハは、大人の

脱落(省略)率が25.5%であるのに対して、子どもは2歳1ヶ月から5歳12ヶ月まで脱落率がいずれの年齢でも52.0～100%の範囲であり、新情報に対しガを使用するという関係が成立している子どもであっても、旧情報にハを使用する関係ははっきりと成立していない。しかし、対照の用法のハは、3歳7ヶ月以降脱落率が低い(15.6%)ことにより、その頃に獲得のきざしがみえているとしている(ちなみに大人の脱落率は0%であった)。この研究の問題点を挙げるならば、それは脱落率を指標にとっていることである。特に幼児においては、助詞ハ、ガ等が省略された形も、おとなによって受容される。また、助詞の欠如を、省略の規則が未獲得のため必然的に脱落したものとみなすのか、意図的に省略したものとみなすのか、の区別がむずかしいという問題もある。秦野(1976, 1979)は自由再生課題と模倣完成課題によって3～7歳児のガとハの発話を調べた。ガの使用は4歳児でも行われているのに対し、「－ハ－ガ」構文では7歳児では正答が急増した等、新情報に対するガの使用の開始時期(4歳～)が、旧情報に対するハの使用開始時期(6歳以上)よりも先行することが示された。これら2つの研究から、ハの獲得はガよりも難しいことが示唆される。

学童期以降におけるハとガの区別について、林部(1979, 1983)は、小学校1年生～中学校2年生に対し、実験的方法によって新－旧情報の区別をハとガの対立文と分裂文について調べた。小学校高学年になると、新－旧情報の違いが反応の違いをもたらし、中学生になって初めてハとガを手掛りとする新－旧情報の弁別が可能であった。伊藤・田原(1986)、田原(1985)、田原・伊藤(1984, 1985a)は、ハとガの3つの機能――統語機能・対象比較機能・談話機能――の獲得過程について4歳児から成人の日本語母語話者に対して実験的研究を行い、ハとガの諸機能が完成をするのは12歳頃であると推測している。これは英語の冠詞(Maratsos, 1976 ; Warden, 1976)やフランス語の冠詞の機能、とりわけ定・不定(Karmiloff-Smith, 1979)が9歳頃に獲得されるとする研究と対比してみると、より遅い時期である。

1歳後半頃から出現するが中学生以降になってようやく一定の完成を見ると

いうように、獲得するまでの期間が極めて長いハとガの発達過程は、他の領域の言語発達にはあまり例をみないものである。第2言語としての日本語学習のみならず、日本語を第1言語とする者にとっても、ハとガの区別は長い時間がかかる大変な問題であると言えよう。

2－3　ハとガは多重の機能をもつ

前節では、ハとガの獲得過程の先行諸研究を紹介するにあたり、様々な概念を説明なしに用いた。本節では、ハとガは多重の機能を持つ、すなわちハとガには多重機能性 multi-functionalityがある、という立場から、ハとガの機能を整理することを試みたい(3)。ハとガの心理言語学的研究の枠組みとして、ハとガの多重機能性(4)には、以下に述べる3つの機能がある。それは、(1)ハは主題をあらわし、ガは主格をあらわすという統語機能、(2)ハは情報を「旧情報化」「旧情報提示」する働きがあるのに対して、ガには情報を展開する働きを特に持たない、という情報構造上の違いに基づく談話機能、(3)ハは対照の意味を持つことがあるのに対し、ガは排他(または総記)の意味を持つことがあるという対象比較機能、である。これら3つの機能でハとガの用法がすべて説明可能というわけではない。しかし3つともハとガの用法として代表的なものであり、両助詞の獲得過程を明らかにする上で有効な枠組みであると考える。以下、各々の機能について諸概念を整理し説明を加え、最後にこれらの機能間の相互関係について考察する。

2－3－(1)　主題と主格：ハとガの統語機能

ハとガの機能上の差異は、これまでに国語学・日本語学など様々な分野で論争が行われてきているが、いまだに定説をみない。両方の助詞とも、その機能が多重であることが問題を複雑にしている。本節では、ハとガの機能を、文(sentence)と談話(discourse)という2つの分析単位に基づいてとらえようと試みる。ここでいう談話(または文章)とは、文より上位の言語単位であり、継起す

る文の連鎖からなる発話を指す。統語論は文を分析対象とし、談話文法は談話を分析対象とする。

文は、基本的に、命題 proposition と法態 modality の 2 要素から成るとみなしうる (Fillmore, 1968)。命題とはモノの存在・性質・動作・関係などをあらわす部分であり、法態とは、その命題に対する話し手の判断や態度をあらわす部分である。この点から見ると、ガは命題部分にのみかかわるといえる。すなわち、それの付いた名詞句が述部に対して主格 subjective/nominaitive であるというような表層上の格関係を標示する。そして主格は多くの場合、動作主や経験者等として、述部に対する主体的な意味関係をあらわす。もっとも、受動文や、可能動詞(読める、等)・感覚動詞(見える、等)・好悪などの感情を表す述部(好きだ、等)などの場合では被動作主(動作の客体)にガが付く。したがって、ガの意味的な格関係(深層格)は、述部の種類によって決まる。いずれにせよ、ガは格関係を標示する格助詞であり、ある命題の中でそれが付く名詞句と述語の関係をしめす他の格助詞、たとえば、ヲ、ニ、デ、ヘ等と同じグループに属する。

しかし、ハはガのように格関係を標示する機能を持たない。ハは、話し手の主体的な態度表現を荷うところの法態の部分にかかわって主題を標示する。すなわち、ハは格助詞でなく係助詞なのであり、ハを伴う名詞句は述語に対する格関係を明示するのではなく、文末の法態部分(助動詞や終助詞)に呼応する。吉本 (1982) は次のように述べている。「『名詞句＋が』は文表現の素材的側面に属し、『名詞句＋は』は素材に対する言語主体の働きかけを示す陳述的側面に関わり、『が』はそれが付く名詞句と述語との関係を示し、述語との結びつきは 1 回きりである。『は』を伴う名詞句は、主題として、文末の陳述に呼応する。」

Fillmore (1968) 流に言うならば、〝素材〟とは命題のことであり、〝陳述〟とは法態のことであるのである。

(1)　ヤスが賄賂で稼ぐお金で羽振りがよかった。

(2)　ヤスは賄賂で稼ぐお金で羽振りがよかった。

(1)では、「羽振りがよかった」という陳述部分に対する主体はヤスでなくともよい(例えば、ヤスが賄賂で稼ぐお金でヤスの息子は羽振りがよかった)が、(2)ではヤスに限定される。しかし、(2)では「稼ぐ」主体がヤスでなくても文はおかしくない(ヤスは子分が賄賂で稼ぐお金で羽振りがよかった)が、(1)では「稼ぐ」主体はヤスでなくてはならない。

(3)　Rockie gave a bribe to Yasu.

(4)　ロッキーがヤスに賄賂をやった。

(3)という命題を表現するために格助詞は(4)の下線部のように強制的にきまり、動詞「やる」の場合、ガはロッキーという動作主にしか付きえないが、主題の助詞ハは、3つの名詞のどれにも付きうる。

(5)　ロッキーはヤスに賄賂をやった。

(6)　ヤスはロッキーが賄賂をやった。

(7)　賄賂はロッキーがヤスにやった。

どの名詞がハによって主題化されるのかは、格関係によるのではなく、発話された場面や話し手の意識や聞き手との共有知識や、先行の談話等々の言語的・非言語的文脈や、発話者の心理状態に規定されるのである。そこで、ハの機能は、1文中で吟味されるのでなく、むしろ談話において分析されることによってこそ明らかにされうるといえる。例えば、談話文法の観点からすれば、ハは結束標識 cohesion marker、すなわち文と文とを結び付ける構成素として、言語運用のなかでのその使用のされかたが問題となる(Clancy and Downing, 1986)。

ハの機能を表す主題(topicまたはtheme)という概念は多義的であり、以下に紹介するように研究者によって規定の仕方が様々である。

Crystal (1980)

topic: ある文のtopicとは、それについて何かが言われるところの人、あるいは物のことである。「心理的主語」とも呼ばれることがある。

Dubois *et al.* (1973)

topique: 談話の主題 (theme) で、事柄についてなにかを言う場合の、その事柄、対話者の質問あるいは状況によってテーマとして与えられるもの。

theme: 断定文で、それについて何か (述語) が語られることになる直接構成要素 (名詞句)。

Halliday (1970)

topic: topic は複合的概念であり、(1)theme と (2)given の 2 つの機能に分けられる。

theme:「心理的主語」であり、英語では最初の位置に置かれている要素であり、「ここに私が言っていることの見出しがある」ことを意味する。

given: 回復不可能な情報として、つまり聞き手が自分自身でテキストや場面から引き出せないと予想されるような情報として話し手が扱う構成要素。

Li & Thompson (1976)

topic: 話されていることの領域の特定化の役割を持ち、注意の中心であり、談話のテーマを知らせるという役割を持つ。

Kitagawa (1982)

topic: 日本語の主題とは、助詞「ハ」の付いた名詞句である。

Kitagawa (1982) のような表層的な定義を除けば、他の主題の規定は、いずれも話者の心理や文脈や場面に関連のあるものであり、ハの談話機能が問題となる。これを情報構造という観点からみると、談話上のハとガの使い分けの問題が、主題標識ハの解明の一つの鍵となっている。

2－3－(2)　ハとガの談話機能

これまでに、新旧情報に関して様々な規定が試みられてきている。ハを伴う名詞句は通常旧情報であり、ガなど格助詞がついた名詞句は通常新情報が

あらわされているといわれる。旧情報は省略され、文中に表現されないことも多い。ここで、これまでの新－旧情報の定義を概観してみよう。

Chafe (1970) の new information と old information : new information とは、話し手が聞き手に初めて紹介すると考えている情報で、old information とは、発話の時点で既に話し手も聞き手も分けあっていると考えている情報である。

Chafe (1976) の new information と given information : new information とは、話し手がそれを話すことによって聞き手の意識の中に話し手が導入していると仮定する情報であり、given information とは、発話の時点で聞き手の意識に存在していると仮定する知識のことである (但し Chafe は new-old と new-given の区別をしているのではなく、new-old の定義を変えたと見るのが妥当である)。

久野 (1978) の新しいインフォメーションと古いインフォメーション : 新しいインフォメーションとは、重要度が高い情報であり、古いインフォメーションとは、重要度の低い情報である。

久野 (1982) の新しいインフォメーションと古いインフォメーション : 先行文脈から復元可能なインフォメーションを旧、復元不可能なインフォメーションを新と呼ぶ (久野, 1982 では、情報の重要度は別の概念として定義されている)。

田原・伊藤 (1985a) は、Chafe (1976) の定義を参考にして、旧情報を聞き手の意識に存在していると話し手に仮定されている情報、新情報を発話の時点で聞き手の意識に存在しないと話し手に仮定されている情報と規定し、この規定に基づいてハとガの使い分けが完全にできるようになるのは 14 歳以降であるとの結果を得た。その際、すでに文脈の中に登場しているもの (既出または既知) と発話の中に初登場したもの (初出または未知) との区別は、旧情報と新情報の区別と一致しないことが指摘された。Chafe (1970) の新旧情報の定義は、ここでいう初出・既出の区別に近い規定であり、不適切である。

談話という観点からみると、主題助詞と主格助詞の使い分けに影響を及ぼ

すと思われる要因として、(1)どういった場面(状況)で発話するかという場面の要因、(2)どのような発話を発話時点までにしていたのかという先行文脈(たとえば、初出・既出)の要因、(3)発話者と聞き手との間の関係の要因、(4)発話時点で聞き手がどの様な経験や知識を共有しているかといった共有知識の要因、(5)発話時点で発話者と聞き手がどの様な知識を共有していると話し手が判断しているかといった共有知識に対する話し手の判断の要因、(6)発話者が(5)の要因に基づいて、どの様に発話を展開しようとしているかという情報展開の要因、の6つが考えられる。

田原・伊藤(1985a)と田原・伊藤・朴(1990)の研究では(1)、(3)、(4)の各要因については統制を加えており、(2)の先行文脈の要因、(5)の発話者の判断の要因、および(6)の情報構造に基づく情報展開の要因によって主題助詞と主格助詞の使い分けがどの様に行われているかということを明らかにしようとしたものであるといえよう。両実験とも、先行文脈の要因に対しては、既出のものに対しても主題助詞を使わず、主格助詞を用いる被験者が存在した。この結果は、すでに述べたように、先行文脈の要因(既出・未出)の重要性を否定するものではないが、先行文脈の要因だけでは主題助詞と主格助詞の使い分けを説明しえず、(5)・(6)の要因が重要であることを示した。

田原・伊藤(1985a)で示された新旧情報による使い分けでは説明しえない主題助詞の使われ方が現実の言語行動場面でおこなわれている。例えば、発話のはじめからいきなり主題助詞が用いられる場合である。このような場合、聞き手が聞くのは、助詞ハの付いた新情報の名詞句なのであるが、その名詞句にハが付くやいなや、直ちに旧情報としての扱いを受ける。このような用法は、(5)の新旧情報による主格助詞と主題助詞の使い分けの説明としての限界を示す。すなわち、聴き手との共有知識に対する話し手の判断の要因に加え、その情報をどの様に提示するかといった話し手の情報展開の要因((6)の要因)に基づいてハの談話機能が使われているのである。情報展開からみたハの談話機能は、「旧情報提示」と「旧情報化」である。

談話の中には、4種類の情報展開のタイプが論理的に考えられる。第1の情報展開のタイプは「旧情報提示」である。旧情報提示とは、場面的に明白だったり、先行文脈に出現したり、聞き手の一般的知識に包摂されているような事柄(田原・伊藤, 1985aのいう旧情報)を聞き手に確認させたり、省略の際に生じるであろう誤解を避けたりするために、あらためて提示するというものである。必要以上に旧情報提示をおこなうと談話(発話)は冗長になり、Slobin (1979)のいうeffectivenessが損なわれる。そこで、日本語においては共有されている知識を可能な限り省略し、いわばヴィゴツキー(1934, 1962訳)がいう内言的な文を展開するということになる。その際、話し手が聞き手に田原・伊藤(1985a)のいう旧情報を呈示することにより再確認したいという動機が発話意図として現れたとき、旧情報提示による主題助詞の使用がおこると考えられる。

第2の情報展開のタイプは「旧情報化」である。旧情報化とは、聞き手との間に共有されていない情報を、話し手があたかも旧情報として題目化して提示するものである。話し手が聞き手に対し、あるテーマに注意を差し向けたり、ある題目に引き込んだり、話題の内容を転換したいという動機を抱いたとき、旧情報化に基づいて主題助詞が用いられると考えられる。ハや韓国語の主題助詞eun/neunはこれら2つのタイプの情報展開を標示する機能を持っているのである。旧情報化をあらわす助詞ハは省略不可能である。

第3の情報展開のタイプは「新情報提示」である。新情報提示とは、聞き手との間に共有されていないと話し手に判断されている新情報を、そのまま新情報として提示するものである。

第4の情報展開のタイプは「新情報化」である。新情報化とは、聞き手との間に共有されていると話し手に判断されている旧情報を、話し手が何に関心があるのか、何に注目しているのか、あらためてその関心・注目を聴き手に対し設定したいという動機を抱いたとき、新情報として提示するものである。これら2つのタイプの名詞句には、必ずしもガあるいは他の格助詞が付いていなくてもかまわない。

一方、助詞ガは新情報と共起関係を持つのは確かである。しかし、助詞ガを省略してもしなくても、新情報化や新情報提示が成立するとすれば、助詞ガは新情報に対し、何の機能ももたないことになる。この問題を見るためには、ガを省略された名詞句が新情報性を減じられるかどうかみればよいだろう。それを見てみると、ガには名詞句を「新情報化」する機能は無いように思われるのである。例を挙げて考えてみよう

(1)　誰が一番悪いことをしたの？

という問いに対して

(2)　首相が一番悪いことをしたのです。

といっても

(3)　首相。

といっても名詞句「首相」の新情報としての性格は変わらないと思われる。そうであれば、新情報というのはガの前の名詞(句)それ自体に備わっている働きであり、ガの有無とは関係が無い。たしかにガが省略されることにより、次節で述べる排他という機能が無くなるのは確かである。

(4)　誰かあの子どもを助けに行ってくれ。

という要請の答えとして

(5a)　私 ϕ 行きます。

(5b)　私が行きます。

(5c)　私は行きます。

の3つは、新旧情報という観点からは違いがみえなくても、対照比較機能の面では大いに差がある。(5a)は「(他の人がどうするを意識せず)行くことを志望する」というニュアンス、(5b)は「(他の人以上に)私(だけ)が志望する」という排他(総記)のニュアンス、(5c)には「私としては行くことを志望する(が、他の人は志望しないだろう/他の人はどうするのか/他の人はどうするかに関わりなく)」という対照的な意味が込められているように解釈される。以上ガについて述べたことは、主格助詞のみならず、対格助詞ヲそして他の格助詞にも当

てはまるようである。このことについては実験的に観察することが可能であると思われ、今後の実験的研究が期待される。なおハインズ・岩崎(1987)もハについて本論文と似たような議論を展開している。

2－3－(3)　対照と排他：ハとガの対照比較機能

ハとガの対照比較機能は強調的用法とも呼ばれている。次の例文を見ると、

(8)　私は人間です。

(9)　ロンはアメリカ人だが、ヤスは日本人だ。

(10)　車が走る。

(11)　私が社長です。

(9)のハが対照のハであり、(11)のガが排他(または総記)のガである。対照のハは、二つ以上のものを比較・対照的に表すときに用いられ、「それに対して」というような意味を持つ。この場合、対照されるものは(9)のように明示されている場合と、

(12)　私、大阪は行きませんでした。

のように、明示されない場合がある。排他のガは、ある集合の中で「~だけが」という意味を表す。(11)の文は、他の人は社長ではない、ということを暗示している。対照と排他は、よく似た性格を持つ機能であるが、区別すべきものである。例えば、A先生とB先生が生徒に囲まれて写っている写真のA先生を指さして、

(13)　この人は先生なのです。(隣の人は生徒ですが)

ということは可能だが、

(14)　この人が先生なのです。

ということは、B先生の存在を無視したことになるので、適切ではない。排他のガは該当するモノをすべてリスト・アップするという働きを持つからである。排他のガが総記exhaustive listingのガと呼ばれるゆえんである。

上に述べたような用法に対して、非強調的用法である(8)のハや(10)のガを、

Table 2-1　ハとガとヲの機能の比較

機能	ハ	ガ	ヲ
統語機能	主題の係助詞 (文末の述部に呼応)	主格の格助詞 (次の動詞句に呼応)	対格の格助詞 (次の動詞句に呼応)
(格の標示機能)	(なし)	(表層の主格を標示) (深層の格は動作主・被動作主、等)	(表層の対格を標示) (深層の格は被動作主等)
談話機能	(既出物を)旧情報提示 (初出物を)旧情報化	なし(新情報と共起)	なし(新情報と共起)
対象比較機能	対照 (vs. 中立判断)	排他 (vs. 中立叙述)	排他 (vs. 中立叙述)

それぞれ中立判断のハ・中立叙述のガと呼ぶことにしよう。実際の言語使用において、主題のハは中立判断か対照のどちらかであり、主格のガは中立叙述か排他のどちらかであるというように、論理的には[(5)]分類可能であるとするのが、筆者の立場である。ハが中立判断か対照かということと、その名詞句が新情報か旧情報かあるいは旧情報提示か旧情報化かということとの間には直接的な関連はない。これは、ガが中立叙述か排他かということと、その名詞句が動作主であるか被動作主であるかということと関係がないのと似ている。なお、中立叙述のこのようなハとガの対照比較的機能は、田原 (1985b) によると、日本語児は5歳頃から理解し始めるが、語順の要因に左右されずに判断できるのは中学生頃だとしている。

以上をまとめると、多重機能性の枠組みはTable 2–1のように整理されよう。

2－4　まとめ

以上、ハとガの問題について、多重機能性という観点から説明をしてきた。本章のテーマは、このような言語機能上の複雑さが獲得・習得を困難にすることを示すことであった。残された問題として、ハとガの省略の問題を最後に指摘しておきたい。話し言葉においては、両助詞ともしばしば省略され、助

詞なしの名詞句が頻出する。さらに、主格・主題にあたる名詞句全体が省略されることは、書き言葉においても普通のことであり、なんら非文法的ではない。このような省略の多用は、ハとガの発達と学習を遅らせるもう一つの重要な原因であると考えられるのである。省略可能性は、上述したように、機能によって異なり、Miyazaki (1979)の結果のように言語発達への影響も示唆されている。この様な機能上の複雑さと省略可能性の問題を他の言語とも比較していくことが必要である。なお、ハとガの脱落・省略に関する最近の発達的研究としてNakamura (1992)が注目される。

本書では、3つの機能のうち統語機能に的をしぼって、次章から検討を進めることにしよう。

註

(1)　このようなハとガの区別と同様の現象が、韓国語の主題助詞eun/neunと主格助詞i/gaにもみられる。唯一日本語だけの問題ではない。ましてや、日本人論的な問題ではない。

(2)　ガは、「主語ga+自動詞」文と、「主語ga+他動詞」文とで使われ、自動詞文では、主語にあたるのは有生名詞と無生名詞のいずれかであるが、他動詞文ではすべて有生行為者であったという。ガが2語発話の文型で使用されるのに対し、ハは、そのほとんどが、「カミハ?」「コレハ?」等「名詞句-wa?」の型で発話される。宮原らは、このハの機能を主題標識topic markerであるとし、主題となる対象名詞句を疑問形で表現することから始めると解釈した。Scollon (1977)のように、大人－子供の1語文のやりとりの中で2語文の発生をみるような見地を発展させ、主題－評言という完結した1文が大人－子供間で成立するという観点からすれば、上記の解釈が妥当かもしれない（ハの機能は、そもそも談話機能が主要であるから)。あるいは、この発話を「名詞句＋wa」という2語発話とみると、ハは相手に答えを促す疑問標識の語(あえていえば終助詞)であるとみなすことも可能であろう。

(3)　ハを諸機能の複合体とみなすのではなく“特立的強調”(尾上, 1979)や“取り立て”(吉本, 1982)等の用語を用いて諸機能から単一の概念を抽出しようという

立場もある。

(4)　多重機能性という用語は、Karmiloff-Smith (1979)がフランス語の冠詞の複雑な諸機能を表すために用いたplurifunctionalityの語に由来している。Ito & Tahara (1985)、田原・伊藤 (1985b)ではmultifunctionalityの語を多重機能性を表すものとして使用している。

(5)「論理的には」と断わったのは、実際の分析で対照あるいは排他であるかどうかを判断することが困難な場合があるからである。中立判断と対照、および中立叙述と排他の間の境界は非連続的であるとは言い難い。なお、両者の境界がはっきりしないこともあって、対照の用法は主題の用法から派生したと考える立場もある(例えば、尾上, 1979; 吉野, 1982)。なお、筆者らはこれまで、ある文中のハは対照のハか主題のハのどちらかであると考え、中立判断ということと主題ということを区別してこなかった。本論文からこの考えを改めたい。

第三章　日本語の単文理解の方略：日本人・二言語併用者・アメリカ人日本語教師・アメリカ人日本語学習者の比較

【要約】第三章は、日本語に対する成人の文理解の方略の実験的研究である。これは、第二章でいう助詞ハとガの統語機能を、発達的にではなく、大人についてのみ調べたものである。ここでは日本人母語話者の方略を日英二言語併用者・英日二言語併用者・アメリカ人日本語学習者の方略と比較している。第1言語で獲得された文理解の方略の様式が、第2言語における方略に影響を与えることが示された。実験は、日本語を母語とする成人話者に2つの名詞句と他動詞からなる単文を聞かせた。一方の名詞句にハまたはガが付いた場合と両方の名詞句に各々ハとガが付いている場合のそれぞれで、ガの付いた名詞句が他動詞の動作の主体(動作主)として選択される率がハのそれよりも高いこと、ハよりもガの動作主性が高くなるのは、ガが他動詞文で主格をあらわす格助詞であるのに対してハは主題提示の助詞であり格関係をあらわす機能を備えていないこと、しかし、実際の言語運用では動作主にあたる名詞句は主題化されることが多いことから、ハは文法的には格関係を示さないが言語使用経験に基づいた経験的・心理的機能として聞き手に動作主であると解釈させる力があること等が明らかにされた。この結果は4つの群に差が出ており日本語学習者ではこのようなハとガの違いが獲得されているとはいえず、むしろガの被動作主をあらわす文型との混同・類推からの解釈があったことが示唆された。二言語併用者(日英、英日)は、日本語母語話者と日本語学習者の中間的な反応があったことも明らかにされた。第1言語の第2言語に対する干渉と第2言語の第1言語に対する干渉が問題とされる。無生物を動作主として解釈することへの抵抗の度合の大きさ、逆からみれば動作主を決定するときの生物・無生物

による意味方略の強さの比較により、第1言語の際に用いた方略が第2言語を処理するときにも同じように用いられたことが示された。

3－1　問題

伊藤(1983a)は英語の単文理解について英語母語話者(アメリカ人学生)、二言語併用者(日本人アメリカ長期留学生)、英語非使用者(在日日本人学生)の三群の比較をおこなった。英語を母語とするものは語順を強力な統語的手掛りとして用いたのに対し、日本語を第1言語とするものにはそのような語順手掛りの活用が見いだされなかった。これは第1言語の第2言語に対する干渉作用として解釈された。本章では、日本語の単文理解について、日本語単一使用者、二言語併用者、アメリカ人日本語教師、アメリカ人日本語学習者の比較をおこなうこととする。

まず、日本語と英語の語の格標示の方法の違いについてみてみよう。英語の場合には、語順が統語上重要な位置を占めている。しかし、伊藤(1983a)に示されたように、アメリカ人が使用する統語方略は日英二言語併用者にさえ獲得されていない場合が圧倒的に多かったことは、英語の語順による統語が格標示の手掛りとしては複雑であることを示している。日本語では格を決定するのは、主に助詞である。「主に」と書いたのは、日本語は格助詞の省略が可能optionalであり、助詞なしの名詞句が使われたり、係助詞のハによって格助詞が代替されて格の標示が文の表面から消されたりすることがあるからである。

係助詞ハは文の主題を標示し、ガ・ニ・ヲ・ヘ等の格助詞が格を標示するのとはその任務を異にする。しかし、主題ハの名詞句は主格の名詞句と重なることが多いので、主格を標示するガとの区別が日本語文法上の問題として、これまで論議されてきており、本論文でも第二章で整理をおこなった。本章では、ハとガの“動作主性”agentivityに関する実験により、両助詞の統語機能の

比較を、成人の日本語母語話者・日英二言語併用者・英日二言語併用者・アメリカ人日本語学習者について行う。“動作主性”とは、「能動文中で、ある助詞が名詞についたとき、その名詞句が動作主となる蓋然性 probability」であると定義する(伊藤, 1982b)。本章では、この「動作主性」の数量化を試みる。

さて、以上の助詞の問題に立ち入る前に、助詞のない文(助詞無し文)を処理する上で、どのような方略を使用するかを調べることもおこないたい。助詞なし文は日本語において受容される acceptable という現実的な理由からも興味深いし、助詞の要因を除外することで、英語に関する先行研究(伊藤, 1982a)との直接比較が可能になるという利点もあるからである。

本実験の主な目的は、日本語単文理解における格の決定の方略を、第2言語学習者と二言語併用者について調べ、日本語単一使用者と比較することである。具体的には、以下に示す(1)、(2)、(3)を明らかにすることを目的とする。

(1)　日本語の助詞なし文に対してどのような文理解の方略を使用するのかを、日本語単一使用者群、日英二言語併用者群、(アメリカ人)日本語教師群、(アメリカ人)日本語学習者群で明らかにし、それぞれの群を比較する。

(2)　日本語の助詞有り文(助詞が名詞についている文)において、主題 topic を標示する係助詞ハと主格の格助詞ガが名詞句に付いた場合、それらの助詞が付いた名詞句を動作主として文処理する傾向がハとガでどの程度異なるのかを、それぞれ4群について調査する。

(3)　助詞無し文と助詞有り文の処理方略の違いを各被験者群内、各被験者群間で比較する。

3－2　方法

3－2－1　被験者

日本語に対する言語経験の違いを考慮に入れて以下の4群を構成した(合計29名)。

1. 日本語単一使用者群　Japanese monolinguals (男4名、女4名)

アメリカの大学へ大学院生、客員研究者として来ている日本人。実際は二言語併用の生活をしているわけであるが、生後より少なくとも大学卒業までは、日本語で生活をし、日本語による教育を受けてきており、また、滞米期間は1ヶ月～10ヶ月と比較的短いので、本実験では、便宜上、日本語単一使用群と位置づける。

2. 日英二言語併用者群　Bilinguals (男5名、女3名)

日本語を第1言語とする両親を持ち、本人の第1言語も日本語であるが、青年期以前より長期にわたり英語的環境の中で生活し、英日両語が堪能な大学生。滞日年数は5年以内であり、主に米国で学校教育を受けてきている。

3. 日本語教師(アメリカ人)群　American Teachers of Japanese as a Second Language (男3名、女2名)

日本語または日本学を専攻するアメリカ人大学院生でTeaching assistantとして大学で日本語教師をしている。日本語に習熟しており、充分な知識を備えている。いずれも日本語の学習を開始した時期は、大学入学以降である。すべて、日本で英会話教師等で働いたり日本の大学へ留学した経験を持つ。在日期間は1年間～3年間であった。

4. 日本語学習者(アメリカ人)群　American Learners of Japanese Language (男4名、女4名)

アメリカ人の学生で、大学の授業で日本語を外国語として一年以上受講してきており、現在も学習中の者。日本語の学習開始は大学入学以降である。週5回の授業で基本的な文法知識は持っているが、日本語使用経験が豊富とはいえない群である。

3－2－2　刺激文

〔助詞無し文〕‥‥2つの名詞と1つの動詞の組み合わせから成る助詞なし文において、3つの語順(NVN, VNN, NNV)と3つの名詞の意味の組み合わせ(AA, AI, IA)からなる9種類の文型が、2文ずつ合計18文が各被験者に提示された。

Table 3–1　助詞有り文のタイプ

刺激文のタイプ

	語順	助詞	意味	文型		文例		
A 主題標示文	NNV	はφ	AA	(1)	AハA　V	鹿ハ	馬	たたいた
			AI	(2)	AハI　V	鹿ハ	箱	たたいた
			IA	(3)	IハA　V	箱ハ	鹿	たたいた
		φは	AA	(4)	A　AハV	鹿	馬ハ	たたいた
			AI	(5)	A　IハV	鹿	箱ハ	たたいた
			IA	(6)	I　AハV	箱	鹿ハ	たたいた
	NVN	はφ	AA	(7)	AハV　A	鹿ハ	たたいた	馬
			AI	(8)	AハV　I	鹿ハ	たたいた	箱
			IA	(9)	IハV　A	箱ハ	たたいた	鹿
		φは	AA	(10)	A　V　Aハ	鹿	たたいた	馬ハ
			AI	(11)	A　V　Iハ	鹿	たたいた	箱ハ
			IA	(12)	I　V　Aハ	箱	たたいた	鹿ハ
	VNN	はφ	AA	(13)	V　AハA	たたいた	鹿ハ	馬
			AI	(14)	V　AハI	たたいた	鹿ハ	箱
			IA	(15)	V　IハA	たたいた	箱ハ	鹿
		φは	AA	(16)	V　A　Aハ	たたいた	鹿	馬ハ
			AI	(17)	V　A　Iハ	たたいた	鹿	箱ハ
			IA	(18)	V　I　Aハ	たたいた	箱	鹿ハ
B 主格標示文	NNV	がφ	AA	(19)	AガA　V	鹿ガ	馬	たたいた
			AI	(20)	AガI　V	鹿ガ	箱	たたいた
			IA	(21)	IガA　V	箱ガ	鹿	たたいた
		φが	AA	(22)	A　AガV	鹿	馬ガ	たたいた
			AI	(23)	A　IガV	鹿	箱ガ	たたいた
			IA	(24)	I　AガV	箱	鹿ガ	たたいた
	NVN	がφ	AA	(25)	AガV　A	鹿ガ	たたいた	馬
			AI	(26)	AガV　I	鹿ガ	たたいた	箱
			IA	(27)	IガV　A	箱ガ	たたいた	鹿
		φが	AA	(28)	A　V　Aガ	鹿	たたいた	馬ガ
			AI	(29)	A　V　Iガ	鹿	たたいた	箱ガ
			IA	(30)	I　V　Aガ	箱	たたいた	鹿ガ
	VNN	がφ	AA	(31)	V　AガA	たたいた	鹿ガ	馬
			AI	(32)	V　AガI	たたいた	鹿ガ	箱
			IA	(33)	V　IガA	たたいた	箱ガ	鹿
		φが	AA	(34)	V　A　Aガ	たたいた	鹿	馬ガ
			AI	(35)	V　A　Iガ	たたいた	鹿	箱ガ
			IA	(36)	V　I　Aガ	たたいた	箱	鹿ガ

	語順	助詞	意味	文型		文例		
C 主題－主格標示文	NNV	は/が	AA	(37)	AハAガV	鹿ハ	馬ガ	たたいた
			AI	(38)	AハIガV	鹿ハ	箱ガ	たたいた
			IA	(39)	IハAガV	箱ハ	鹿ガ	たたいた
		が/は	AA	(40)	AガAハV	鹿ガ	馬ハ	たたいた
			AI	(41)	AガIハV	鹿ガ	箱ハ	たたいた
			IA	(42)	IガAハV	箱ガ	鹿ハ	たたいた
	NVN	は/が	AA	(43)	AハV　Aガ	鹿ハ	たたいた	馬ガ
			AI	(44)	AハV　Iガ	鹿ハ	たたいた	箱ガ
			IA	(45)	IハV　Aガ	箱ハ	たたいた	鹿ガ
		が/は	AA	(46)	AガV　Aハ	鹿ガ	たたいた	馬ハ
			AI	(47)	AガV　Iハ	鹿ガ	たたいた	箱ハ
			IA	(48)	IガV　Aハ	箱ガ	たたいた	鹿ハ
	VNN	は/が	AA	(49)	V　AハAガ	たたいた	鹿ハ	馬ガ
			AI	(50)	V　AハIガ	たたいた	鹿ハ	箱ガ
			IA	(51)	V　IハAガ	たたいた	箱ハ	鹿ガ
		が/は	AA	(52)	V　AガAハ	たたいた	鹿ガ	馬ハ
			AI	(53)	V　AガIハ	たたいた	鹿ガ	箱ハ
			IA	(54)	V　IガAハ	たたいた	箱ガ	鹿ハ

N：名詞，V：動詞，A：生物名詞，I：無生物名詞，ϕ：は助詞を付けないことを示す。

〔助詞有り文〕‥‥2つの名詞と1つの動詞からなる文において、Table 3–1に示したように、2つの名詞に後置される助詞の組み合わせ6種類の各々に、3種の語順と3種の名詞の組み合わせで、6×3×3=54文型を各々1文ずつ計54文が各被験者に提示された。

以上の総計72個の単文をランダム配置した刺激文のセットを2個つくり、日本語のnative speakerに1文あたり約5秒の長さで10秒間隔で読んでもらい、それをカセットテープに録音した。各々の被験者には、2つのうちのどちらかのセットが与えられた。

3－2－3　手続き

演示法による文理解の実験手続きは伊藤(1982a)およびKilborn & Ito (1989)の実験Iに準拠している。なお、実験はすべてカリフォルニア州バークレー市内でおこなわれた。

3－3　結果

3－3－1　分析方法

第1名詞が動作主として選択されたら、助詞有り文の場合2点、助詞無し文の場合1点とし、第2名詞が選択されたら0点として点数化した。それに基づいて(A)被験者群(4水準)×(B)助詞(7水準)×(C)語順(3水準)×(D)名詞の意味(3水準)のrepeated measureのある4要因の分散分析を重みをつけない平均法[1](unweighted means)によっておこなった結果をTable 3–2に示す。

助詞の関与する交互作用では、被験者群×助詞、助詞×語順×意味、助詞×語順、助詞×意味が有意であり、助詞の主効果も有意であった。助詞の関与しない交互作用では被験者群×語順のみが有意であった。また語順の主効果と意味の主効果が有意であった。

語順の関与する交互作用と主効果が有意であったので、まず助詞無し文、次に助詞有り文についての結果をみてゆくことにしよう。

3－3－2　助詞無し文

助詞のつかない文においては、動作主選択の手掛りは語順と名詞の意味の2要因である。この2要因による文型ごとの第1名詞選択率をFig. 3–1とFig. 3–2に示す。各被験者群ごとにrepeated measureのある二要因の分散分析を行った。

語順×意味の交互作用は全群に有意差がなかった。

語順の主効果は、日本語学習者群では有意であった($F(2,14)=4.754$, $p<.05$)が、日本語教師群($F(2,8)=3.607$)、二言語併用者群($F(2,14)=3.212$)、日本語単一使用者群($F(2,14)=2.116$)には5%水準で有意差がみられなかった。各被験者群と語順の各水準ごとの第1名詞選択率をFig. 3–1に示す。全群ともNNV型すなわち日本語の規準的語順の場合に最も第1名詞の選択率が高く(77%～90%)全群有意であった(Critical Ratioによる$p<.01$)。次にNVN型の場合に多く(58%～67%)、

Table 3–2 Summary of ANOVA

Source	SS	d.f.	MS	F–ratio
SUBJECT GROUP (A)	2.095	3	.698	.651
ERROR (S/A)	26.779	25	1.071	
PARTICLE (B)	487.493	6	81.248	72.672***
A × B	82.986	18	4.610	4.123***
ERROR (BS/A)	167.746	150	1.118	
WORD ORDER (C)	10.375	2	5.187	3.629*
A × C	23.569	6	3.928	2.748*
ERROR (CS/A)	71.479	50	1.429	
MEANING (D)	132.509	2	66.254	44.406***
A × D	6.721	6	1.120	.750
ERROR (DS/A)	74.617	50	1.492	
B × C	27.097	12	2.258	4.617***
A × B × C	15.770	36	.438	.895
ERROR (BCS/A)	146.871	300	.489	
B × D	37.363	12	3.113	7.027***
A × B × D	15.111	36	.419	.945
ERROR (BDS/A)	132.966	300	.443	
C × D	1.377	4	.344	.980
A × C × D	6.595	12	.549	1.568
ERROR (CDS/A)	35.028	100	.350	
B × C × D	13.417	24	.559	1.644*
A × B × C × D	24.172	72	.335	.985
ERROR (BCD/A)	204.139	600	.340	

* $p<.05$ *** $p<.001$

VNN 型の場合には最も選択率が低かった (43% ~ 63%)。VNN 型と NVN 型で有意に第 1 名詞を多く選択したのは日本人群のみであり (各々 63%, 67%)、VNN 型では、他の 3 群はむしろ第 2 名詞を選択する率が有意とはならなかったが多い傾向にあった (43% ~ 50%)。すなわち、日本語単一使用者では語順の要因が異なっても、それが第 1 名詞選択率に与える影響は少ない。これに対して、アメリ

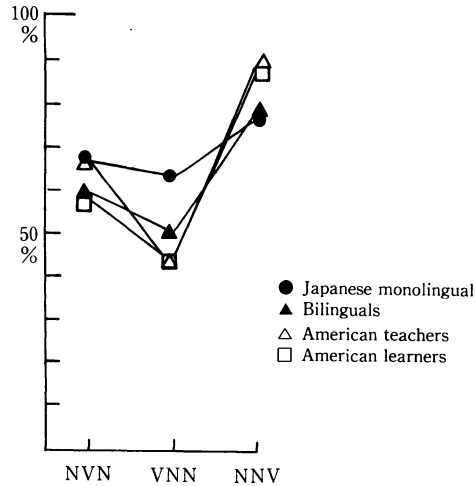

Fig. 3–1 Percent choice of the first noun as agent in Japanese sentences WITHOUT partcles: Subject group by WORD ORDER.

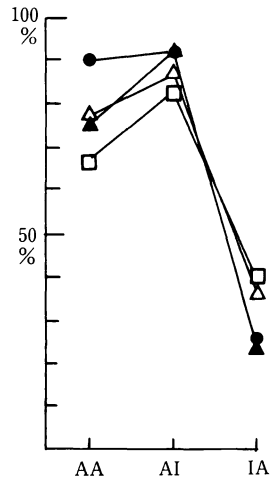

Fig. 3–2 Percent choice of the first noun as agent in Japanese sentences WITHOUT partcles: Subuject group by ANIMACY.

カ人の日本語学習者では日本語の規準的語順(NNV)の場合、語順に基づく第1名詞の選択が多い(88%)が、非規準的語順(NVN, VNN型)ではチャンスレベルの範囲に入っていた(CRより両方とも5%水準で有意差なし)。

意味の主効果は、日本人群(F (2,14)=19.803, p<.001)、二言語併用者群(F (2,14)=37.263, p<.001)、日本語学習者群(F (2,14)=7.996, p<.01)、日本語教師群(F (2, 8)=5.558, p<.05)の全群すべてに有意差が見られた。Table 3–3に見られるように、日本人群と二言語併用者群の方が日本語を第2言語とするアメリカ人2群よりも意味方略使用の頻度が高い。意味方略使用率は、日本人が67%、二言語併用者が69%、日本語学習者が43%、日本語教師が50%となっており、日本語を第1言語とする者は、英語を第1言語とする者より意味方略を多用することを示している。

Table 3–3 Percent Use of Meaning Strategy(PUMS) in Japanese sentences WITHOUT particle(s)

SUBJECT GROUP	NVN	VNN	NNV	MEAN
Japanese Monolinguals	87	62	50	67
Bilinguals	94	56	56	69
American Teachers of Japanese Language	70	50	30	50
American Learners of Japanese Language	43	50	37	43
MEAN	74	55	43	58

ただし、意味の手掛りのない場合(AA型)には、各群の第1名詞選択率は67%~90%であり、第1名詞を選択する傾向が、4群とも有意(CRで p <.05)であった。

全群のデータを語順と意味の二要因について分散分析してみると、交互作用が有意であった(F (2,100)=3.393, p<.05)。これは各語順ごとの意味方略使用率(PUMS)を示したTable 3–3に見られるように、NNV型では、第1名詞を選択す

る率が高まり、意味方略の使用率が低下したことの反映であろう。

3－3－3 助詞有り文

助詞の組み合わせ別の全群の第1名詞の選択率を比較してみると選択率の高い順より、〔ガ/φ〕(84%)>〔ハ/φ〕(78%)>〔φ/φ〕(助詞無し文:65%)>〔ガ/ハ〕(59%)>〔ハ/ガ〕(36%)>〔φ/ハ〕(18%)>〔φ/ガ〕(14%)となる。助詞有り文の6文型を、Table 3–1 にしたがって、次の3つのグループに分けてみよう。

A　主格標示文:〔ガ/φ〕〔φ/ガ〕

B　主題標示文:〔ハ/φ〕〔φ/ハ〕

C　主題・主格標示文:〔ハ/ガ〕〔ガ/ハ〕

Aグループでガが付いている名詞句を動作主として選択する率(以下「ガ選択率」と略)は、Bグループでハが付いている名詞句を動作主として選択する率(以下「ハ選択率」と略)よりも高かった(85%対80%)。また、Cグループのガ選択率(61.5%)は、Aグループのガ選択率、Bグループのハ選択率よりも低かった。Cグループ内ではガ選択率がハ選択率(38.5%)よりも高かった。

しかし、助詞×被験者の交互作用が有意であったので、これらの全般的傾向は4つの被験者グループすべてに該当するとはいえない。そこで、被験者群の比較を助詞の各グループごとに見ていくことにしよう。

A. 主格標示文のグループ

Fig. 3–3は、ガとφ(φは助詞を付けないことを示す)から成る助詞有り文の2文型〔ガ/φ〕〔φ/ガ〕それぞれについて、ガ選択率を各群ごとに示したものである。各被験者群ごとの〔ガ/φ〕文型のガ選択率(75～100%)も、〔φ/ガ〕文型のガ選択率(74～90%)もすべて有意に高かった(CRによるとすべて $p<.001$)。しかし、分散分析による群間差は両文型とも有意であった(〔ガ/φ〕‥‥$F(3,25)=2.937, p<.05$;〔φ/ガ〕‥‥$F(3,25)=3.146, p<.05$)。二群ごとの比較をおこなうと、〔ガ/φ〕文型においては、日本人群は、日本語学習者群、二言語併用者及び日

本語教師群よりも有意に高かった。(各々 F (1,14)=6.23, p<.05 ; F (1,14)=12.70, p<.01 ; F (1,11)=16.66, p<.01)。また〔φ/ガ〕文型では、日本語学習者群が、日本人群と二言語併用者よりもガ選択率が有意に低かった。(それぞれ F(1,14) = 6.63, p<.05 ; F (1,14)= 5.03, p<.05)。両文型に共通して、日本人群のガ選択率が最も高く、日本語学習者が最も低い。そして、二言語併用者と日本語教師は両群の中間に位置している。そして、二言語併用者群では、2文型間の差が最も大きかった(〔ガ/φ〕型«92%»と〔φ/ガ〕型«81%»の差は11%)。

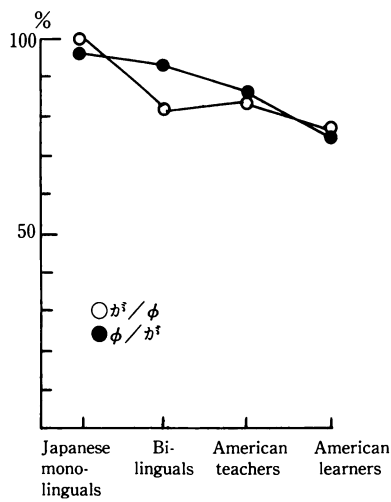

Fig. 3–3　Percent choice of NP–ga as agent in [ga/φ] and [φ/ga] sentence types

B. 主題標示文のグループ(〔ハ/φ〕、〔φ/ハ〕)

〔ハ/φ〕文型では、被験者群の主効果は5%水準で有意ではなかった (F (3,25) =1.00)。Fig. 3–4 に見られるように、ハ選択率は71%～85%の範囲内であり群間差が小さかったためである。

〔φ/ハ〕文型でも、被験者群の主効果は5%水準で有意ではなかった (F (3,25) =.062)。この場合も、Fig. 3–4 にみられるように、ハ選択率は81%～84%であり群間差がほとんどなかったためである。

両文型でのハ選択率は、4群すべて有意に高かった(CRにより、すべて $p < .01$)。

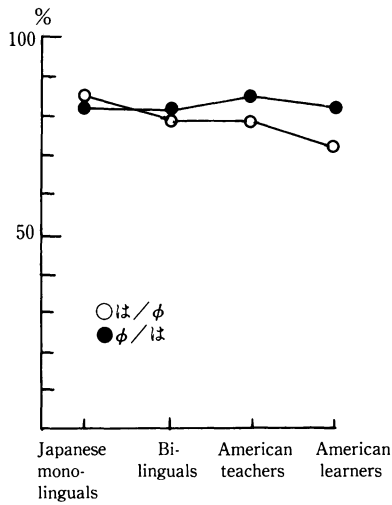

Fig. 3–4 Percent choice of NP–wa as agent in [wa/ φ] and [φ /wa] sentence types

C. 主題・主格標示文のグループ(〔ガ/ハ〕文型と〔ハ/ガ〕文型)

Fig. 3–5は〔ガ/ハ〕文型、〔ハ/ガ〕文型それぞれについて、ガ選択率を4群について示したものである。〔ガ/ハ〕文型では、被験者群間のガ選択率に有意に差があった($F(3,25)=11.162$, $p<.001$)。ガ選択率は日本人群(78%)と二言語併用者(67%)と日本語教師群(67%)の場合それぞれ有意に高かった(CRにより、$p<.05$)が、日本語学習者ではガ選択率が25%であり、チャンス・レベルより有意に低かった(CRは$p<.001$)。

〔ハ/ガ〕文型でも、被験者群間でガの選択率に有意差がみられた($F(3,25)=4.794$, $p < .01$)。日本人群のガ選択率(87%)は有意に高く(CRによって、$p < .001$)、日本語教師のガ選択率(69%)も有意に高かった(CRによって$p < .05$)が、二言語併用者群の場合(57%)と日本語学習者群(44%)ではチャンスレベルの範囲にあった。

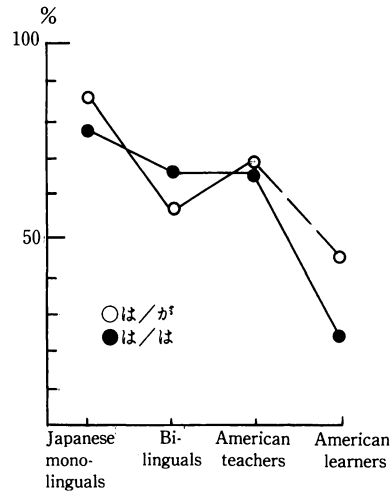

Fig. 3–5　Percent choice of NP–ga as agent in [ga/ ϕ] and [ϕ /ga] sentences types

3－3－4　助詞有り文における第1名詞方略

助詞の要因を除外して、第1名詞が第2名詞よりも動作主として選択されやすいかどうかの傾向をみるために、以下のように「第1名詞方略使用率」を定義し、助詞有り文の3つのグループA（主格標示文）、B（主題標示文）、C（主題•主格標示文）それぞれについて、日本人群、二言語併用者群、日本語教師群、日本語学習者群ごとに「第1名詞方略使用率」を求めた。

第1名詞方略使用率　f (%)=X1+ X2 － 100 (%)

（ただし、X1、X2は同一グループ内の各々の文型の第1名詞選択率の平均）

もしも、ある被験者が，助詞や意味の要因を無視して、必ず第1名詞を選択すれば、f=100 (%) となり、必ず第2名詞を選択すればf=－ 100 (%) となる。また、助詞や意味の要因のみに基づいて動作主を選択するとf=0 (%) となる。全くランダムに反応した場合でも、期待値はf=0 (%) となる。

各グループ別の「第1名詞方略使用率」の平均をTable 3–4に示す。助詞の文型のグループ別の各被験者群ごとの第1名詞方略使用率の範囲は－19%～+10%であり、全体的に第1名詞を選択する方略が採用されていないことを示唆している。

Table 3–4 First Noun Strategy

Percent Use of First Noun as Agent Strategy
in each sentence group by particles

	A ga+ ϕ	B wa+ ϕ	C ga+wa	MEAN
Japanese Monolinguals	+4	+3	–9	–1
Bilinguals	–11	–2	+10	–1
American Teachers of Japanese Language	–2	–6	–2	–3
American Learners of Japanese Language	+1	–11	–19	–10
MEAN	–2	–4	–5	–4

3－3－5　助詞有り文における語順と意味の要因

助詞有り文における語順と意味の要因の分散分析では、語順×意味の交互作用と語順の主効果は有意ではなかったが、意味の主効果は有意差が見られた($F(2,50)=13.380, p<.001$)。助詞有り文の助詞の組み合わせによる6種の文型ごとに、意味の主効果を分析してみると6文型ともすべて有意であった($7.370 \leqq F(2,50) \leqq 16.781, p<.01$)。すなわち、助詞有り文においては、語順による手掛りは使用されないという点で助詞無し文との相違点を持つが、意味の手掛りは(助詞無し文より使用の度合は有意に少なかったものの)助詞無し文と同じように文処理の手掛りとして使用されたことが明らかになった。

意味の手掛りの使用の度合いを比較するために助詞の文型別に意味方略使用率(PUMS)をTable 3–5に示す。PUMSとは{【AI型の文で第1名詞を動作主

として選択した率(%)】－【IA 型の文で第1名詞を動作主として選択した率(%)】}で算出される値である。もし被験者が助詞の種類、位置とは無関係に生物名詞を動作主として常に選択すればPUMSは100%、もし常に無生物名詞を動作主として選択すれば－100%、もし生物・無生物といった意味的手掛りに全く依存せず動作主を決定すれば0%となる。6文型を比較すると〔ガ/ハ〕型>〔φ/ハ〕型>〔ハ/φ〕型>〔ハ/ガ〕型>〔φ/ガ〕型>〔ガ/φ〕型の順に意味方略使用率は低くなっている。

Table 3–5 Percent Use of Meaning Strategy (PUMS) in Japanese sentences WITH particle(s)

Percent Use of Meaning Strategy in Each Particle Level

SUBJECT GROUPS	[ga/ø]	[ø/ga]	[wa/ø]	[ø/wa]	[ga/wa]	[wa/ga]	MEAN OF MARKED SENTENCES	MEAN OF UNMARKED SENTENCES	MEAN
Japanese Monolinguals	0	13	38	42	25	25	(24)	67	30
Bilinguals	42	25	34	42	41	42	(38)	69	42
American Teachers of Japanese Language	20	20	40	33	53	33	(33)	50	36
American Learners of Japanese Language	8	17	29	30	46	13	(24)	43	27
MEAN	18	19	35	37	42	28	(30)	58	34 (%)

3－3－6 助詞と語順

日本語助詞有り文の6種類の文型について、被験者群の要因と語順の要因を分散分析してみた。その結果、〔ガ/ハ〕型では語順の主効果 ($F(2,50)=3.636$, $p<.05$) と被験者群×語順の交互作用 ($F(6,50)=2.318$, $p<.05$) が有意であった。また〔φ/ガ〕型では語順の主効果が有意だった ($F(2,50)=3.203$, $p<.05$)。

〔ガ/ハ〕型においては、全群でのガ選択率は、NVN 型が68%、VNN 型が60%、NNV 型が50%である。規準的語順(NNV)の場合には、ガの選択率とハの選択率が半々になっているが、非規準的語順(NVN と VNN)では、ガ選択率

の方が多い。この傾向は日本人群で最も顕著 (NVN : 96%, VNN : 85%, NNV : 50%) であり、二言語併用者群と日本語教師群にも現れた。しかし、日本語学習者群においては、ガ選択率は、NVN 型 : 21%、VNN 型 : 17%、NNV 型 : 38% となっており、ハ選択率がむしろ全般的に多い (75%) 中で、規準的語順において、ハ選択率が最も少なくなっている。

〔φ / ガ〕型では、全群のガ選択率の平均は、NVN 型 86%、VNN 型 93%、NNV 型 80% となっており、規準的語順で最も低い。被験者×語順の交互作用が有意でなかったとはいえ、日本人群と日本語学習者群との比較は興味深い。すなわち、日本人群では NNV、VNN、NVN の 3 文型とも 96% のガ選択率があったのに対して、日本語学習者群では、NVN 型 79%、VNN 型 87%、NNV 型 54% となっており、規準的語順の場合の選択率がむしろ低い。助詞の位置が異なる〔ガ / φ〕型で同様の比較を行なうと、日本人群は 3 文型とも 100% であったのに対し、日本語学習者では、NVN 型 67%、VNN 型 63%、NNV 型 96% となって、規準的語順の場合の方がガ選択率が高い。

主格標示文である〔ガ / φ〕文・〔φ / ガ〕文の 2 文型の結果を総合すると次のことがわかる。すなわち日本人は一貫してガのついた名詞を動作主として選択したのに対し、アメリカ人日本語学習者は、規準的語順と非規準的語順では反応のタイプが違っている。日本語学習者は、規準的語順の場合は非規準的語順の場合よりも、第 1 名詞を動作主として選択する率が高かったのである。第 1 名詞方略の強さとガの助詞方略の強さは、〔φ / ガ〕の文型の場合より推定できる。第 1 名詞方略と助詞方略では動作主が対立するからである。この文型に対する第 1 名詞選択率が日本語学習者群において、54% であったことは、第 1 名詞方略と助詞方略が拮抗しており、それぞれほぼ半分の割合で使用されていることを示していると思われる。ちなみに〔φ / ガ〕文型での意味方略使用率は、日本語学習者の場合 17% であり、全群の平均 (19%) と比べても差はほとんどなく、意味の手掛りは多く使用されなかった。

3－4　考察

3－4－1　助詞無し文処理のための方略について：英語データとの比較

格決定に最も重要な役割を果たす助詞が文中にない助詞無し文は、手掛りが語順と名詞の意味の二要因に限られる。すなわち、英語と日本語助詞無し文とは同一構造を持っているので比較が容易である。

伊藤(1982a)の英語による実験結果と本章の日本語助詞なし文の実験結果を比較すると、以下に挙げる共通点を指摘できよう。

まず第一に、英日両語とも規準的語順(英語のNVNと日本語のNNV)の場合に、第1名詞選択率が最も高いことがあげられる。第二に、日本語単一使用群は、非規準的語順の場合でも第1名詞の選択が多く、規準的語順の場合との差が小さいのに対して、英語文理解におけるアメリカ人の英語単一使用者と日本語文理解における(アメリカ人の)日本語学習者では、非規準的語順における第1名詞の選択率が低いことが両実験の共通点として挙げられる。第三の両実験の共通点は、語順への感受性の問題として、二言語併用者が、両言語の単一使用者の中間的反応をおこなっていたという点であろう。英語単一話者は選択的に(規準的語順のみ)第1名詞を動作主とするし、日本語単一話者は非選択的全般的に第1名詞を動作主とみなし、二言語併用は両者の性格を半々に持っていると大雑把にとらえることができるのである。

意味方略の比較に目を向けると、意味方略が全群にあらわれたことが両実験の第4の共通点である。しかし、同時に、日本語単一話者と英語単一話者とでは反応に違いが認められる。すなわち、日本語単一話者は、英語単一話者よりも意味方略の使用が多く、両実験において、このことは一致していた。これが第5の共通点である。第6の両実験の共通点は、二言語併用者の場合、意味方略の使用が多い点である。

さらに、意味の手掛りのないAA文型の場合の第1名詞選択率に日英両言語

で共通した傾向があることが、第7の両実験における共通点である。すなわち、第1名詞選択率が日本語単一使用者群で最も高率(日本語90%；英語85%)で、次に二言語併用者群が高く(日本語75%；英語70%)、いちばん低いのは、英語単一使用群(日本語67%；英語47%)であった。

以上で述べた伊藤(1982a)の英語の実験結果と本章の日本語助詞なし文での実験結果との7つの共通点をまとめてみよう。英語の単文理解と日本語の助詞無し文理解においては、第2言語学習者に採用された方略は、対象言語target languageに固有の手掛りによる方略(e.g.英語における統語方略)ではなく、むしろ、各々の第1言語習得の過程においてあらわれた方略であったということである。第1言語が英語であるアメリカ人の日本語学習者の用いた日本語文理解の方略は、

• もし、文が規準的語順(NNV)であれば、第1名詞を動作主として選択せよ。

• もし、文が規準的語順でないならば、語順は文処理の手掛りから外せ。

であった。これは、Bates *et al*. (1981)における、統語方略獲得前の英語児の単文理解のパターンと全く同じである。

一方、第1言語が日本語である在日日本人の英語単文理解の方略は、

(1)「第1名詞＝動作主」とせよ(語順が規準的かどうかに関係なく)

または、

(2) 語順は無視して意味を手掛りとせよ。もし意味の手掛りがなければ、第1名詞＝動作主とせよ。

の両者のどちらか(被験者によって両方使う場合もあった)である。これらの方略は、助詞を理解する前の日本語児に見られた方略と同じである(Hayashibe, 1975, 岩立, 1980, etc.)。

英語における非規準的な語順や、日本語における助詞なし文の場合のように、統語的規則が発見できない(しずらい)文を処理しようとする場合、大人と子どもは、第1言語が同じであれば同じ方略を使用することが明らかになった。

この現象は、第2言語獲得過程で生じる第1言語からの干渉作用の実例とし

てとらえられる。しかし、第1言語の文法的な諸規則に基づく方略(英語の統語方略と日本語の助詞方略)を機械的・類推的に適用しているのではないということに注意すべきであろう。

3－4－2　ハとガの動作主性

日本人においては、ガはハよりも動作主性が強いと結論できる。その理由は、1.主格標示文と主題標示文との動作主の選択率を比較すると、ガで標示された名詞はハで標示された名詞よりも動作主と理解される率が高いし、2.主題・主格標示文では、ガのついた名詞を動作主とみなす傾向が有意に強かったからである。

一方アメリカ人日本語学習者におけるハとガの動作主性の強さは、日本人の場合と違っている。まずハとガのついている名詞を動作主として選択する率は両方有意であったが、両者間には選択率の差がない。次に主題・主格標示文を見ると、日本人とは逆に、むしろハの動作主性がガの動作主性よりも大きく、〔ガ/ハ〕の助詞文型では、ハの選択率が有意に大きい。

二言語併用者とアメリカ人日本語教師は、主格標示文の反応は上記両群の中間に位置している。主題・主格標示文でも両者の中間的な反応傾向ではあるが、動作主性は、ガ>ハであり、日本人の反応タイプに近くなっている。

なぜ、日本語学習者群のみにハがガより動作主になり易い傾向が現れたのであろうか。

理由として考えられるのは格助詞のガの二重性である。ガの二重性とは、ガは主に主格の助詞として使用されるが、目的格(対象格)objectiveとして使用される場合もあることである。すなわち希望、能力、好悪などを示す動詞(「所動詞」とも呼ばれる)の文中でも、ガのついた名詞は、通常その動詞の目的語となる。さらに、以下の(a)(b)(c)の例で示されるように、動作主にあたる名詞にはハが付く場合が多い。

(a)　私は犬が好きです。

(b)　カンガルーはボクシングができる。

(c)　ぼくはコーラが飲みたい。

本研究での刺激文に使われた動詞はすべて「ヲ」または「ニ」を目的格の助詞として取る他動詞ばかりであったが、いわゆる所動詞が文中にある場合と混同してしまった可能性が考えられるのである。この説明は、第五章で改めて論じたい。

以上をまとめると、日本語成人母語話者における統語方略とは、助詞の種類を手掛りにする方略であり、助詞の位置や語順は格決定の手掛りとしない。ガもハも動作主の標識 marker として働くが、一文中にハとガの両方が現れた場合には、ガが動作主となる。しかし日本語学習者の場合には、ガよりもハの動作主性が強かった。

3－4－3　助詞有り文における助詞の位置

助詞有り文における助詞の位置の要因は、3つの助詞グループの第1名詞方略使用率によって検討できる。第1名詞方略使用率は全般的に低い。主格標示文と主題標示文とでは、助詞が第1名詞に付いても（規準的位置）、第2名詞に付いても（非規準的位置）、その助詞の動作主性が変動することはほとんどなかった。日本語児の研究 (Hakuta, 1977. 1979) では、第1名詞＋ガのみが動作主として理解される時期の存在が認められている。これと同様に本実験では主格標示文の NNV 型において、日本語学習者群のみに、第1名詞＋ガではガが選択率が高い (96%) のに、第2名詞＋ガではガ選択率がチャンス・レベル (54%) にあった。すなわち、日本語の獲得において、第1言語獲得（日本人幼児）と第2言語学習（アメリカ人学生）の過程に同一の方略が見出されたことは、きわめて興味深い。同一の言語の習得の過程において、第1言語の場合と第2言語の場合とに方略使用上の変化の観点からみて共通の段階が現れたことは、両者の獲得過程の共通性の一つの証拠となるであろう。

主題・主格標示文の場合には、日本語学習者は、ガよりもハの方が動作性が

高いと解釈している。さらに〔ガ/ハ〕語順の方が〔ハ/ガ〕語順よりもハの動作主性が高くなっている。

この理由としてまず考えられるのは、主格標示文NNV型に対する反応と同じように、日本語学習者群が主題・主格標示文にも第1名詞+ガ=動作主という方略を適用するのではないかということである。確かに〔ガ/ハ〕型と〔ハ/ガ〕型の反応のひらき、すなわち第1名詞方略使用率(19%)が相対的に高いことからこの説明が成立するかのようである。しかし、実は第1名詞+ガの場合(〔ガ/ハ〕型)よりも、第2名詞+ガの場合(〔ハ/ガ〕型)にむしろガ選択率が高いのである。したがってこの第一の理由からは全く説明がつかない反応なのである。

そこで、正しい説明として考えられるのは、日本語の主題・主格標示文における助詞の規準的位置の問題によるものであろう。

(d)　サカナはネコが食べた。

(e)　ネコがサカナは食べた。

(d)の文型すなわち〔ハ/ガ〕文型は目的語を主題化した文としてよく見かけるが、(e)の文型(〔ガ/ハ〕)文型はあまり用いられず、せいぜい目的語を対照させる(e.g.マタタビは食べなかったがサカナは食べた)ために使われる稀な文型であろう。頻出する規準型文型であるために、ガを目的格標識と取り違える誤りが減少したのだと考えられよう。

アメリカ人日本語学習者群において、助詞が規準的な位置にある方が、非規準的な位置にある場合よりも、日本語単一使用者の反応により近づくということが、主格標示文にも主題・主格標示文にもみられたのである。これは、日本語を第2言語として学習し習得する過程において、助詞が規準的位置にある場合にこそ、助詞の手掛りが正しく働きやすいことを示している。そしてこのことは、Hakuta (1977, 1979)の研究で見出された事実、すなわち助詞が規準的位置にあったばあい(=第1名詞+ガ)、日本語幼児はより正しく反応できたことと符合している。助詞の位置が規準的である場合が、そうでない場合よ

りも文理解が容易である段階が、日本語幼児にも大人の日本語学習者にも共通に現れたことは、第1言語習得と第2言語学習の獲得過程の共通性の一つの証拠となるであろう。

3－4－4　文法的方略

英語と日本語の文理解の方略について、両言語間に共通すると考えられる現象がいくつか明らかにされた。

まず文法的方略から見ていこう。文法的方略とは、ある言語の格標示の文法システムに則った文理解の方略である。英語では語順を手掛りにする方略であり、日本語では助詞を手掛りにする方略である。共通点の第一番目として、第1言語単一使用者は、その言語の文理解の手段として、その言語の文法的方略を使用することである。日本語単一使用者群は助詞を手掛りとして、英語単一使用者群は語順を手掛りとして、各々の言語の文法的方略を主に使用して文処理を行った。したがって、意味方略等の非文法的方略の使用は少ないのであった。Slobin (1985)は、ある形態論的特徴をもっている母語に対して幼児は特定の操作原則を繰り返し適用することにより、その言語の全体としての類型論的特徴と一致した構造がその子どもによってよりアクセスしやすくなると述べている(p.1194)。言語類型論的に著しく異なっている英語と日本語を用いた本研究においては、このような母語で獲得された操作原則が第2言語でも適用されるという説明の仕方も可能であろう。

第二の共通点は、文法的方略が第1言語においてのみでなく、第2言語においても獲得されるということである。英語の文理解においては、フィリピン人二言語併用者の中に第2言語としての英語の文法的方略を主に使用するものが(部分的ではあるが)存在した。日本語を第2言語とするアメリカ人日本語教師は、助詞を主な手掛りとして、かなりの正確さで日本語の助詞有り文の理解を行った。

ある言語の使用経験が多ければおおいほど、よりその言語の文法的方略の

使用の度合が高いということが言えるだろう。英語の文理解の場合、英語単一話者群はほとんど文法的方略を使用し、二言語併用者群は、三文型(NVN, VNN, NNV)すべてか、または規準的語順(NVN)のみ文法的方略を使用し、英語非使用者群である在日日本人では文法的方略の獲得に至っておらず、第1名詞方略と意味方略を主に使用した。日本語文の理解においては、一番日本語使用経験が浅い日本語学習者群において、主題・主格文に対して混乱した反応が見られ、助詞による文法的方略が完成していないことが示された。

この文法的方略は、規準的形式(e.g.英語のNVN型や日本語における主格の前置)において、一番先に使用され獲得されていくという点でも、英語と日本語の第2言語学習上に共通した過程が見られるようであった。英語では、例えば二言語併用者においては、NVN=SVO方略はすでに成立していた。日本語では、日本語学習者群において、NNV語順に対し、第1名詞+ガの場合にガ選択率が高かったのに、第2名詞+ガではチャンスレベルに留まったことが実例として挙げられる。

さらに、規準的形式において獲得された第2言語の文法的方略の一部が、非規準的語順に対しても汎用され、結果として文法的規則から見て誤った使用がなされる段階が存在することも確かめられた。英語文に対して在日日本人群が第1名詞方略を3文型すべてに適用した例や、また、日本語の主題・主格文に対して、日本語学習者がガを目的格と解釈したような反応の見られた例がある。これらは、いずれも第1言語の影響よりも、第2言語の一部の規則の「過度の一般化」としてこそ、よく説明されうることを示してきた。

3－4－5　非文法的方略

次に第2言語の獲得過程における第1言語からの影響すなわち干渉作用について考察してみよう。アメリカ人は第2言語の文法的手掛りが得られない場合(たとえば助詞無し文)での規準的文型においては、特に第1名詞を選択するというように、語順の要因に対する感受性が強かった。一方日本人は、第2言語

(そして第1言語も)の文法的的手掛りで判断できない場合には、語順よりもむしろ意味の要因に基づいた反応が多かった。このような非文法的な方略の使用において、アメリカ人と日本人との間にみられる相違は、各々の被験者の第1言語の獲得過程における、非文法的な方略の違いと対応すると考えられる。

Harrington (1986) は英語と日本語の助詞無し文について、第2言語で用いる方略についての実験を、筆者とは全く独立して行なっている。そこで得られた結果は英語を母語とするものは語順手掛りにより依存し、日本語母語話者はむしろ意味 animacy の手掛りに依存するというもので、筆者の結論を支持するものであった。

英語児においては意味方略がほとんど使用されず、語順によって動作主を主に選択したこと (Bates *et al*., 1981) と、本研究において語順の要因があまり重要でない日本語に対して主に語順を手掛りに文理解を行ったアメリカ人日本語学習者の方略使用の特色とは、同じ基盤を持っていると考えられる。一方日本人の子どもにおいても、早期から意味方略が出現し、助詞方略獲得以前には、文理解のための重要な方略として意味方略が使用されることが確かめられている (Hayashibe, 1975)。このような、幼児における通言語的な比較による両者の前文法的方略の差異が、そのまま大人の第2言語学習の場合の非文法的方略の違いとなって、いわば引き継がれているのは、きわめて興味深い。

註

(1)　Keppel (1982) を参考にした。

第四章　ハとガの動作主性の発達

【要約】第四章は、ハとガの統語機能について、日本人の幼児から大人までを発達的に比較することにより、いつ頃獲得されるのかを実験的に調べたものである。第三章で提起された問題を発達心理学的に第1言語の獲得という面から論じた。格標示力――どの程度の強さで名詞句間の格関係(たとえば動作の主体と客体など)を表すか――を動作主性――その名詞句を動作主として知覚させる強さの度合――の観点から明らかにした。対象は4、5、6、8、10、12、14歳児と大人の8群、80名である。ガの動作主性がハの動作主性よりも強いことが示された。また、助詞が第1名詞に後置するのか、それとも第2名詞に後置するのかといった助詞の位置に影響されずに、大人と同じように助詞方略に基づいて文処理できるようになるのは10~12歳頃であることが見いだされた。さらに、発達における意味方略使用のU型カーブがみられた。すなわち、意味を手掛りにして文理解を行なう傾向は10~14歳までは減少してくるのだが、この頃から大人になるにつれ、文法的手掛りにではなく意味の要因に依存する割合が大きくなっていくことが明らかになった。

4－1　問題

日本語を母語とする成人にとって助詞ハとガの区別はそれほど困難ではない。しかし、外国人日本語学習者にとって、この使い分けは非常に困難であり、特に初学者には誤用の多いことが指摘されている(例えば鈴木, 1978などを参照)。また、日本語を母語とする者でも、この助詞ハとガの獲得はかなり遅いことが明らかにされてきている(近藤, 1978; 秦野, 1979; Miyazaki, 1979; 林部, 1983)。日本語児がハとガを使い始める時期は1歳台後半であり(大久保, 1967

; 宮原・宮原, 1973 ; 前田, 1977)、宮原・宮原 (1973) によれば、はじめはガが一般に「主語 + ガ + 述語」の文型で使用されるのに対して、ハの入った文は述部を伴わない「NP + ハ ?」の文型[1](例えば「クチュハ?」「カミハ?」「コレハ?」)で発話される (もっとも、大久保, 1967によれば1歳6ヶ月でも「NP + ハ + 述部」の文型が出現するとしている)。しかし、初期の発話は助詞の脱落率が高く、いわゆる電報体文であることが多い (藤友, 1976 ; Cook, 1985)。Miyazaki (1979) は、ガの脱落率は2歳前半まで高く、大人の水準に減少するのは2歳後半であるのに対して、ハの脱落率は5歳になっても以前として高いことを報告している。さらに藤友 (1976) は、6歳児においてもハとガがしばしば誤用されることを明らかにしている。

助詞ハとガが以上のように獲得困難な文法項目である背景の一つとして、助詞ハとガが多重機能 (multifunction) をもつという点をあげることができよう。多重機能性 (plurifunctionality または multifunctionality) とは Karmiloff-Smith (1979) がフランス語児における限定詞の発達を明らかにする際にフランス語の定・不定冠詞に対して用いた概念であり、同じ冠詞が様々な機能を併せ持つことをあらわしたものである。ハとガの多重機能性を構成する代表的な機能は第二章で説明している。

ハとガの多重機能性を構成する機能は、以上の3機能以外にも様々な側面より提示することができよう。しかし、以上の3機能はハとガの用法の上で代表的な機能である。文の表出・理解では各機能が単独で働くだけでなく、諸機能間で競合 (competition) や連携 (coalition) などの複雑な相互作用が行われていると思われる (MacWhinney *et al*, 1984, 1985)。我々は、助詞ハとガの獲得が遅れる原因の一つとして、以上のようなハとガの多重機能性と、その諸機能間の相互作用を想定している (Ito and Tahara, 1985 ; 田原・伊藤, 1985b ; 第二章を参照)。

ハとガの統語機能の獲得の問題についていえば、日本語幼児がどのように、いつ頃から動作主－被動作主の関係を理解するのかという問題がある。他動詞文でこのような意味的な格関係を標示するものは、英語のように語順によ

るのではなく、日本語の場合格助詞である。ガは他動詞文で主格をあらわす格助詞であるが、ハは主題提示の係助詞であり文法的には格関係をあらわす機能を備えていない。しかし、実際の言語運用上では動作主にあたる名詞句は主題化されることが多いことから、ハが、文法上はともかく、言語使用経験に基づいた経験的・心理的な機能として聞き手に動作主であると解釈させる力があることが考えられる。このような言語運用上の問題を処するにあたり、本章でも第三章で定義したように、「能動文中で、その助詞の名詞句が動作主として選択される蓋然性」を「動作主性」と呼ぶ。

本章の目的はハの動作主性とガの動作主性が年齢とともにどのように変化するかを明らかにすることである。前章では、成人の日本人母語話者・日－英バイリンガル(日本人)・英－日バイリンガル(アメリカ人)・日本語学習者(アメリカ人)に対してハとガの動作主性の比較を行った。この研究によればおおむねガの動作主性がハの動作主性よりも高く、日本人母語話者の場合に両者の差が最も大きいことが見出された。しかし、このようなハとガの比較を直接扱った発達的研究は先行諸研究に見当たらない。

ただし、単文理解の実験において助詞などの手掛りによって動作主－被動作主の格関係がいつ頃より理解され始めるかを調べたものとして、Hayashibe (1975)、Sano (1976)、Hakuta (1982)、鈴木 (1977)、岩立 (1980) などがある。これらの諸研究から、助詞に基づく文理解を正しく行えるようになるまでに語意味にひきずられて文処理する(意味方略を用いる)時期があること、および助詞理解に語順が影響を与えることが明らかにされてきている。また、子どもは助詞のない文では文頭の名詞を動作主と解釈し易い傾向があり (Hayashibe, 1975 ; Hakuta, 1982, 等)、文頭の名詞にガが付いている場合は、NNV文型に対して「動作主－被動作主－行為」として理解されやすいことが判っている。

以上の先行研究をふまえると、助詞による正しい文理解の方略(助詞方略)が獲得される以前の段階の子どもには、本章の実験課題を考え合わせると、以下の六つの方略が仮説的に考えられる。

方略1：ハまたはガが第1名詞に後置するのか、それとも第2名詞に後置するのかといった助詞の位置とは無関係に、ハまたはガの付いた名詞を動作主と解釈する。つまり助詞の理解において語順の影響は無い。この方略1はいずれの先行研究によっても支持されていない。

方略2：幼児は必ず第1名詞を動作主として解釈する。この方略は従来より、語順方略あるいは第1名詞方略と呼ばれている。助詞の意味を無視した語順のみを手掛りとした方略である。

方略3：第1名詞にガが付いている場合のみに、それを動作主と解釈する方法である。この方略は、Hakuta (1982) によってその存在が確かめられている。第1名詞＋ハを、必ずしも動作主としなければ方略3であり、第1名詞＋ハもコンスタントに動作主と解釈すれば、方略4または方略5が正しいことになる。

方略4: 第1名詞に任意の助詞がついていれば、それを動作主と解釈する方略である。助詞の種類は問わないので、本章での実験課題では、第1名詞＋ハも第1名詞＋ガも動作主とみなされる結果となるであろう。Clancy (1985) と藤友 (1976) は、日本語児の（理解ではなく）発話にこのようなランダムな助詞の使用の時期があることを示唆している。

方略5：幼児は第1名詞にハまたはガがつくとき動作主と解釈する（この点では方略4と共通）が、ハとガ以外の他の助詞（例えば格助詞ヲ）が第1名詞に付いたときには動作主と解釈せず、その助詞の機能にしたがって正しく文を理解できるという、助詞の文理解に基づいた方略である。たとえば、名詞＋格助詞ヲの名詞句を被動作主 (patient) と正しく理解する場合である。このような、真の意味での助詞理解に基づく方略が、いつ頃より出現し、どのように発達するかを調べることは興味深い。しかし、本章では、ハとガ以外の助詞を扱っていないので、方略5を直接観察することは出来ず、方略4と5の対立を証明することは出来ない。この解明は第五章で助詞ヲをハとガと比較することにより行なわれよう。

方略6：幼児はハガ文（NハNガVした。）のとき、主格のガを目的格のガと類

推・混乱して解釈する。従ってハガ文では、動作主－被動作主－行為と解釈するが、他の文型では、このようにガの名詞句を目的格とみなすことは行われない。たとえば、「犬ハ馬ガさわった」という文に対して、馬でなく犬を動作主と解釈する。これは主格のガを目的格のガ(例えば「見える」・「できる」・「好きだ」等の目的語につけるガのこと。久野, 1973を参照のこと。)と取り違えて解釈した結果,出現する方略である。ガが目的・対象をあらわすのは、「懐かしい・欲しい・好き・嫌い・いや」など感情・好悪をあらわす形容詞・形容動詞、「動詞+たい」で希望をあらわす場合、「できる、分かる、読める、書ける」などの可能動詞、動詞に「~やすい」「~にくい」がついて可能に近い意味をあらわす場合である。本章の実験に用いた他動詞に対してガを目的格と解釈するのは誤りである。この方略は、前章の実験で、日本語文法の初級的知識はあるが日本語の言語運用の経験が少ないアメリカ人の日本語学習者(大学生)にみられたものである。このような誤った方略の適用はある特定の規則を別の文型に過剰に一般化したもの(overgeneralization)と思われる。

以上の六つの方略のうち、助詞の種類(ハとガ)と助詞の位置(助詞が第1名詞に後置する場合と第2名詞に後置する場合)との交互作用を前提とするものは方略3~6である。このうち方略3はハの動作主性の高さ、および、動作主性の高さと助詞の位置との交互作用を否定している。これらの諸方略の存在を確かめることも本章の目的の一つである。また、このように助詞の位置が助詞に与える影響力は、暦年齢が上がるにつれてどのように変化するかも本章で確かめたい。

ところで、このような動作主－被動作主の格関係の理解に関する研究は60年代から行われてきているが(Fraser *et al*., 1963, Bever, 1970：英語；Sinclair & Bronckart, 1972：仏語)、80年代に入ると交差言語的研究が盛んになってきた(Slobin, 1982, Slobin & Bever, 1982：英・伊・トルコ・セルボクロアチア語；Bates *et al*., 1984：英・伊語；Miao *et al*., 1984：中国語；MacWhinney *et al*., 1985：ハンガリー語, etc.)。これらの研究の中での、興味深い現象の一つに、意味方略のU型カーブ

現象がある。これは中国語 (Miao *et al*., 1984) とイタリア語 (Bates *et al.*, 1984) において語意味 (animacy) を手掛りとして文理解をする意味方略の使用が幼児と成人期に多くみられるが、その間の時期には減少していて、グラフでみると意味方略使用率がU型を描くことをさす。発達におけるUカーブ現象は、言語以外の様々な領域でみられることが知られている (Strauss, 1982)。本章では、意味方略のUカーブが日本語にも現れるかどうかを確かめる。

4－2　方法

4－2－1　被験者

東京近郊の保育園年中 (4歳)、年長 (5歳) の幼児、小学校1年 (6歳)、3年 (8歳)、5年 (10歳) の児童、中学校1年 (12歳)、3年 (14歳) の生徒、大人の8群で、各群10名、計80名。実験は1985年4月～6月に実施された。実験時の各群の平均年齢は、年中：4歳7ヶ月、年長5歳6ヶ月、小学校1年：6歳9ヶ月、3年：8歳10ヶ月、5年：10歳9ヶ月、中学校1年：12歳6ヶ月、3年：14歳7ヶ月、大人：23歳1ヶ月であった。

4－2－2　実験材料

刺激文を録音したカセットテープ、ミニチュアの動物と小物、テープレコーダー、A4の白紙、記録用紙。刺激文は名詞 (N) 2つと動詞 (V) からなるN1+N2+V型の文 (N1とN2とは文における名詞の位置で、文頭の名詞をN1、動詞の直前の名詞をN2とする) で、Table 4–1 に示すように、N1とN2、N2とVとの間に入れる助詞ハ、ガの組み合わせとして6通り、N1、N2の名詞が生物 (A) か、無生物 (I) かで3通りの組み合わせとし、計18文型。なお本章では、A φ A φ V、A φ I φ V、I φ A φ Vという助詞なし文型を刺激文に含まなかった。これは成人 (Kilborn & Ito, 1989) においても幼児 (Hayasibe, 1975) においても助詞の手掛りのない助詞なし文型に対してはAnimacyによる動作主選択すなわち意味方略が圧倒的に優勢であるということがわかっていたためである。この18の

Table 4–1　刺激文のタイプ

助詞		正答	(語)意味	文型		例文
ガとハ	ガハ文	N1 正答	中立	1	AガAハV	亀 ガ 犬 ハ なめた
			A = 正答	2	AガIハV	犬 ガ 鉛筆 ハ 触った
			I = 正答	3	IガAハV	箱 ガ 犬 ハ 押した
	ハガ文	N2 正答	中立	4	AハAガV	犬 ハ らくだ ガ かんだ
			A = 正答	5	AハIガV	馬 ハ ケシゴム ガ かんだ
			I = 正答	6	IハAガV	ケシゴム ハ 亀ガ たたいた
ガのみ	ガφ文	N1 正答	中立	7	AガAφV	犬 ガ 馬 φ 押した
			A = 正答	8	AガIφV	馬 ガ クレヨン φ 触った
			I = 正答	9	IガAφV	ボール ガ 魚 φ 押した
	φガ文	N2 正答	中立	10	AφAガV	らくだ φ 鹿 ガ かんだ
			A = 正答	11	AφIガV	鹿 φ スプーン ガ カンダ
			I = 正答	12	IφAガV	鉛筆 φ 鹿 ガ キスした
ハのみ	ハφ文	N1 正答	中立	13	AハAφV	馬 ハ ラクダ φ 触った
			A = 正答	14	AハIφV	亀 ハ 箱 φ たたいた
			I = 正答	15	IハAφV	クレヨン ハ らくだ φ キスした
	φハ文	N2 正答	中立	16	AφAハV	亀 φ 魚 ハ たたいた
			A = 正答	17	AφIハV	鹿 φ ボール ハ たたいた
			I = 正答	18	IφAハV	スプーン φ 魚 ハ なめた

N1：第1名詞，N2：第2名詞，A：生物名詞，I：無生物名詞，φは助詞を付けないことを示す

各文型に対して、魚、鹿、犬、亀、らくだ、馬の生物名詞6種、箱、鉛筆、スプーン、ボール、クレヨン、ケシゴムの無生物名詞6種、「触った」「押した」「キスした」「たたいた」「なめた」「かんだ」の動詞6種の中から無作為にA、I、Vを選び出し(ただしAAV型の文では、Aは同一の生物名詞とならないようにする)、各文型に対して一文ずつ、合計18の文を作成し、テープに録音する。

名詞の選択基準については生物名詞は子どもにとってなじみあるセキツイ動物、無生物名詞は日常的に見慣れた物を選び、いずれの単語も4歳児ですでに獲得済みであろうと思われるものである。動詞の選択基準は、(1)子どもにとって理解が容易で、かつ(2)一方が他方に対して行なう動作が観察しやすい

他動詞を選んだ。なお、名詞と動詞の組み合わせで、たとえば「箱ガ犬ハかんだ」と「箱ガ犬は押した」とでは、箱を動作主と選択する率に差が出るようなことが考えられるが、ここでは動詞間の比較をすることが目的ではないので、分析の対象にしなかった。

録音のスピードは、各文を3秒で読み、読み終えて約7秒の間をとって次の文を読み始めた。この18文の録音の順番はランダムである。一本のテープは、以上のような18の文型で、各文型一文ずつの18文とし、同様の方法で4本のテープを作成する。また、「犬ガ亀 たたいた」「鹿ハ馬 なめた」「らくだガ魚 キスした」「鹿はらくだ 触った」の4文を録音したテープを、練習文として作成した。ミニチュアや小物は、練習文、刺激文中の生物、無生物名詞を型取ったもので、計12個である。

4－2－3　手続き

A4の白紙の上のランダムに置かれた12個のミニチュア、小物を命名することができるかどうか確認した後、「今からテープレコーダーから、短いお話し(小学校1年以降は「文」)が聞こえてきます。そのお話し(文)をよく聞いて、目の前にあるものを使って、その通りにやってみせて下さい。その時、両手を使わないで片手でやってみて下さい」という教示を与え、練習文のテープを聞かせる。片手で実演するように教示したのは、両手を使って2つのものを持つと動作主の判断が困難になるからである。また、お話し(文)を聞き落としたときには何度でもテープを聞くことができることも告げておく。練習文で実演することができたら、ミニチュア・小物の位置を変えて、4本のテープのうちの1本を無作為に選び出し、実演させる。終了後、2、3分の休憩の後に、残った3本のテープのうちの1本を無作為に選び、同様の手続きで実演させる。

4－3　結果

分析方法　各被験者について、18文型ごとに正答数を算出する。正答とは、

Table 4–2　分散分析表

Source	SS	df	MS	F
年齢(A)	34.36	7	4.91	4.68***
Errors(S/A)	75.72	72	1.05	
助詞(B)	65.39	5	13.19	25.86***
A × B	42.39	35	1.21	2.37***
Errors(BS/A)	182.92	360	0.51	
意味(C)	154.45	2	77.23	100.30***
A × C	29.30	14	2.09	2.71**
Errors(CS/A)	110.36	144	0.77	
B × C	9.88	10	0.99	4.71***
A × B × C	18.64	70	0.27	1.27
Errors(BCS/A)	150.70	720	0.21	
Total	874.69	1439		

***0.1パーセント水準で有意　**1パーセント水準で有意

Table 4–3　各群の助詞別正答率(%)

Age	ガハ文	ハガ文	ハφ文	φハ文	ガφ文	φガ文	Average
4	71.6	35.6	80.0	46.7	78.3	58.3	61.6
5	73.3	40.0	93.3	55.0	85.0	65.0	68.6
6	60.0	55.0	90.0	48.3	83.3	55.0	65.8
8	55.0	55.0	83.3	61.7	83.3	61.7	66.7
10	76.7	68.3	93.3	71.7	96.7	81.7	81.4
12	53.3	85.0	86.7	76.7	90.0	81.7	78.9
14	61.7	85.0	86.7	88.3	93.3	90.0	84.2
Adult	50.0	70.0	80.0	76.7	90.0	78.3	74.2
Average	62.7	61.7	86.7	65.6	87.5	71.5	72.6

Table 4–1にいう、ガφ文・φガ文・ハガ文・ガハ文の4文型ではガの付いた名詞を、ハφ文・φハ文の2文型に対してはハの付いた名詞を動作主として選択したもののことをいう。生物－無生物の意味の要因については、第1名詞・第2名詞とも生物名詞である「正答中立型」(意味の要因は動作主選択にたいして中立)と「正答＝生物型」(正答の名詞は生物名詞)と、「正答＝無生物型」(正答の名詞は無生物名詞)の3水準に分けた(Table 4–1参照)。

分散分析　年齢(8水準)×助詞(6水準)×意味(3水準)の分散分析を行った。その結果をTable 4–2に示す。3要因の主効果および、2要因間の交互作用がすべて有意であったが、3要因の交互作用は有意ではなかった。なお全体の正答率の平均は72.6%だった。

年齢と正答率　年齢の主効果が有意であったのはTable 4–3(各群の助詞別正答率)の平均の欄(各行の最右列)にあるように、各被験者の正答率の平均に差があることを示している。すなわち全群の平均正答率(72.6%)を境として4歳群～8歳群よりも10歳群～成人群の方が正答率が高い。しかし正答率は年齢と共に単調増加するわけではなく、また、成人群が10歳群～14歳群より正答率が低くなっている。

助詞と正答率　助詞の組み合わせ別の正答率の全体的平均は、Table 4–3の最後の行に示されているようにハφ文とガφ文で最も高く、φガ文そしてφハ文がそれにつぎ、ガハ文とハガ文において最も低くなっている。助詞のある名詞句が文頭にきたとき(ハφ文、ガφ文)の方が、第2名詞に助詞が付いている場合(φハ文、φガ文)よりも正答率が高いことと、ハとガが一文中に同時に現れる場合(ガハ文、ハガ文)では片方のみ出現する場合よりも正答率が低くなることが示された。しかし年齢との交互作用をさらにみる必要がある。

意味と正答率　意味の水準ごとに正答率の全体的平均をみると、正答中立型では75.5%、正答＝生物型では91.0%、正答＝無生物型の文型では51.3%であった。他の要因すなわち年齢または助詞との交互作用を抜きにして全体的に見れば、意味の要因は正答率に大きな影響を与えていると言うことができよう。誤差項目を除いた全項目の中に占める意味の主効果の平方和の割合(Power)も43.5%と非常に大きく、意味方略が多用されていたことが示唆されよう。

年齢×助詞　Fig. 4–1はガφ文とφガ文における正答率を各年齢ごとにグラフにあらわしたものである。ガφ文では全群の正答率が高く群間差が大きく認められないのに対して、φガ文では4歳群～8歳群の正答率が低く58～65%に留まっている。助詞が第1名詞に後置するのか、それとも第2名詞に後置す

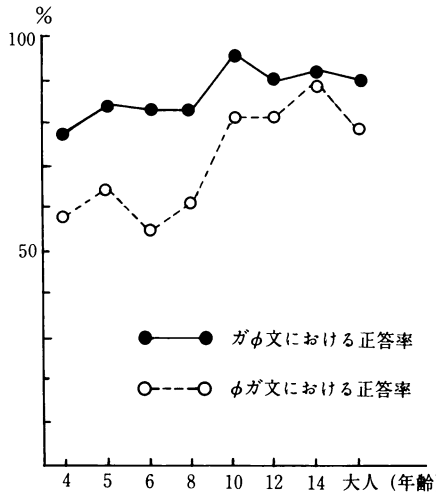

Fig. 4–1　各年齢ごとのガφ文とφガ文における正答率

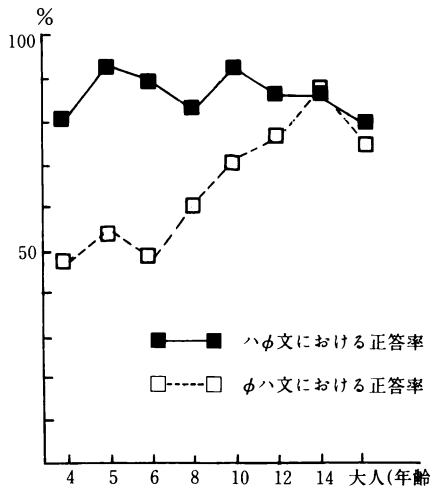

Fig. 4–2　各年齢ごとのハφ文とφハ文における正答率

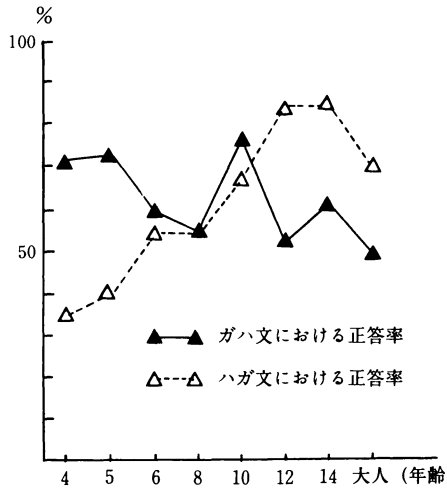

Fig. 4–3 各年齢ごとのガハ文とハガ文における正答率

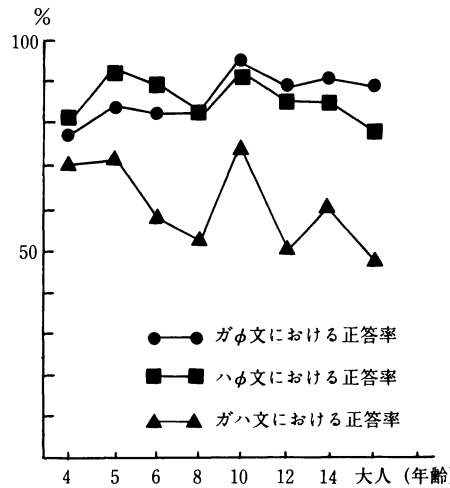

Fig. 4–4 各年齢ごとのガφ文,ハφ文,ガハ文における正答率

るかといった助詞の位置の要因に関係なくいつもガの名詞句を動作主とするのは10歳群以降であると言えよう。Fig. 4–2は、同様にハφ文とφハ文の正答率の年齢変化を表したものである。ここでもハφ文は全群で正答率が高く群間差が少ないのに対して、φハ文では低年齢群での正答率の低さが顕著である。6歳群までの3群はチャンスレベルに近く(46～55%)、70%を越えるのは、やはり10歳群以降である。Fig. 4–3は、ガハ文とハガ文についての同様の比較である。ハガ文について見ると、4歳群と5歳群では正答率が50%以下、すなわちガよりもハの動作主性が高くなる。一方ガハ文では、4歳群ですでに70%以上の正答率を達成しておりガの動作主性は年齢につれて、むしろ減少する傾向にある。成人群にいたっては、正答率50%にまで落ち込んでいる。10歳群を例外として小学生以上の被験者はガハ文においてガを動作主と選択する傾向は弱い。Fig. 4–1～3は、文理解の獲得途上での助詞の位置の要因の役割の大切さを示唆している。

Fig. 4–4で第1名詞が正答なる3文型(ガハ文、ハφ文、ガφ文)の比較を行なうと、ガがハよりも動作主性が強い傾向が見られるが、年齢的変化に伴う正答率は単調増加ではない。しかし、Fig. 4–5で第2名詞が正答となる3つの文型(ハガ文、φハ文、φガ文)を比べると、助詞のつく名詞の選択率が年齢とともに増加するが、成人群になると、いずれの文型も正答率が減少するという特徴がある。さらに、φガ文とφハ文の比較において、また、ハガ文でのガの動作主性の6歳以降の年齢変化においても、ガの動作主性がハの動作主性よりも高いという傾向が認められる。

年齢×意味　各年齢ごとに意味の3水準、すなわち正答中立型、正答＝生物型、正答＝無生物型の各文型の正答率をFig. 4–6に表した。12歳群と14歳群で正答＝生物型と正答＝無生物型の間の正答率の差が小さいのが注目される。意味の手掛りを多用すればするほど、両者の正答率の差が大きくなるので、意味に依存する度合が大きいのは4歳群・6歳群・8歳群・成人群であることが読み取れる。ここで、成人群の意味の手掛りに対する依存の大きいことが興味

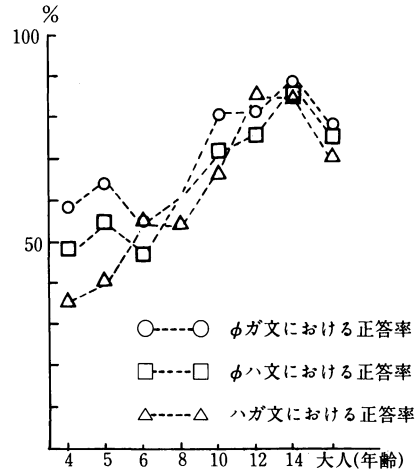

Fig. 4–5 各年齢ごとのφガ文，φハ文，ハガ文における正答率

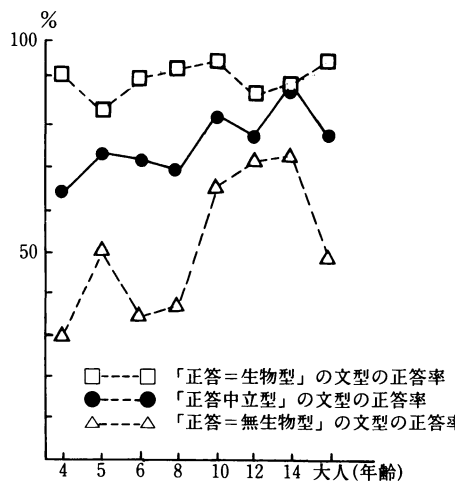

Fig. 4–6 各年齢ごとの正答＝中立文，正答＝生物文，正答＝無生物文における正答率

深い。

正答＝無生物型の12文に対して、12文中9文以上助詞を手掛りにして反応した被験者を「助詞方略優位」、逆にAnimacyを手掛りにして12文中9以上文処理した被験者を「意味方略優位」として、各年齢群ごとにその人数をあらわしたものがFig. 4–7である。Fig. 4–7から、助詞方略と意味方略が相補的に用いられていることが示唆され、ここでも、低年齢群と成人群で意味方略が多用されることが示された。

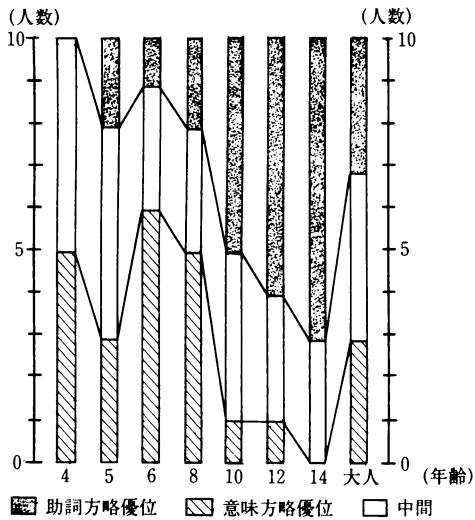

Fig. 4–7　「正答＝無生物型」の文に対する各年齢ごとの「助詞方略優位」、「意味方略優位」、および両方略の中間群の人数

助詞×意味　第三章と同じ方法で意味方略使用率(PUMS)を助詞の6水準について算出してみると(ガハ文：43%, ハガ文：40%, ハφ文：33%, ガφ文：32%, φハ文：53%, φガ文：39%)、ハφ文とガφ文では意味方略が使用されにくいのに対して、φハ文では助詞方略と同じぐらいよく意味方略が用いられたと言える。

4－4　考察

成人におけるハとガの動作主性

まず大人におけるハとガの動作主性をみると、一文中にガのみ(84.2%)またはハのみ(78.4%)の文での各々の動作主性は、ハとガが両方ある文でのガの動作主性(ガハ文とハガ文の平均:60.6%)よりも高くなっている。ハまたはガが単独にあらわれる場合でも、一文中に両方出現している場合でも、ガの動作主性はハのそれよりも高いことが示された。これは、前章の日本人モノリンガル成人達のハとガの動作主性の比較研究と傾向が一致している。また、一文中に助詞ハとガの両方がある場合より、助詞一つの場合のほうが、動作主性の判断がよりはっきりしていることも共通する結果であった。要するに、ハよりもガの動作主性が高いことと一文中に両助詞があらわれるより、片方のみあらわれた方が動作主性が高くなることが再検証されたわけである。しかし、各年齢の発達的な比較を行ってみると、必ずしもいつもこのような傾向が現れているとは限らない。

ハとガの動作主性の発達的変化

発達的にハとガの動作主性を比較するためには、助詞が第1名詞に後置するか、それとも第2名詞に後置するのかといった助詞の位置の影響を考慮に入れなければならない。Fig. 4–1～2に明らかなように、低年齢の子どもでは第1名詞にハまたはガの付かない文型(ϕハ文、ϕガ文)で助詞による動作主の選択が困難である。助詞の位置の影響を受けずに、大人と同じようなパターンになるのは10歳～12歳である。動作主選択において、助詞の位置の要因が助詞に与える影響は、年齢が上がるにつれて減少する。言語獲得上で助詞の位置の果たす役割の大きいことが示唆される。

成人における助詞方略・語順方略・意味方略

成人の場合には語順(第1名詞)を手掛りとする方略は無い。なぜならFig. 4–1～3の各々の対の文型を比較すると成人群では助詞の位置による差が見ら

れないからである。成人群では、助詞方略と意味方略が有力である。両方略が一致する正答＝生物型では正答率は極めて高いが、両方略の競合する正答＝無生物型では助詞の組み合わせの種類が正答率に影響を与えた。すなわち正答＝無生物型では、ガϕ文とϕガ文（正答率65%）で助詞方略が意味方向より強いが、ハϕ文とϕハ文（正答率50%）では、両方略が均衡しており、ガハ文とハガ文（正答率33%）ではむしろ意味方略の方が優位に立っている。大人において意味方略が助詞の動作主性に対して相補的に働くことが示唆される。

第三章と比較すると、本章では意味方略の使用率がより高くなっている。本章の語順はNNV（N：名詞、V：動詞）という日本語の規準的語順のみである。これに対し、前章では、NNVの他にNVN、VNNという非文法的な語順も含んでおり、この場合、文を一つの単位として、あるいは一まとまりとして、全体的に処理しようとするよりも助詞という部分に着目して文処理をおこなったのではないかと思われる。刺激文の文法性が高い方が非文法的な意味方略に頼るというパラドクスが成り立つかもしれない。

発達における意味方略使用のU型カーブ

正答＝無生物文型で助詞方略と意味方略の使用者を比較したFig. 4–7を見ると、4～8歳では意味方略が優位であるが10～14歳では助詞方略が逆に優位となり、成人になると再び意味方略の強さが増して助詞方略と均衡するようになる。このように初め強力で途中一旦は力が衰えるが再び勢いを増すという、意味方略の変化を、そのグラフの形からU型カーブと特徴付けよう。本章であらわれたUカーブは、日本語固有の現象ではなく、他の言語でも観察されることが報告されている。

意味の手掛りと語順の手掛りとが対立した中国語単文（無生物名詞－他動詞－生物名詞：IVA）に対して、中国人母語話者は、7歳頃最も語順方略を使う傾向が強いが、幼児と13歳児・成人は意味方略を多用する（Miao, *et al.*, 1984）。中国語では、格関係を示す文法装置として日本語のように小詞（Particles；中国語文法では虚詞という）は主な役割を持たず、むしろ語順を手掛りとする言語である

と考えられているのだが、U型カーブがあらわれた。また、イタリア語を含む交差言語学的な文理解の研究(Bates *et al*., 1984)でも、イタリア人成人は幼児とともに名詞のanimacyを主な手掛りとして動作主の選択をする、すなわち意味方略のU型カーブ現象があることが示されている。一方、英語・トルコ語・ハンガリー語の母語話者にはこのような強い意味方略への保存が見られず、U型カーブもない。

このように言語による意味方略使用の差が出てくる理由の第一として、その言語が単一の格標識uniform case markerを持っているかどうかが問題となる。日本語のガはuniform case markerではない。動作主はハとガの両方で標示するし、ガには主格標示だけではなく目的格を表す機能もある(可能動詞や感情動詞などにたいして)。英語・トルコ語の場合では、前者は語順、後者は目的格標識によって格関係が明確に示され、それは文法規則として確定している。

日本語をはじめとして、意味方略にU型カーブが生じる発達的な理由として、児童には文法上の形式的な規則にsensitiveな時期があるということが考えられる。日本人の場合10～14歳がその時期にあたるのかもしれない。その後から成人になるまでに、助詞以外の他の手掛りにも目を向けるようになってくる。

幼児の文理解の六つの仮説的な方略について

問題のところで述べた六つの方略1～6について順に検討してみる。

まず、方略1(ハまたはガのつく名詞は助詞の位置に関係なくいつも動作主として選択される)であるが、これは幼児に助詞の位置の影響が大きかったことから棄却される。すなわち、ハφ文とφハ文およびガφ文とφガ文の間の幼児における正答率の大差がこの仮説を反証している。同じ証拠から、方略2(幼児は必ず第1名詞を選ぶ時期がある)も棄却される。4歳児ですでに助詞の位置に対する助詞の影響が認められたからである。幼児ではガハ文で正答率が高くハガ文では正答率が低かったことは、方略3(ガのついた第1名詞のみを動作主と解釈する。ハのついた名詞はその限りではない)を支持するようであるが、ハφ

文の第一名詞選択率の高さはガφ文のそれと大差がないことから、この仮説も棄却される。すなわち、助詞ハとガの両方とも文頭の名詞に付いた時に動作主として選択されやすいことから、方略4(第1名詞になんらかの助詞が付けば必ず動作主と解釈する)または方略5(ガまたはハの付く第1名詞を動作主と解釈する)が正しいということになる。

方略4と方略5とのどちらが正しいかの検証のためには、ハとガ以外の格助詞が第1名詞に付いている場合を調べてみなければならない。助詞ヲをハやガと比較した第五章の結果(Table 5–2)をみると、4歳児では、第1名詞にヲがついたヲφ文において、そのヲの付いた第1名詞を動作主とみなす率(第1名詞選択率:62%)がヲの付いた名詞句を被動作主とみなす率(正答率=第2名詞選択率:38%)よりも上回っている。第1名詞+ヲの動作主として選択する率が4歳児で高いので、一見すると方略4を支持しているかのようである。しかし、この群のヲφ文(62%)では、第1名詞と第2名詞に助詞のついていないφφ文(72%)よりも、第1名詞を動作主とみなす傾向が小さい。すなわち、第1名詞についたヲは、4歳児でもすでに、その名詞を動作主と解釈させない方向に働くといえる。従って方略4は棄却すべきである。

Table 5–2に示すように、4歳児群のφヲ文において助詞の付かない第1名詞を動作主として選択した率(78%)はガφ文において助詞ガのついた第1名詞を動作主として選択した率(78%)と同じ高さである。5歳群以降ではむしろ、φヲ文の正答率の方が高くなっている。4歳群の第1名詞選択率をハφ文(80%)・ガφ文(78%)とヲφ文(62%)で比較するとこの10数%の差は方略5を支持しているようである。本章では、第五章の結果により方略5が支持されたといってよいだろう。

方略6(ハガ文のガを目的格と解釈する)は、方略1～5と対立しているわけではない。ハガ文型の場合にハの付いた第1名詞をより動作主として選択する傾向がなければ棄却される。本章では、まさにハガ文型で幼児においてガハ文型よりハの動作主性が相対的に高かったので、仮説6は棄却されない。しかし、

真にこの仮説を検証するためには今回の証拠だけでは不十分であろう。幼児において目的格のガをとるハガ文型(例：私ハ水ガのみたい。)の文理解の発達を明らかにすることが必要であり、これは今後の課題である。

以上みてきたように、助詞方略の使用において助詞の位置の影響がなくなる時期は10～12歳頃である。これまで日本語理解の発達的研究で幼児期に助詞の位置の要因が文理解に影響力を持つことは幾度か指摘されてきたところであるが、本章で助詞の位置の要因に惑わされずに正確な助詞理解が達成される時期を同定したことは積極的な意義が認められるであろう。

Slobin & Bever (1982)によれば、トルコ語児は、2歳頃より語順の影響を受けずに目的格マーカーによる正確な文理解が可能である。トルコ語の獲得の早さを説明しうる要因として、彼らは(1)意味と表層形式が一対一対応しているuniform markerであることと、(2)機能語の省略が行われないobligatory markerであることの二点を挙げている。日本語のハとガは、(1)多重機能性(Ito & Tahara, 1985；第二章参照)を持ち、意味との一対一対応がないことと、(2)省略可能な助詞であってobligatory markerではないことから、文法的手掛りとして相対的に強さに欠け、獲得の時期が遅れるのだと考えられる。

発達初期には、子どもは助詞をその助詞の位置とセットにして、まず獲得することはHakuta (1982)によって明らかにされた。本章での結果もこのことを支持するものである。

註

(1)　NPは、名詞句Noun phraseの略。

第五章　被動作主をあらわす助詞ヲの獲得

【要約】第五章は、助詞ヲの統語機能の発達を実験的に検討したものである。前章と比較することにより、日本語の3つの助詞ハ・ガ・ヲを、(動作主か被動作主かの違いはあるが)格関係標示という機能の観点から、獲得の困難度を明らかにしようとするものである。第四章と比較し得る実験を助詞ヲについて保育園年中児から成人までの8群に対して行い、ヲの格標示力がガ・ハよりも強いことを明らかにし、その理由について論じた。日本語の「動作主－被動作主－行為」の文型において、動作主は主格助詞ガで標示され、被動作主は対格助詞ヲで標示されることから、動作主－被動作主関係の文理解において、助詞ヲの手掛りの強さを主格助詞ガと主題助詞ハと比較し、この点でのこれらの助詞の発達過程を明らかにした。助詞ヲは意味論的にガよりも単純であるため、(1)ヲの手掛りの強さはハよりも強い、(2)日本語児において前者(助詞ヲ)は後者(助詞ガ)よりも獲得時期が早い、という2つの仮説が立てられた。4、5、6、8、10、12、14歳児と大人の80人の日本語母語話者が、単文を聞いて、ミニチュアの動物とモノを使って演示法(アクト・アウト法)においてどちらの名詞が動作主であるかを判断するように教示を受けた。刺激文は、語順(NNV, VNN, NVN)×助詞(ϕ ϕ, ϕ・ヲ, ヲ・ϕ)×名詞の有生性の組合せ(有生－有生、有生－無生、無生－有生)から成る、27文型で構成されている。NNV型の文型の結果が第四章のデータと比較され、仮説は2つとも支持された。

5－1　問題

日本語では格関係を標示するために助詞を用いる。ところが、日本語の助詞は、その深層的意味を抽出しようとすると、多義的であるものが少なくない。本研究で問題にする助詞ヲとガも、深層格は複数であると考えられる。す

なわちガは、主格助詞として動作主や経験者等を標示するが、述部が知覚(飛行機ガ見える)・認識(誰の目にも隠し事ガわかる)・感情(警官は電話ガ好きだ)・入用(栄養ガ必要だ)の場合や可能文(私は中国語ガできる)では逆に被動作主・被経験者等という対象をあらわす語を標示する。また、受動文では主格の句にガが付くが、これは意味的には動作の対象すなわち被動作主となる(友人ガ飼犬に咬まれた)。つまり、ガには動作などの主体を標示する用法と対象を標示する用法があるのである。他に属格として所有等をマークする(例：わガ国)。ヲは対格の助詞として直接目的語に付き、他動詞の被動作主等を標示する。ヲは受動文中で用いられることはなく、どのような文型でも動作主を標示する用法はない。空間・時間の移動補語(道ヲ通る；夏休みヲ過ごす)と状況補語(科学の時代ヲ生きる)に付くことがあるとはいえ、単文中で動作主－被動作主の関係をあらわす場合には必ず被動作主をマークする。このように、ヲはガよりも格関係を明確にあらわす標識であるといえる。

乳幼児の自然発話の観察をおこなった宮原・宮原(1973)によれば、「目的語－他動詞」などの格関係をあらわす2語の文は1歳6カ月の幼児の発話に出現する。しかし、幼児の話す最も初期の発話の中に格助詞は出現していない。日本語幼児がガ・ヲを初めて発話で使用する時期(初出時期)は、大久保(1967)の観察によれば、いずれも1歳台の後半であり、両助詞の初出時期に大差はない。しかし、ガは年令にともない、その使用量が増加し、コンスタントに用いられるようになるのに対して、ヲは年令が増加しても使用数が少なく、省略される割合が高い。一方、宮原・宮原(1976)は、ガは20カ月の幼児で現われるのに対して、ヲはその出現期がガに比較して少し遅れ23カ月になってからであったことと、一般に成人の発話においてよく省略されるヲは幼児の発話でも頻繁に省略されることを報告している。永野(1959)の2人の子どもの観察では、ガの初出は2歳2カ月、ヲの初出は2歳3カ月であった。横山(1989a)の観察では、ガとヲはともに1歳7カ月に出現し、両助詞の誤用の初出時期も1歳8カ月とほぼ同時期である。

以上の大久保(1967)、宮原・宮原(1967)、永野(1959)、横山(1989a)の観察結果から共通していえることは、ヲはガと比較してほぼ同時期またはややおくれて出現し、その時期は1歳後半から2歳前半の時期であることである。また、ガが年令が増加するに従って省略されなくなるのに対して、助詞ヲは省略される割合が高く、年令が増加しても省略されることが多いといえる。しかし、横山(1987, 1989abc, 1990)の自然発話研究によれば、助詞が初出したことが直ちに正しく使用されているとはいえず、これらの助詞の誤用と正用が混在する時期が少なくとも3歳以降まで続いており、習得の時期がそれよりも遅いことが指摘されている。初出してから正しい使用ができるまでに、ある程度の時期を必要とするのである。

ところで他言語では、格関係を表わすために、語順(英語)、屈折(イタリア語)等が標識(マーカー)として使われるなど多様であるが、日本語のように後置詞を用いる言語も多い。その中でも、SOVを基本語順とする言語であって、膠着語的性格が強い後置詞言語として日本語とトルコ語の共通性が、言語学で指摘されてきた。トルコ語では主格の名詞が単数の場合格標識はつかないが、目的格には格をあらわす接尾辞が付く。しかしながら、言語獲得研究においては、日本語の助詞がトルコ語の接尾辞と比較して標識力が弱いことが明らかにされている。Slobin & Bever (1982)によれば、トルコ語児は、2歳頃より語順の影響を受けずに目的格マーカーによる正確な文理解が可能である。トルコ語の獲得の早さを説明しうる要因として、彼らは、その目的格接尾辞が意味と表層形式が1対1対応している標識であることを重視している。

これに対して第四章では、日本語のガは幼児期後期であっても、助詞が第1名詞に後置するのか、それとも第2名詞に後置するのかといった助詞の位置の要因による影響を受け、トルコ語の目的格接尾辞よりもはるかに獲得が難しいものであることが明らかとなった。助詞ガの特徴として、多重機能性を持ち助詞と意味との1対1対応がないことを指摘し、このことから、トルコ語と比較して、文法的手掛りとしての強さが弱く、語順の影響を受けないで正

しく理解できる時期が遅れるのだと考えた。

また、トルコ語と日本語の幼児の言語理解の比較にみられるような、言語間の格標識の手掛りの強さの差は日本語内の助詞の間にも存在することが明らかにされている。たとえば第三章や第四章ではハとガが格関係の理解に与える影響に差異があることを成人と子どもにおいて確認している。日本語の助詞の多義性はそれぞれの助詞で程度が異なる。それゆえ、獲得の困難さの度合も助詞の種類によって違っているであろう。ガとヲについていえば、文中の動作主－被動作主関係を判断するために重要な役割を果たしている。この点ではヲは被動作主のみを標示する。これに対し、ガは動作主と被動作主のどちらをも標示する用法が有るため、より獲得困難であると考えられる。

本研究の第1の目的は、日本語において動作主－被動作主関係の理解に及ぼす助詞ヲの手掛りの強さを調べ、助詞ガと比較することにある。第三章・第四章では動作主性という概念を用いて、助詞ガの手掛りの強さは助詞ハのそれよりも強いことを明らかした。この差は、ハが主題をあらわす係助詞であって、格関係に対して文法的に中立であるのに対し、ガは実験条件下では主格の標識として解釈されるべき文型におかれたので、その格助詞としての機能が働いたと考えられた。なお、動作主性とは、第三章で述べたように、「能動文中で、その助詞の名詞句が動作主として選択される蓋然性」と定義されており、これは、手掛りの強さの1種である。したがって、助詞ヲの手掛りの強さとガの動作主性とは直接比較が可能である。

本研究の第2の目的は、このような助詞が格関係の手掛りとしてどの時期に獲得されていくかを明らかにすることである。文理解の発達について調べた実験的研究に Hayashibe (1975)、Sano (1976)、鈴木 (1977)、岩立 (1986)、Hakuta (1982)、後藤 (1987) などがある。これらの研究は主に語順と能動・受動の文型の差によって正しく文理解ができる時期がどの様に違っているかを問題にしている。しかし、ガまたはヲを単独で1文中に用い両者の手掛りの強さの比較をおこなった研究はみられない。われわれの関心は、むしろ単独の格関係の手

掛りとしての両助詞の強さの比較にある。

我々の仮説は、第1に、助詞ヲの手掛りの強さは助詞ガの手掛りの強さよりも一般に強いということである。なぜならば、前述したように、ヲは単文中で動作主－被動作主の関係をあらわす場合には必ず被動作主をマークし、ガよりも格関係を明確にあらわす標識であるからである。

第2の仮説は、第1の仮説と同じ理由から、発達的にみても意味と形式との対応が明瞭である助詞ヲの方が助詞ガよりも獲得の時期がより早いであろうということである。

本章では、上に述べた目的のため、第四章での実験と同様の実験計画で助詞ヲによる動作主－被動作主関係の理解の発達を調べ、助詞ガについて得られた第四章の結果と比較し、これらの仮説を検証する。

5－2　方法

被験者：東京近郊の保育園年中（年中児群：平均年齢5;3)、年長（年長児群：平均年齢6;1)の幼児、小学校1年（小1生群：平均年齢7;3)、3年（小3生群：平均年齢9;3)、5年（小5生群：平均年齢11;4)の児童、中学校1年（中1生群：平均年齢13;4)、3年（中3生群：平均年齢15;3)の生徒、大学生（大学生群：平均年齢22;2)の8群で、各群男女5人ずつの10名、計80名。なお、被験者の選び方については、各々の子どもに対する言語発達の状況を担任の保母・教師にたずねて、極端に進んでいたり遅れていたりする子どもは除外した。

実験材料：刺激文を録音したカセットテープ、ミニチュアの動物と小物、テープレコーダー、A4の白紙、記録用紙。

刺激文は、全体の実験計画では助詞ヲの要因（φφ・φヲ・ヲφの3水準：φは助詞無しをあらわす)、語順の要因(NNV・VNN・NVNの3水準：Nは名詞、Vは動詞)、名詞の意味の要因(AA・AI・IAの3水準：Aは有性ANIMATE、Iは無性INANIMATE)の3要因から構成された。すなわち、名詞(N)2つと動詞(V)からなる文で、助詞ヲの組み合わせとして、第1名詞にヲを付け第2名詞にヲを付

Table 5–1　Types and examples of stimulus sentences

助詞	語順	意味	文型	例文
ヲφ文	NNV	AA	(1) AヲAφV	象　ヲ　らくだ　φ　噛んだ
		AI	(2) AヲIφV	カンガルー　ヲ　鉛筆　φ　叩いた
		IA	(3) IヲAφV	ボール　ヲ　パンダ　φ　触った
	NVN	AA	(4) AヲVAφ	馬　ヲ　触った　パンダ　φ
		AI	(5) AヲVIφ	パンダ　ヲ　叩いた　ケシゴム　φ
		IA	(6) IヲVAφ	箱　ヲ　押した　キリン　φ
	VNN	AA	(7) VAヲAφ	噛んだ　象　ヲ　らくだ　φ
		AI	(8) VAヲIφ	押した　象　ヲ　スプーン　φ
		IA	(9) VIヲAφ	触った　クレヨン　ヲ　象　φ
φヲ文	NNV	AA	(10) AφAヲV	カンガルー　φ　象　ヲ　噛んだ
		AI	(11) AφIヲV	パンダ　φ　鉛筆　ヲ　叩いた
		IA	(12) IφAヲV	ボール　φ　らくだ　ヲ　噛んだ
	NVN	AA	(13) AφVAヲ	らくだ　φ　触った　馬　ヲ
		AI	(14) AφVIヲ	パンダ　φ　叩いた　ケシゴム　ヲ
		IA	(15) IφVAヲ	箱　φ　押した　カンガルー　ヲ
	VNN	AA	(16) VAφAヲ	触った　らくだ　φ　象　ヲ
		AI	(17) VAφIヲ	叩いた　馬　φ　クレヨン　ヲ
		IA	(18) VIφAヲ	押した　スプーン　φ　キリン　ヲ
φφ文	NNV	AA	(19) AφAφV	らくだ　φ　象　φ　押した
		AI	(20) AφIφV	キリン　φ　ボール　φ　噛んだ
		IA	(21) IφAφV	スプーン　φ　パンダ　φ　叩いた
	NVN	AA	(22) AφVAφ	馬　φ　触った　カンガルー　φ
		AI	(23) AφVIφ	キリン　φ　叩いた　箱　φ
		IA	(24) IφVAφ	クレヨン　φ　触った　パンダ　φ
	VNN	AA	(25) VAφAφ	押した　カンガルー　φ　らくだ　φ
		AI	(26) VAφIφ	噛んだ　象　φ　箱　φ
		IA	(27) VIφAφ	押した　ケシゴム　φ　キリン　φ

φ（ゼロ）は助詞のついていないことを表す。

けないヲφ、第1名詞に助詞をつけず第2名詞に助詞ヲを付けるφヲ、第1名詞・第2名詞ともに助詞を付けないφφの3種類の助詞の組合せと、語順要因として動詞の位置によってNNV・VNN・NVNの3語順、名詞の意味の組合せとして第1名詞・第2名詞の名詞が生物(A)か無生物(I)の3通りからなる3×3×3の27文型である。これら各文型に対して、象・キリン・カンガルー・馬・

らくだ・パンダの生物名詞6種、箱・鉛筆・スプーン・ボール・クレヨン・ケシゴムの無生物名詞6種、「触った」・「押した」・「たたいた」・「かんだ」の動詞(厳密に言えば動詞と完了の助動詞「た」)4種の中からいずれかの項目を無作為に選び出した(ただしAA型の文では、Aは同一の生物名詞とならないようにする)。Table 5–1はこれらの文型および例文を示したものである。なお、名詞および動詞の選択基準は第四章に従った。

以上の27の文型に対して1文ずつ、合計27の文を作成し、テープに録音した。録音に際してのスピードは、各文を3秒で読み、読み終えて約7秒の間をとって次の文を読み始めた。この27文の録音の順番はランダムである。このようなテープを4種類作成した。これとは別に、第1名詞が有生名詞、第2名詞が無生名詞のN φ N ヲ V型の3文を録音したテープを作成し、練習文として用いた。この実験計画はBates *et al*. (1984)の研究等との交差言語的比較のためにもともとデザインされたものである。今回の報告では、第四章との直接的比較が目的であるので、全文型のうちNNV語順のみにかぎって結果の分析および考察の対象とした。

手続き：第四章に述べた実験手続きと同様の手続きを、この実験でも採用した。詳細については第四章を参照していただきたい。

5－3　結果

Table 5–2は各文型において第1名詞を動作主として選択した率(以下、第1名詞選択率)をあらわし、Table 5–3は、助詞に基づいて動作主を選択した率(以下、正答率)を示している。本研究での正答とは、ヲの入った文型の場合にはヲの付かない名詞を動作主として選択した場合であり、ガの入った文型ではその助詞の付いた名詞を動作主とした反応が正答となる。したがって、φヲ文・ガφ文においては第1名詞選択と正答は一致するのに対して、ヲφ文・φガ文の各文型では第1名詞を動作主として選択すると「誤答」となる。第1名詞が正答となる文を正語順(ガφ文・φヲ文)とよび、第2名詞が正答となる文

Table 5–2 First noun choice as agent in each sentence type(%)

	φヲV	ヲφV	ガφV	φガV
年中児群	78	62	78	42
年長児群	90	43	85	35
小1生群	95	23	83	45
小3生群	97	17	83	38
小5生群	90	27	97	18
中1生群	97	8	90	18
中3生群	97	7	93	10
大学生群	98	3	90	22
MEAN	93	24	88	29

Table 5–3 Correct answer according to the particle (Particle strategy use) (%)

	φヲV	ヲφV	ガφV	φガV
年中児群	78	38	58	58
年長児群	90	57	85	65
小1生群	95	77	83	55
小3生群	97	83	83	62
小5生群	90	73	97	82
中1生群	97	92	90	82
中3生群	97	93	93	90
大学生群	98	97	90	78
MEAN	93	76	88	71

を逆語順(φガ文•ヲφ文)とよぶ。Table 5–2とTable 5–3のうちφヲV、ヲφVの文型は、今回の実験のデータによっており[1]、ガについての文型(ガφV•φガV)は、第四章の実験データによっている。

Table 5–2のφヲV、ヲφV、ガφV、φガVの4文型について、A(年齢:8水準)×B(助詞の種類:ガとヲの2水準)×C(助詞の位置:正語順と逆語順の2水準)×D(名詞の意味:AA•AI•IAの3水準)の4要因の分散分析をおこ

Table 5–4 Summary of ANOVA (from first noun choice data)

Source	SS	df	MS	F	POWER(%)
AGE (A)	8.40	7	1.20	4.51***	1.49
PARTICLE (B)	0.00	1	0.00	0.02	0.00
AB	2.58	7	0.37	1.38	0.46
S/AB	38.33	144	0.27		
POSITION (C)	392.70	1	392.70	733.77***	69.60
AC	34.21	7	4.89	9.13***	6.06
BC	2.40	1	2.40	4.48*	0.43
ABC	9.62	7	1.37	2.57*	1.70
CS/AB	77.07	144	0.54		
ANIMACY (D)	70.37	2	35.18	112.76***	12.47
AD	25.28	14	1.81	5.79***	4.48
BD	0.58	2	0.29	0.92	0.10
ABD	10.24	14	0.73	2.34***	1.81
DS/AB	89.87	288	0.31		
CD	3.49	2	1.75	11.65***	0.62
ACD	1.79	14	0.13	0.86	0.32
BCD	0.31	2	0.15	1.02	0.05
ABCD	2.28	14	0.16	1.09	0.40
CDS/AB	43.13	288	0.15		
TOTAL	812.65	959			100.00

*** p<.001　** p<.01　* p<.05

なった。その結果を Table 5–4 に示す。ここで、Cの要因は正語順と逆語順で第1名詞選択率が変動するかどうかの要因であり、助詞に基づく動作主選択(=助詞方略)をするとこの主効果の値は大きくなる。Dの要因は有生性 Animacy に基づく動作主選択(意味方略)の要因であり、一貫して有生名詞を動作主として選択すればDの主効果が大きくなる。

主効果では、A(年齢)、C(助詞の位置)、D(名詞の意味)の3つが有意であり、1次の交互作用では、A×C(年齢×助詞の位置)、A×D(年齢×名詞の意味)、B×C(助詞の種類×助詞の位置)、C×D(助詞の位置×名詞の意味)の4つが有意であり、2次の交互作用では、A×B×C(年齢×助詞の種類×助詞の位置)とA×B×D(年齢×助詞の種類×名詞の意味)が有意であっ

た。

年齢（A）：年齢の主効果が有意であったのは、両助詞の実験とも年齢が上がるにつれ正答率(=助詞によって動作主を判断する率)が高まり、逆語順の第1名詞選択率が低くなるので、全般的に第1名詞選択率が年齢とともに低くなっていることの反映である。

助詞の位置（C）：この主効果は助詞を手掛りとする度合(助詞方略)をあらわしている。Cの2水準の値の差が大きければ大きいほど正答率が高い。この要因の値が他の要因に比べて圧倒的に大きかったこと(検出力 power=69.6%)は、全体的に助詞によって文理解をしている反応が多かったことを示している。

年齢と助詞の位置（A×C）：A×Cの交互作用が有意であったのは、助詞に基づく正答率が年齢によって有意に差があるということを表わしている。このことは、Table 5–2の正語順と逆語順の差を各年齢間で比較してみると明らかである。低年齢で助詞の手掛りを用いることが少なかったことが原因である。

助詞の種類と助詞の位置（B×C）：助詞の種類の第1名詞選択率の主効果(B)が有意でなかったのは、一見、ヲがガよりも格標示力が強いというわれわれの仮説を支持していないようにみえる。しかし、主効果Bは、Table 5–2でみられるように、ヲの文(φヲV文+ヲφV文)の2文型の第1名詞選択率(93%：24%)の全体的平均(58.5%)とガの文(ガφV文+φガV文)の2文型(88%：29%)の第1名詞選択率の全体的平均(58.5%)との間に差がないことを示しているだけにすぎない。Cの2水準の値の差が大きければ大きいほど正答率が高いので、B×Cの交互作用が有意であったのは、全体的にガとヲの両助詞の正答率の間に有意差があったことを示している。ヲの文の第1名詞選択率は、正語順(φヲ文：93%)と逆語順(ヲφ文：24%)の差が、ガの文の場合(正語順＝ガφ文：88%と逆語順＝φガ文：29%)の差よりも大きく、ヲはガよりも有意に正答率が高かった。したがって仮説1は支持された。

年齢と助詞の種類と助詞の位置（A×B×C）：全般的に両助詞の正答率に

Table 5–5 Cue strength of particle vs. animacy against word order: comparison of power from sub-analysis of variance

Age (A)	Sentences with "O" (b1)		Sentences with "GA" (b2)	
	Position (C)	Animacy (D)	Position(C)	Animacy (D)
年中児群	4.66%	92.46%	34.77%	65.09%
年長児群	60.68%	35.45%	74.26%	24.26%
小1生群	88.85%	8.75%	38.87%	57.02%
小3生群	98.13%	1.62%	44.86%	52.55%
小5生群	80.40%	16.48%	95.01%	3.35%
中1生群	97.64%	1.88%	96.05%	3.84%
中3生群	97.33%	1.87%	98.43%	1.02%
大学生群	99.39%	0.43%	83.67%	14.73%

有意差がある(B × C)のだが、この有意差は年齢要因によって左右される(A × B × C)。Table 5–5は、この交互作用および交互作用A × B × Dを説明するために、ヲの実験の8群とガの実験の8群との合計16群の各々について、助詞の位置の要因(C)と名詞の意味(D)の要因との分散分析を行い、その結果から平方和の大きさの比率を表わす検出力(POWER)を比較したものである。Table 5–5のParticleの列から明らかなように、ヲの文(φヲ文・ヲφ文)の場合には、小1生児群で助詞の手掛りによる反応が多くなっているのに対して、ガの文(ガφ文・φガ文)の場合には、小5生群の頃に助詞方略に基づく動作主判断がおこなわれている。このように、A × B × Cの交互作用が有意であるのは、両助詞の獲得時期の年齢差から説明できよう。さらに、ガの文で、大学生の助詞方略が小5生群・中1生群・中3生群よりも減少していることも寄与しているかもしれない。おとなの文法的な方略である助詞方略のこの減少は、中国語にもみられる現象である(Miao *et al.*, 1984)。

ヲの文の理解の獲得時期がガの文の理解の獲得時期よりも有意に早いので、仮説2は支持された。

名詞の意味（D）：名詞の意味が有意であったのは、全体的にいって、日本人の被験児・者は格助詞がある文でも意味方略を用いるということを示してい

Table 5–6　Number of

	φヲV（正語順）			ヲφV（逆語順）		
年齢	AφAヲ	AφIヲ	IφAヲ	AヲAφ	AヲIφ	IヲAφ
年中児群	20**	20**	$7^{N.S.}$	<u>18</u>**	<u>19</u>**	0**
年長児群	20**	20**	$14^{N.S.}$	$9^{N.S.}$	$14^{N.S.}$	3**
小1生群	20**	20**	17**	4*	$9^{N.S.}$	1**
小3生群	20**	20**	18**	3**	5*	2**
小5生群	20**	20**	$14^{N.S.}$	4*	$10^{N.S.}$	2**
中1生群	20**	20**	18**	1**	4*	0**
中3生群	20**	20**	18**	0**	4*	0**
大学生群	20**	20**	19**	0**	2**	0**

下線をひいた年中児群のAヲAφV文・AヲIφV文、および小1生群のAφIガV文に対する反応が有意であった。これらの文型では第2名詞が正答であるので、この3つのセルでは誤答が有意に多かったことを示している。

る。しかし、A×DおよびA×B×Dの交互作用が有意であるので、さらに年齢の要因と助詞の種類の要因を検討する必要がある。

年齢と名詞の意味（A×D）：年齢の低い被験児群が、名詞の意味（有生性）に、より大きく影響された反応をしたため、この交互作用が有意となった。しかし、この傾向は助詞ヲと助詞ガの間で差があることが、A×B×Dの交互作用が有意となっていることからみてとれる。

年齢と助詞の種類と名詞の意味（A×B×D）：Table 5–5のAnimacyの列の比較により、交互作用A×B×Dをみることができる。これによれば、ヲの文においては、意味の手掛りの影響力が強いのは年中児群と年長児群のみであるのに対して、ガの文では年中児群から小3生群まで意味の方略が多用されているという差があり、ヲの格標示力の獲得がガの格標示力の獲得よりも早いことがわかる。また、大学生群で両助詞間を比較すると、ガの文の方では意味方略を用いることがある(14.7%)のに比べ、ヲの文(0.4%)ではほとんど意味の手掛りは用いられなかった。

Table 5–6は各年齢群での12文型すべてに対する第1名詞選択数を示したものである。各文型のうち語順と意味と助詞が連携（各手掛りの示す格関係が合致）

first noun choice (Range:0 − 20)

ガφ文（正語順）			φガ文（逆語順）		
AガAφ	AガIφ	IガAφ	AφAガ	AφIガ	IφAガ
18**	20**	9$^{N.S.}$	11$^{N.S.}$	13$^{N.S.}$	1**
19**	20**	12$^{N.S.}$	8$^{N.S.}$	9$^{N.S.}$	4*
20**	20**	10$^{N.S.}$	9$^{N.S.}$	15*	3**
19**	20**	11$^{N.S.}$	9$^{N.S.}$	14$^{N.S.}$	0**
19**	20**	19**	3**	7$^{N.S.}$	1**
18**	20**	16*	4*	5*	2**
19**	20**	17**	1**	3**	2**
19**	20**	15**	4*	9$^{N.S.}$	0**

** p<.01　0~3、17~20　検定は岩原(1957)の二項分布表を利用。

* p<.05　0~5、15~20

N.S.　有意差なし

する文型は、AφIヲV文とAガIφV文である。これらの文型は語順・意味・助詞の3つのいずれの手掛りによっても、第1名詞が動作主であると解釈される。これら2文型に対する反応は、いずれの年齢群でもすべて正答であった。

また、意味は中立的だが語順と助詞が連携する2文型を比較すると、AφAヲV文ではすべての年齢群で一貫して正答を出し、AガAφV文でも全群で有意に正答が多かった。このように他の要因と助詞が競合しない場合には正答が圧倒的に多くてすでに年中児群から文理解が正しく行なわれていた。

これに対して、AヲIφV文とAφIガV文は、語順と意味の両方の手掛りとも助詞と競合(=対立・矛盾)している。つまり、助詞の手掛りによれば第2名詞が動作主、すなわち正答は第2名詞なのだが、意味の手掛りでも語順の手掛りでも第1名詞が動作主として選択されやすいという競合関係をもった文型である。これら2文型を比較すると、助詞ヲのほうは小3生、中1生~大学生の4群が有意に正答が多かったのに対して、助詞ガの方は中1生・中3生の2群のみが有意に多い正答数を得た。

さらに、意味の手掛りは中立だが語順と助詞とが競合しているAヲAφV文とAφAガV文でも、助詞ヲのほうは、小1生群以降の6群が有意に多い正

答を得たのに対し、助詞ガの正答数が有意に多かったのは小5生以降の4群だけであった。このように他の要因が助詞と競合する場合には助詞ヲの方が助詞ガよりもより低年齢で有意に多い正答数に達した。

このことからも仮説2は支持された。

助詞の位置と名詞の意味（C×D）：この交互作用の有意差は、名詞の意味とその名詞についた助詞とが競合関係（正答にあたる名詞が無生）にあるか連携関係（正答にあたる名詞が有生）にあるかで動作主選択率が異なることを示している。連携関係にある文型は、正語順のAI文（正答率はAφIヲ文とAガIφ文ともに100%）および、逆語順のIA文（IヲAφ文は正答率95%、IφAガ文は正答率92%）であり、いずれも正答率が高い。一方、助詞と意味が競合関係にある正語順のIA文（IφAヲ文は正答率78%、IガAφ文の正答率は68%）および逆語順のAI文（AヲIφ文は正答率58%、AφIガ文の正答率は53%）では、意味の要因が助詞による動作主選択をかなり妨害しているといえるだろう。

なお、CとDの2要因を含む3要因•4要因の交互作用はいずれも有意でなかったので、この、連携関係と競合関係が文理解の反応に与える作用は、各年齢群間（A）および両助詞間（B）で、共通のものであると推測できる。

5－4　考察

本研究の結果から仮説は2つとも支持された。したがって、一般的にも発達的にもヲの手掛りの強さはガよりも強いということができる。助詞の意味が複雑なガよりも、ほぼいつも目的語のマーカーとして使われ、形式と意味の対応が明確なヲの方が、格助詞としての機能が強く、習得しやすいといえる。しかし、意味の要因や助詞の位置の要因に左右されること無く、助詞の機能に基づいて文処理を文法的に正しい方法で行うことができるようになるのは、ヲでは小学校1年生頃、ガでは小学5年生頃以降である。

上の2つの仮説は支持されたので、第三章と第四章で明らかにされた、助詞ガの手掛りが助詞ハの手掛りよりも強いという結果をふまえると、格関係に

ついての助詞の手掛りの強さは成人においても、発達的にいっても、ヲ＞ガ＞ハの順であるということを本研究は明らかにした。

ヲがガ・ハよりも早いとはいえ、このように遅い獲得であったことの原因として指摘されなければならないのは、日本語の助詞の手掛りの強さが弱いことである。子どもは必ずしも文法的な手掛りのみによって文の判断を行なっているのではなく、名詞の意味の手掛りや語順などの手掛りを用いる。これは、Hayashibe (1975)、Hakuta (1982)、鈴木 (1977)、岩立 (1986)、後藤 (1987) などの先行研究によってすでに明らかにされている。

幼児が大人の発話の構文を理解し始める時期について瓜生 (1986) は、2歳以前の子どもでも生活場面では養育者のかなり複雑な言語教示に従えることが経験的に知られていることを踏まえ、使役命令文における動作主－被動作主という格関係の理解が2歳頃すでに成立すると述べている。本研究においても、助詞・意味・助詞の位置の手掛りが動作主の決定に対して競合せず一致して働く場合や、名詞の意味の要因が中立で助詞と語順の手掛りが一致する場合では、年中児群ですでに動作主－被動作主の格関係を理解していることが明らかにされた。しかし他方では、文法的な手掛りである助詞の手掛りを、意味的手掛り、例えば有生性や、助詞の位置の要因などと対立させた場面や、受動文の理解を課題としたときなどでは、文法的知識に基づいて正しく文処理ができる時期は遅いことが本研究で指摘されたし、先行研究 (Hayashibe, 1975 ; Hakuta, 1982 ; 鈴木 1977 ; 岩立 1986, 後藤 1987 など) でも繰り返し明らかにされている。ある手掛りが、手掛りとして利用され始める時期から、その手掛りが他の手掛りと競合していてもそれに打ち勝つほどの強さを有するように機能が確立する時期までには長い時間がかかる。日本語の助詞の場合、初出から真の習得までに長い道のりがあることが示唆される。

実際の言語運用では、文理解の手掛り (助詞・語順・意味等) は、相乗的に働く場合が多く、本実験の刺激文の一部のように手掛りが競合する場合はむしろ稀である。文処理をする子どもがある文法的手掛りの獲得途上にあっても、

他の手掛りの助けによって正しく文を解釈できるので、現象的には獲得ずみのように観察されることもあろう。本実験で用いたような、手掛りを競合させた条件での研究は、自然場面での観察に基づく言語発達研究と補いあって発展していくものであろう。

日本語助詞の使用・理解の開始から完成までの過程や、習得の機制を明らかにすることが今後の課題である。また、本実験ではヲの獲得時期が小学3年以降となっているが、岩立・稲葉(1987)が指摘するような、課題の複雑性の問題なのか、あるいは本当に助詞による動作主判断がこのように遅いのかについて明らかにすることにも検討の余地があろう。今後の研究の発展として、韓国語の助詞と比較することも興味深い(第七章参照)。

註

(1)　2本のテープの同型の文型に対する各被験者の反応の一致率の平均は、AヲAφV文が84%、AヲIφV文が81%、IヲAφV文が90%、AφAヲV文が100%、AφIヲV文が100%、IφAヲV文が89%といずれも高い値であった。

第六章　韓国語単文理解における主題助詞と主格助詞の動作主性とその発達：日本語の助詞ハとガとの比較

【要約】第六章は、第四章でおこなわれた主題助詞と主格助詞の統語機能の発達を、韓国語について調べ、日本語のハとガと比較したものである。日本語のハとガと同様の区別が行なわれているとみられる韓国語の主題助詞eun/neunと主格助詞i/gaについて、第四章の文理解の方略の実験と同型の実験を韓国語母語話者の幼児から成人までの8群に対して行った実験の報告である。日・韓両言語に共通して、成人において主格助詞の方が主題助詞よりも動作主性が高かったことがわかった。また、助詞が第1名詞につくか第2名詞につくかという助詞の位置（語順）の影響を受けずに助詞によって動作主を選択できる時期が12歳以降であった。両言語とも主題助詞と主格助詞の獲得の時期の遅さに共通点がみられた。現代日本語と現代韓国語の基本語彙を比較すると類縁性がそれほど強くないという研究もあるが[(1)]、文法的観点からみると両言語は類似性が高い。

6－1　問題

日本語において主題助詞ハと主格助詞ガの用法上の区別は、心理言語学的に動作主性という観点から研究がなされている。動作主性とは、第三章で定義したように「能動文中で、その助詞の名詞句が動作主として選択される蓋然性」である。第三章では、日本語を母語とする成人話者に2つの名詞句と他動詞からなる単文を聞かせ、一方の名詞句にハまたはガが付いた場合と両方の名詞句に各々ハとガが付いている場合のそれぞれで、ガの付いた名詞句が

他動詞の動作の主体(動作主)として選択される率がハのそれよりも高いこと、ハよりもガの動作主性が高くなるのは、ガが他動詞文で主格をあらわす格助詞であるのに対してハは主題提示の助詞であり格関係をあらわす機能を備えていないこと、しかし、実際の言語運用では動作主にあたる名詞句は主題化されることが多いことから、ハは文法的には格関係を示さないが言語使用経験に基づいた経験的・心理的機能として聞き手に動作主であると解釈させる力があることを明らかにした。韓国語成人母語話者が主題助詞 eun/neun と主格助詞 i/ga の付いた名詞句を動作主として判断する場合、日本語と同じような現象が見られるかどうか調べることは興味深い。

ところで、日本語を母語とする者でも、この助詞ハとガの獲得はかなり遅いことが明らかにされてきている（第四章、近藤, 1978；秦野, 1979；Miyazaki, 1979；林部, 1983；岩立, 1986)。第四章では日本人母語話者において、ハの動作主性とガのそれが年齢とともにどのように変化するか調査し、ハとガの動作主性が語順によらず成人の水準に達するのは10歳以降であるということを明らかにした。韓国語において日本語のハとガと同様の発達的傾向があるかどうかについては、これまで調査がなされていない。

本章の目的は、第四章の実験と同一の方法を韓国人の被験者に対して韓国語を用いることによって、以下の問題を明らかにすることにある。第1に、Li and Thompson (1976)が日本語と同じグループに分類した韓国語において主題助詞 eun/neun と主格助詞 i/ga の動作主性の高さをそれぞれ調べ、両者を比較する。第2に、このような助詞による動作主選択がいつ頃獲得されるのかを明らかにする。第3に、助詞という文法的手掛り以外に、どのような手掛りを用いて動作主を決定しているか(どのような文理解の方略を使用するか)を明らかにする。第4に、以上の3点を第四章で明らかにした日本語の場合と比較し、両言語の特徴を明らかにする。本章は、韓国語の母語の教育および(日本人を含む)外国人向けの韓国語教育の基礎資料になるのみならず、韓国語と日本語を比較することにより日本語教育・国語教育へも示唆を与えるものとなろう。

6－2　方法

6－2－1　被験者

韓国語を母語とするソウル及びソウル近郊の4、5、6、8、10、12、14歳、大学生の8群で、各群10名(男5名、女5名)、計80名。実験は1986年3月にソウルで実施され、実験時の各群の平均年齢は、それぞれ4歳9ヶ月、5歳6ヶ月、6歳8ヶ月、8歳7ヶ月、10歳9ヶ月、12歳6ヶ月、14歳7ヶ月、20歳5ヶ月であった。

6－2－2　実験材料

刺激文を録音したカセットテープ、ミニチュアの動物と小物、テープレコーダー、A4の白紙、記録用紙。刺激文はTable 6–1に示すように2つの名詞(N)と動詞(V)からなるN1+N2+V型の文(N1とN2は文中における名詞の位置で、文頭の名詞[第1名詞]をN1、動詞の直前の名詞[第2名詞]をN2とする)で、助詞の種類(3通り)×助詞の位置(2通り)×意味(3通り)により構成された18文型である。ここで助詞の種類とは刺激文中に主格助詞i/ga(以下、便宜上、主語subjectの頭文字を取ってSと表示)のみを用いたもの、主題助詞eun/neun(以下主題topicの頭文字を取ってTと表示)のみを用いたもの、TとSの両助詞を用いたもの3通り、助詞の位置とは助詞をN1とN2のどちらに後置させるかで、S(ただしTのみを用いる文ではT)をN1に後置させる場合とN2に後置させる場合の2通り、意味とはN1、N2の名詞が生物(A)か無生物(I)かで、両名詞が生物(AA)、N1が生物でN2が無生物(AI)、N1が無生物でN2が生物(IA)の3通りである。この18の文型に対して、魚、鹿、犬、亀、らくだ、馬の生物名詞6種、箱、鉛筆、スプーン、ボール、クレヨン、ケシゴムの無生物名詞6種、「触った」「押した」「叩いた」「噛んだ」の動詞4種の中から無作意にA、I、Vを選び出し(ただしAAV型の文では、Aは同一の生物名詞とならないようにする)、各文型に対して1文ずつ、合計18の文を作成しテープに録音する。名詞および

Table 6–1　刺激文のタイプ

	助詞	正答	意味	文型		例文	
SとT	S T文	N_1 正答	中　立	(1) $A_S A_T V$	Geobug i mulgogi neun mileotta.	(亀ガ 魚ハ 押した)
			A ＝ 正	(2) $A_S I_T V$	Ge ga yeonpil eun manjyeotta.	(犬ガ 鉛筆ハ触った)
			I ＝ 正	(3) $I_S A_T V$	Sangja ga ge neun mileotta.	(箱ガ 犬ハ 押した)
	T S文	N_2 正答	中　立	(4) $A_T A_S V$	Ge neun nagta ga mileotta.	(犬ハ らくだガ 押した)
			A ＝ 正	(5) $A_T I_S V$	Mal eun jiuge ga muleotta.	(馬ハ ケシゴムガ 噛んだ)
			I ＝ 正	(6) $I_T A_S V$	Jiuge neun geobug i tteryeotta.	(ケシゴムハ 亀ガ 叩いた)
Sのみ	S ϕ文	N_1 正答	中　立	(7) $A_S A \phi V$	Ge ga mal mileotta.	(犬ガ 馬 押した)
			A ＝ 正	(8) $A_S I \phi V$	Mal i cleyong mileotta.	(馬ガ クレヨン 押した)
			I ＝ 正	(9) $I_S A \phi V$	Gong i mulgogi muleotta.	(ボールガ 魚 噛んだ)
	ϕ S文	N_2 正答	中　立	(10) $A \phi A_S V$	Nagta saseum i muleotta.	(らくだ 鹿ガ 噛んだ)
			A ＝ 正	(11) $A \phi I_S V$	Saseum sutkarag i muleotta.	(鹿 スプーンガ 噛んだ)
			I ＝ 正	(12) $I \phi A_S V$	Yeonpil saseum i muleotta.	(鉛筆 鹿ガ 噛んだ)
Tのみ	T ϕ文	N_1 正答	中　立	(13) $A_T A \phi V$	Mal eun nagta manjyeotta.	(馬ハ らくだ 触った)
			A ＝ 正	(14) $A_T I \phi V$	Geobug eun sangja tteryeotta.	(亀ハ 箱 叩いた)
			I ＝ 正	(15) $I_T A \phi V$	Cleyong eun nagta muleotta.	(クレヨンハ らくだ 噛んだ)
	ϕ T文	N_2 正答	中　立	(16) $A \phi A_T V$	Geobug mulgogi neun manjyeotta.	(亀 魚ハ 触った)
			A ＝ 正	(17) $A \phi I_T V$	Saseum gong eun tteryeotta.	(鹿 ボールハ 叩いた)
			I ＝ 正	(18) $I \phi A_T V$	Sutkarag mulgogi neun mileotta.	(スプーン 魚ハ 押した)

N_1：第1名詞，N_2：第2名詞，A：生物名詞，I：無生物名詞，T：eun／neun，S：i／ga，ϕは助詞を付けないことを示す。

動詞の選択は、第四章と同一の基準に基づいているので参照していただきたい。

以上の方法により構成された刺激文の一部は、日常生活では聞かれることのない人工的な文となる。しかし、すでに述べたように本章は助詞の種類と助詞の位置、意味の3要因の中で、韓国語母語話者がどの手掛りに基づいて文を理解するかを発達的に明らかにすることを目的にしている。本章で用いた方法を採用することにより、第1に、上述の各要因の主効果と交互作用を数量的に明らかにすることができ、第2に、第四章の日本語の研究と同一の方法を用いることで、韓国語と日本語の直接の比較が可能になる。

録音のスピードは各文を3秒で読み、読み終えて約7秒の間をとって次の文を読みはじめた。18文の録音の順番はランダムである。1本のテープは以上の

ように18の文型で各文型1文ずつの18文とし、同様の方法で4本のテープを作成する。また、「犬ガ亀 叩いた」「鹿ハ馬 噛んだ」「らくだガ魚 押した」「鹿ハらくだ 触った」の4文を録音したテープを練習文として作成した。ミニチュアや小物は、練習文、刺激文中の生物、無生物名詞を型どったもので、各名詞1つずつ計12個である。

6－2－3　手続き

A4の白紙の上にランダムに置かれた12個のミニチュア、小物を命名することができるかどうか確認した後、「今からテープレコーダーから、短いお話し(小学校1年以降は「文」)が聞こえてきます。そのお話し(文)をよく聞いて、目の前にあるものを使って、その通りにやってみせて下さい。そのとき、両手を使わないで片手でやってみせてください。」という教示を与え、練習文のテープを聞かせる。片手で実演するように教示したのは、両手を使って2つのものを持つと動作主の判断が困難になるからである。また、お話し(文)を聞き落としたときには何度でもテープを聞くことができることも告げておく。練習文で実演することができたら、ミニチュア・小物の位置を変えて、4本のテープのうちの1本を無作意に選び出し、実演させる。終了後、2、3分の休憩の後に、残った3本のテープのうちの1本を無作意に選び、同様の手続きで実演させる。なお、実験は本書の著者の1人である韓国語母語話者が実験者となることにより、すべて韓国語で行われた。

6－3　結果

6－3－1　分析方法

各被験者について、18文型ごとに正答率を算出する。本章の定義では、Table 6–1にいう、S φ文、φ S文、TS文、ST文の4文型ではSの付いた名詞を動作主として選択したものを正答とし、T φ文とφ T文の2文型に対してはTの付いた名詞を動作主として選択したものを正答とする。この正答の定義に

従えば、S φ文、φ S文それぞれの正答率はS単独の動作主を、T φ文、φ T文それぞれの正答率はT単独の動作主性を、また、ST文、TS文における正答率はTの動作主性に競合・対立したSの動作主性を示す。したがって、ST文(TS文)におけるTの動作主性は{100% − ST文(TS文)の正答率}により算出することができる。生物・無生物の意味の要因については、第1名詞・第2名詞とも生物名詞である「正答中立型」(意味の要因は動作主選択に対して中立)と、生物名詞にS(T φ文とφ T文ではT)が付き無生物名詞にSの付かない「正答=生物型」(正答の名詞は生物名詞)と、無生物名詞にS(T φ文とφ T文ではT)が付き生物名詞にSの付かない「正答=無生物型」(正答の名詞は無生物名詞)の3水準に分けた(Table 6–1 参照)。したがって「正答=無生物型」での正答は生物か無生物かという意味的手掛りによらず、それと対立・競合した主格助詞(T φ文とφ T文では主題助詞)によって動作主が判断されたことを示している。

6 − 3 − 2　分散分析

正答数に基づいて、年齢(8水準)×助詞の種類(3水準)×助詞の位置(語順)(2水準)×意味(3水準)の分散分析を行った。分析の結果、ならびに誤差項目を除いた全項目の中に占める各要因および交互作用の平方和の割合(検出力:power)を示したのがTable 6–2である。

／年齢／　**年齢と正答率**:年齢の主効果が有意であったのは、Table 6–3の各行の平均値から明らかなように、各被験者群の正答率の全体の平均に差のあることを示している。すなわち各群の平均正答率(70.2%)を境として、4 ~ 10歳群よりも12歳 ~ 大学生群の方が正答率が高い。

／助詞の種類／　**助詞の種類と正答率**:Table 6–3の列の各平均に示すように、Tのみの文(T φ文とφ T文)においてTの付いた名詞を動作主として選択した率(T φ文とφ T文の正答率の平均)と、TとSの両助詞を用いた文(TS文とST文)においてSの付いた名詞を選択した率(TS文とST文の正答率の平均)が66%でほぼ同率であるのに対して、Sのみの文(S φ文とφ S文)においてSの

Table 6–2　正答得点に関する分散分析表および検出力 power:
韓国語の動作主性の発達

要因	SS	df	MS	F	Power (%)
年齢 (A)	55.55	7	7.94	10.43***	10.7
誤差	54.78	72	0.76		
助詞 (B)	18.53	2	9.26	28.74***	3.6
(A) × (B)	8.83	14	0.63	1.96*	1.7
誤差	46.42	144	0.32		
助詞の位置 (C)	273.88	1	273.88	246.42***	52.6
(A) × (C)	86.77	7	12.40	11.15***	16.7
誤差	80.02	72	1.11		
(B) × (C)	21.02	2	10.51	42.46***	4.0
(A) × (B) × (C)	8.67	14	0.62	2.50**	1.7
誤差	35.64	144	0.25		
意味 (D)	8.15	2	4.08	9.45***	1.6
(A) × (D)	8.83	14	0.63	1.46	1.7
誤差	62.12	144	0.43		
(B) × (D)	4.84	4	1.21	6.93***	0.9
(A) × (B) × (D)	6.44	28	0.23	1.32	1.2
誤差	50.28	288	0.17		
(C) × (D)	1.71	2	0.85	4.21*	0.3
(A) × (C) × (D)	2.41	14	0.17	0.85	0.5
誤差	29.21	144	0.20		
(B) × (C) × (D)	5.79	4	1.45	8.39***	1.1
(A) × (B) × (C) × (D)	9.15	28	0.33	1.89**	1.8
誤差	49.72	288	0.17		
合計	928.77	1439			

* $p<.05$,　** $p<.01$,　*** $p<.001$

付いた名詞を選択した率 (S ϕ 文と ϕ S 文の正答率の平均) は 78.2% であり、助詞の主効果が有意であったのはこの差の反映である。年齢の要因を除外すれば、1 文中に主格のみが用いられた文 (S の動作主性 : 78.2%) と主題のみが用いられた文 (T の動作主性 : 66.1%) を比較しても、また 1 文中に主格と主題の両方が用いられる文 (S の動作主性 : 66.3%、T の動作主性 : 33.7%) においても、主格の動作主性の方が主題のそれよりも高いことがわかる。

Table 6–3　主題助詞 eun/neun (T) と主格助詞 i/ga (S) の動作主性

年齢	S＞T	T＞φ	S＞φ	平均
4歳	58.3	58.3	71.7	62.8
5歳	60.0	55.0	58.3	57.8
6歳	65.0	51.7	69.2	61.9
8歳	65.0	57.5	70.0	64.2
10歳	60.8	64.2	79.2	68.1
12歳	76.7	82.5	95.8	85.0
14歳	68.3	80.8	90.8	80.0
大人	75.8	79.2	90.8	81.9
平均	66.3	66.1	78.2	70.2

S>T　S と T 両助詞を用いた文 (ST 文と TS 文) における S の動作主性
T>φ　T のみ文 (T φ 文と φ T 文) における T の動作主性
S>φ　S のみ文 (S φ と φ S 文) における S の動作主性

年齢×助詞の種類：Table 6–3 から明らかなように、T と S の両助詞を用いた文、T のみの文、S のみの文の各文型で、4 ~ 10 歳群の正答率に比べて 12 歳 ~ 大学生群のそれの方が高い。すなわち、T と S の両助詞を用いた文では 4 ~ 10 歳群の平均正答率が 61.8% であるのに対して 12 歳 ~ 大学生群では 73.6%、T のみの文では 4 ~ 10 歳の平均正答率が 57.3% であるのに対して 12 歳 ~ 大学生群では 80.8%、S のみ文では 4 ~ 10 歳群の平均正答率が 69.7% であるのに対して 12 歳 ~ 大学生群では 92.5% であった。

／助詞の位置／　助詞の位置と正答率：Table 6–4 に示すように、N1 に S (ただし T のみの文では T) の付いた文、すなわち N1 が正答になっている文型 (S φ 文、T φ 文、ST 文) において N1 を動作主として選択した率は 92.0% であるのに対して、N2 に S (ただし T のみの文では T) の付いた文、すなわち N2 が正答になっている文型 (φ S 文、φ T 文、TS 文) において N2 を動作主として選択した率は 48.4% であった。助詞の位置に対する検出力 power も Table 6–2 に示すように 52.6% と非常に大きく、助詞の位置の要因は正答率に最も大きな影響を与えていると言うことができよう。

年齢×助詞の位置：Table 6–4 に示すように、N1 に S (ただし T のみの文では

Table 6–4　第1名詞と第2名詞の動作主選択率(%)

年齢	第1名詞＝動作主 (A)	第2名詞＝動作主 (B)	平均	(A)-(B)
4歳	97.8	27.8	62.8	70.0
5歳	89.4	26.1	57.8	63.3
6歳	92.2	31.7	61.9	60.6
8歳	97.8	30.6	64.2	67.2
10歳	92.8	43.3	68.1	49.4
12歳	91.7	78.3	85.0	13.3
14歳	85.6	74.4	80.0	11.1
大人	88.9	75.0	81.9	13.9
平均	92.0	48.4	70.2	43.6

T)の付いた文、すなわちN1が正答の文型においてN1を動作主として選択した率は年齢による群間差がほとんどなく85.6～97.8%であるのに対して、N2にS(ただしTのみの文ではT)の付いた文、すなわちN2が正答の文型においてN2を動作主として選択した率は4～8歳群では26.1～31.7%、10歳群では全体の平均値(48.4%)に近い43.3%、12歳～大学生群では74.4～78.3%であった。このことから助詞の種類との交互作用を除外すれば、第1名詞にS(Tのみの文ではT)の付いた文型では年齢によらず第1名詞を動作主とする傾向が大であるのに対して、第2名詞にS(Tのみの文ではT)の付いた文型では正答が年齢とともに増加し、12歳の頃、大人の水準に達するという特徴のあることが確かめられた。

助詞の種類×助詞の位置：正答率の各文型における全体的平均はST文83.1%、TS文49.4%、Tφ文96.5%、φT文35.8%、Sφ文96.5%、φS文60.0%であった。したがって、Sφ文とTφ文で最も高く、ST文、φS文、TS文と続き、φT文において最も低くなっている。助詞のある名詞が文頭にきたとき(Sφ文、Tφ文)の方が第2名詞に助詞が付く場合(φS文、φT文)よりも正答率が高いこと、1文中にSとTの両助詞を用いた文では、Sが第1名詞

に付く場合(ST文)の方が第2名詞に付く場合(TS文)よりも正答率が高いことが示された。しかし、年齢との交互作用をさらに見る必要があろう。

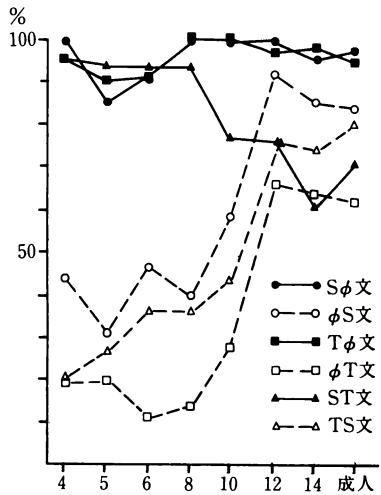

Fig. 6–1　各年齢における各文型の正答率

年齢×助詞の種類×助詞の位置：Fig. 6–1は6文型の正答率を各年齢ごとにグラフにあらわしたものである。Sφ文とφS文を比較すると、Sφ文では全群で正答率が高く群間差が大きく認められないのに対して、φS文では4～10歳群の正答率が低く(31.7～58.3%)、助詞の位置に関係なくいつもSの付いた名詞を動作主とするのは12歳以降であるといえよう。Tφ文とφT文の正答率の年齢変化を比較すると、Tφ文では全群で正答率が高く群間差が少ない。これに対してφT文では低年齢群、すなわち4～10歳群での正答率の低さ(11.7～28.3%)が顕著で、むしろ助詞のない第1名詞を選択する傾向があると言えよう。しかし、12歳～大学生群での正答率も61.7～66.7%までしか増加せず、大学生でも第2名詞にTの付いた文においてTの動作主性は第1名詞にTの付いた場合よりも低い。さらに、TS文とST文についての同様の比較をすると、TS文は4～10歳群では正答率が50%以下、すなわちSよりもTの動作主性の方

が高いが、12歳～大学生群では正答率が75～80%に増大し、Sの動作主性の方が高くなる。一方、ST文では4歳群ですでに96.7%の正答率に達しており、Sの動作主性は年齢につれて、むしろ減少する傾向にある。しかし、ST文では全群、Sの動作主性の方がTのそれより高く、14歳群の61.7%を除外してSの動作主性は71.7%以上である。第1名詞が正答となる3文型(ST文、Tφ文、Sφ文)を各文について比較すると、Fig. 6–1から明らかなように年齢的変化に伴う正答率は単調増加とならず正答率も高い。これに対して第2名詞が正答となる3つの文型(TS文、φT文、φS文)は正答が年齢とともに増加し、12歳の頃ほぼ大学生の正答率に達するという特徴があることが認められる。しかし、この3要因の交互作用が有意になったのは、Tφ文とφT文の場合に高年齢であっても2語順間の正答率の差がかなり大きいということに帰せられる。すなわち、12歳～大学生群までのSφ文とφS文の正答率の差は8.3～15.0%であり、ST文とTS文の正答率の差は0.0～13.3%と小さいのに対して、Tφ文とφT文との正答率の差は31.6～35.0%と大きい。

／意味／　意味と正答率：意味の水準ごとに正答率の全体的平均をみると、正答中立型では69.0%、正答＝生物型では75.3%、正答＝無生物型では66.4%であった。したがって、動作主の選択に名詞の意味の要因が関与し、動作主の選択に対する意味の要因は生物名詞にS(ただしTのみの文ではT)の付いた正答＝生物型の文が最も強く、1文中の両名詞が生物名詞で意味の要因が動作主選択に対して中立の正答中立型の文がこれに続き、意味と助詞の手掛りが対立する正答＝無生物型の文、すなわち無生物名詞にS(Tのみの文ではT)の付いた文が最も弱いことが認められる。しかし、意味の主効果のpowerは1.6%と主効果のpowerの中で最も小さく、意味の要因が動作主判断に与える影響は小さい。

助詞の種類×意味：意味要因への依存の程度を明らかにするために、本章でも第三章と比較するために、意味方略使用率(PUMS)を導入した。PUMSは{【AI型の文で第1名詞を動作主として選択した率(%)】－【IA型の文で第1名

詞を動作主として選択した率(%)】}で算出される値である。もし被験者が助詞の種類、位置とは無関係に生物名詞を動作主として常に選択すればPUMSは100%、もし常に無生物名詞を動作主として選択すれば－100%、もし生物・無生物といった意味的手掛りに全く依存せず動作主を決定すれば0%となる。助詞の種類の3水準についてPUMSを算出すると、Sのみの文で10.0%、Tのみの文で14.4%、SとTの両助詞を用いる文で2.5%であった。したがって、意味の要因は主題のみの文で最も強く影響し、主格のみの文がこれにつづき、1文中に主格と主題の両方が用いられる文では動作主決定に意味の要因がほとんど影響していないといえるが、助詞の位置の要因との交互作用をみる必要がある。

助詞の位置×意味：助詞の位置の2水準についてPUMSを計算すると、N1が正答の文型(Sφ文、Tφ文、ST文)で7.9%、N2が正答の文型(φS文、φT文、TS文)で10.0%であり、N2が正答である文型の方が若干高い。しかし、この傾向はすべての助詞の種類についてあてはまるわけではない。助詞の種類との交互作用をさらに検討する必要がある。

助詞の種類×助詞の位置×意味：助詞の種類×助詞の位置の6水準についてPUMSを算出すると、Table 6–5の行の各平均に示すように、PUMS値の最も大きいものでもφT文の20.6%、つづいてφS文の15.0%であった。したがっ

Table 6–5　各年齢群の各文型における意味方略使用率(PUMS)(%)

	4	5	6	8	10	12	14	大人	平均
ST文	－10	5	20	－5	10	－10	25	50	10.6
TS文	5	25	15	－25	－15	－30	－25	5	－5.6
Tφ文	5	15	25	0	0	5	5	10	8.1
Sφ文	0	5	20	0	0	0	10	5	5.0
φT文	5	15	25	10	10	20	40	40	20.6
φS文	15	10	35	5	25	5	15	10	15.0
平均	3.3	12.5	23.3	－2.5	5.0	－1.6	11.7	20.0	9.0

T：eun/neun（主題助詞）　S：i/ga（主格助詞）

て、動作主の決定に生物名詞の要因が若干作用するが、全体としてはほとんど意味に依存していないこと、若干ながらも意味に依存する文型は第2名詞にのみ助詞の付くφS文とφT文の2文型であることが確認される。

年齢×助詞の種類×助詞の位置×意味：この4要因の交互作用はTable 6–5の各年齢群における各文型のPUMSによって示される。全体的にみてPUMSの値が特に高いのは、大学生群のST文の場合と、14歳と大学生群のφT文である。4～10歳群はPUMSの値が6歳群を除いて0%に近く6文型間の差が小さいのに対して、12歳群以上になると文型によるPUMSの値の差が大きい。また、TS文型においては8～14歳群でPUMSが負の値をとる、すなわち無生物名詞が動作主として、より選択されるという結果となった。

6－3－3　助詞・語順(助詞の位置)・意味の3つの手掛りの競合

6－3－2で述べた結果は18文型をすべて分散分析に基づいてまとめものである。それに対して、ここでは本章で定義した正答という分析方法を用いず、TとSの各々について助詞、助詞の位置、意味の3つの手掛りの競合関係(Bates et al, 1984)に着目して、ある手掛りが他の2つの手掛りと競合する文型についてのみとりあげる。まず、助詞の手掛りが助詞の位置(文頭の名詞)と意味の手掛りと対立しているのは「$A_{\emptyset}I_{T}V$文型」及び「$A_{\emptyset}I_{S}V$文型」(Table 6–1の文型17と11)である。これらの文型では、助詞の手掛りに基づけば助詞の付いた第2名詞(N2)が選択され、語順(助詞の位置)と意味の手掛りに基づけば第1名詞(N1)が選択される。意味の手掛りが他の2つの手掛りと対立するのは「$I_{S}A_{\emptyset}V$文型」及び「$I_{T}A_{\emptyset}V$文型」(文型15と9)であり、意味の手掛りに基づけば生物である第2名詞を選択するが、他の2つの手掛りに基づけば第1名詞を選択する。同様に「$I_{\emptyset}A_{S}V$文型」と「$I_{\emptyset}A_{T}V$文型」(文型18と12)は、助詞の位置の手掛り(第1名詞)が意味と助詞(第2名詞)に対立している。

Table 6–6は、以上の6文型において他の2つの手掛りと対立している手掛りについて、各々の動作主としての選択率を示したものである。したがって、

Table 6–6　手掛かりの競合する文型での単一手掛かりの使用率(%)

	主題(eun/neun)			主格(i/ga)			%合計		
被験者	助詞	意味	助詞の位置	助詞	意味	助詞の位置	主題	主格	平均
文型	(17)	(15)	(18)	(11)	(9)	(12)			
4歳児	20	5	75	45	0	40	100	85	93
5歳児	10	15	75	25	15	65	100	105	103
6歳児	0	25	75	35	20	30	100	85	93
8歳児	10	0	80	45	0	50	90	95	93
10歳児	20	0	70	50	0	25	90	75	83
12歳児	55	5	25	95	0	0	85	95	90
14歳児	50	5	10	85	10	0	65	95	80
大　人	40	10	20	85	5	5	70	95	83
平均	26	8	54	58	6	27	88	91	89

文型11と17のみが正答率と一致し、他の4文型での意味または助詞の位置(第1名詞)の手掛かりの使用率は、100%から正答率を引いた値となる。Tの入った文型について全体をみると、最も多く使用された手掛りは助詞の位置(第1名詞)、次に助詞であり、意味の手掛りの使用は少なかった。一方、Sの入った文について全体をみると、最も多く使用されたのは助詞の手掛り、次に助詞の位置(第1名詞)であり、意味の手掛りの使用は最も少なかった。TとSを比較すると、Sの入った文の方が助詞による動作主判断が多く、助詞の位置(第1名詞)による判断が少ないことが明らかである。各年齢群でみると、年齢が上がるにつれて助詞の手掛りによる動作主選択が増加するのに対して、助詞の位置(第1名詞)の手掛りの要因は減少する。意味の手掛りは、いずれの年齢においても少なかった。以上の結果は全体の分散分析の結果と一致している。

6－4　考察

6－4－1　韓国語成人における主題と主格の標識

Table 6–3に示すように、韓国語成人話者における主題助詞eun/neun (T)と主格助詞i/ga (S)の動作主性は、1文中にSのみの文(S φ文とφ S文の平均：90.8%)とTのみの文(T φ文とφ T文の平均：79.2%)を比較するとSのみの方が、またTとSの両方が用いられる文でのTとSの動作主性(Sの動作主性はST文とTS文の平均で75.8%、Tの動作主性は24.2%)でもSの方が高くなっている。主題助詞または主格助詞が単独であらわれる文でも、また1文中に両助詞が出現する文でも、主格助詞の動作主性が主題助詞のそれより高いことが明らかである。さらに、主題助詞のみの文では主題助詞の動作主性が高いことから、主格標識(i/ga)の無い単文では主題にあたる名詞句が動作主として知覚されやすい傾向が示された。韓国語のeun/neunは主題提示の特殊助詞であり(洪, 1983)、文法的には格関係を表わす機能を備えてはいない。しかし、実際の言語運用では他動詞文の動作主にあたる名詞句は主題化されることが多いことから、eun/neunが文法上はともかく、言語使用経験に基づいた経験的・心理的な機能として聞き手に動作主であると解釈される力があったことの結果として、主題助詞eun/neunの動作主性が高くなったのだと解釈される。i/gaは主格の格助詞であるので、本実験で用いたような他動詞文では動作主性が高かったのは当然である。eun/neunよりi/gaの動作主性が高かったことは韓国人成人話者が両者の機能を識別していることを示している。

6－4－2　主題助詞と主格助詞の動作主性の発達

Fig. 6–1を見れば、いわゆる正語順(N1が正答)の文型(S φ文、T φ文、ST文)では3文型いずれも4歳児で大人の正答率の水準(あるいはそれ以上)に達しているのに対して、逆語順(N2が正答)の文型(φ S文、φ T文、TS文)では3文型いずれも大人の正答率の水準に達するのは12歳以降であった。このことは、本

章でいう語順の要因、すなわち助詞の位置の要因が韓国語の文理解にとってきわめて重要な影響を与え、その影響は10歳にまで及ぶことを示している。Slobin & Bever (1982) は、子どもは最初その言語に特有な形式(規準的語順図式 canonical sentence schema)を獲得するとしている。韓国語の他動詞文において、これは「動作主+被動作主+動詞」という語順に相当する。韓国語の日常の言語使用では、動作主が主題または主語として文頭にくる場合が圧倒的に多いと考えられる(ただし省略文を除く)。このような規準的語順以外の語順においても助詞の機能にしたがって動作主の判断ができるようになるのは12歳以降であり、極めて主題助詞 eun/neun と主格助詞 i/ga の獲得の時期は遅いといえる。Hakuta (1982) は、日本語の能動文・受動文の獲得において助詞(ガ、ヲ、ニ)と語順の間に相互作用があり、N1+ガを一貫して動作主とみなす時期がある(3歳頃と思われる)ことを指摘している。本章での韓国語幼児においても N1+ i/ga を一貫して動作主とみなしており、Hakuta (1982) の研究と言語の違いを超えた共通性が見られた。

つぎに、主題助詞と主格助詞を比較すると、同じ非規準的な語順(ϕT文とϕS文)であっても、どの年齢群においても主格助詞の動作主性の方が主題助詞の動作主性より(11.7 ~ 35.0%)高い。10歳までは動作主選択における語順(助詞の位置)の要因の影響の大きいことを先に述べたが、ϕT文とϕS文の比較においてはすでに4歳児においても主格助詞と主題助詞の動作主性を弁別している。すなわち、文頭でなくても主格助詞の方が主題助詞よりも動作主として選択されやすいという傾向は4歳~大人まで一貫して見られた。この意味では主題助詞と主格助詞の動作主性の違いに対する感受性 sensitivity は、すでに4歳で獲得されているといえよう。12歳~大学生群についていえば、Fig. 6–1 のSの正語順と逆語順の助詞の位置による差は小さい(8.3 ~ 15.0%と)のに対して、Tのそれの差は(31.6 ~ 35.0%と)大きい。これは高年齢の韓国語話者において、他動詞文の動作主の決定にSが絶対的な強さを持つのに対して、Tの場合には他の要因に対して相対的な強さしかないからであると考えられる。

6－4－3　意味方略と語順方略

名詞の意味の手掛りによる動作主選択をHayashibe (1975)に従い意味方略と名付け、語順に基づいて文頭の名詞を動作主とする方略を語順方略と、また、助詞の格関係に基づく動作主選択を助詞方略と呼ぶ。すでに述べたように、助詞方略の使用が多いのは12歳以降であるのに対して、助詞方略以外の方略が多用されるのは10歳までの低年齢群である。この10歳群以前では、Table 6–6にもみられたように、語順方略が多用される。助詞以外の方略を見ると、韓国語母語話者は全体的に意味方略を用いることは少なく、語順方略が用いられる。助詞の手掛りに基づいた文処理ができない場合、子どもはデタラメな判断をするというのではなく、語順方略に基づいた一貫した反応があるのではないかと考えられる。それは、Table 6–6に見られたように、意味方略の使用が全年齢群で低く、助詞方略が年齢が上がるにつれて増加するのに対して、語順方略は助詞方略と相補うようにして年齢とともに減少し、また、少なくとも10歳群までは意味方略に対して語順方略の割合が高いためである。さらに、Tの入っている文の方がSの入っている文よりも語順方略の使用が高いことも、Tの場合には助詞による動作主選択の手掛りが得られにくかったことの反映だと考えられる。

6－4－4　日・韓両言語における主題と主格の標識の比較

(1)**成人における主題と主格の標識**　第三章および第四章では、日本人成人母語話者において、第1に、1文中に主格助詞ガのみが用いられた文と主題助詞ハのみが用いられた文での各々の動作主性は、ハとガが両方ある文でのガの動作主性よりも高い、第2に、1文中にハまたはガが単独であらわれる文の場合でも、また両助詞が出現している文の場合でも、ガの動作主性はハのそれよりも高い、しかし第3に、1文中にハのみしか用いられない文ではハの動作主性が高いという3点を明らかにした。この傾向は、韓国人成人母語話者における主題助詞eun/neun、主格助詞i/gaの使い分けと一致している。日・韓両

言語において、日本語のガ・韓国語のi/gaは主格の格助詞であるのに対して、ハ・eun/neunは格関係を示す働きを持たない主題提示の助詞であるという文法上の共通性を持つのみならず、主題と主格の標識の使い分けといった言語運用の上でも、日・韓の成人母語話者は同様の使い分けの傾向を持っているということができる。このことは、両言語の文法上・言語運用上の共通性を強く示唆している。日本語の国文法教育でも、ハとガを主語というあいまいな概念でひとまとめに教えるのではなく、主題のハ、主格のガという区別された用語を用いて整理して教えるべきであろう。

(2) 主題助詞と主格助詞の動作主性の発達　日本語母語話者に対して本章と同一の内容で実験を行っている第四章の結果によれば、いわゆる正語順(N1が正答)の文型(ガφ文、ハφ文、ガハ文)では4歳で大人の動作主性の水準(あるいはそれ以上)に達しているのに対して、逆語順(N2が正答)の文型(φガ文、φハ文、ハガ文)で大人と同じ水準になるのは10～12歳頃であった。本章において、韓国語母語話者は正語順の文型では4歳児で大人の水準に達しているのに対して、逆語順の文型では12歳頃であった。したがって、日・韓両言語において語順(助詞の位置)の影響を受けずに助詞による動作主の選択ができるようになる時期はほぼ同時期であり、両言語とも主題助詞と主格助詞の獲得は極めて遅いということができよう。ここにも、両言語で共通性が見られる。

日・韓両言語において主題と主格の獲得が遅れる第1の要因として、両言語とも、主題と主格の標識が様々な機能を併せ持っていることが考えられる。すなわち、主題の助詞は題目を提示するだけでなく、対照(久野, 1973)、旧情報提示・旧情報化(第二章参照)などの機能を併せ持ち、主格の助詞は述部に対して主格という格関係を明示するだけでなく、総記(排他)(Kuno, 1973)などの機能を併せ持っている。したがって、主題・主格の標識の表層形式と機能が1対1対応していないために獲得が遅れると考えられる。獲得の遅れる第2の要因として、日・韓両言語とも主題と主格の標識が省略可能であるということがあげられよう。すなわち、助詞は必ず用いなくてはいけないという標識obligatory

markerではないために、動作主決定などの際、文法的手掛りとして相対的な強さに欠け、意味や語順等の他の手掛りが最初利用され(Hayashibe, 1975；岩立, 1980)、獲得の時期が遅れるのだと考えられる。

(3)**助詞方略、意味方略、語順方略**　成人では、韓国人においては格標識に基づく助詞方略が最も強く、次に強いのが語順方略であり、名詞が生物か無生物かといった名詞の意味による意味方略は最も弱かった。第四章によれば、日本語においては成人の場合、格標識による助詞方略が最も強く、意味方略がこれに続き、語順方略が最も弱かった。日・韓両言語において、助詞方略が格関係の決定に最も強い役割を果たすのは、両言語の語順が比較的自由であり、格助詞が格関係の決定に主要な役割を占めているという文法的特質によるものであろう。この意味では両言語の話者の単文処理の様式は非常に似ているといえる。しかし、助詞という文法的手掛りを獲得していない年齢において、韓国語では、意味の要因よりも語順に頼るのに対して、日本語では語順よりも意味に頼る。このような差異がなぜ生まれたかの説明は、今後の課題である。

6－5　まとめ

本章の結果は、日・韓両言語は言語構造が似ているだけでなく、言語運用においても共通性があることを強く示唆するものである。韓国語成人母語話者においては、主題と主格の助詞の動作主の選択の様式が日本語成人母語話者と共通のパターンであった。発達的にみると、主題助詞と主格助詞を助詞の位置に左右されず動作主選択の手掛りとして正しく理解できる時期は12歳であり日本語の助詞ハとガの獲得の時期と似て遅く、両言語とも、主題助詞と主格助詞の真の意味での獲得が遅いということが示された。助詞の手掛りが得られないとき、日本語児では助詞の位置よりも意味を手掛りとして用いたのに対して、韓国語児では意味よりも助詞の位置の影響が大きかった。また、日・韓両言語の文法教育・第2言語教育において、主語の概念ではなく主題と

主格という概念を使うことの有効性が強く示唆された。

註

(1) コンピュータを利用して日本語を韓国語(朝鮮語)の基本語彙の一致率を検討した研究として安本美典氏の一連の著作があり、そこでは両言語の類縁性が強くないことが指摘されている。

第七章　被動作主をあらわす韓国語の助詞 eul/reul の獲得

【要約】第七章は、第五章で日本語でおこなわれた目的格助詞ヲの統語機能の発達に対し、韓国語の目的格助詞 eul/reul のそれを実験的に検討し、日本語の結果と比較した章である。韓国語においても、単文中で動作主・被動作主関係をあらわす時、目的格助詞 eul/reul は必ず直接目的語に付き他動詞の被動作主をマークするのに対して、主格助詞 i/ga は動作主を標示するだけでなく、可能文・受動文では逆に被動作主をあらわす。したがって、第五章から導き出される以下の4つの予測について実験的に検討した。(1) 目的格助詞の手掛りの強さは主格助詞よりも強い。したがって、目的格助詞文は主格助詞文よりも文処理されやすい。(2) 発達的にも、目的格助詞文の獲得は主格助詞文よりも早い。(3) 発達的に、日本語母語話者と韓国語母語話者において主格助詞・目的格助詞それぞれの獲得の時期はほぼ同時期である。(4) 名詞の意味が助詞と競合する文型では日本語話者の方が韓国語話者より名詞の意味要因の影響を受けやすいが、語順が助詞と競合する文型では韓国語話者の方が日本語話者より語順の要因の影響を受けやすい。韓国語での実験計画は第五章の日本語での実験計画を踏襲した。NNV 型の文型の結果を第六章の助詞 i/ga のデータと比較した結果、(1) ~ (4) の仮説がいずれも支持された。格関係についての助詞の手掛りの強さ (格標示力) は、日本語において目的格助詞ヲ > 主格助詞ガ > 主題助詞ハの順であったが、韓国語においても目的格助詞 eul/reul> 主格助詞 i/ga> 主題助詞 eun/neun の順であり、同一の順序であることも確認された。

7－1　問題

Slobin (1982) は、言語獲得において、個々の言語を超えて普遍的 (universal) に作用する要因と、その言語にのみ固有 (particular) な要因の二つに言語獲得の要因を分けている。意味と形式の対応の程度 (「手掛りの信頼性」cue reliability, MacWhinney *et al*., 1984)、および、強制標識であるかどうか (「手掛りの手に入れやすさ」cue availability, MacWhinney *et al*., 1984) が動作主・被動作主関係を標示する文法装置の獲得に対して普遍的に作用するとすれば、その言語に固有な要因 (例えば、動作主・被動作主関係を標示する文法装置のシステムがその言語において複雑であったり、発音が困難である場合など) を除けば、トルコ語や日本語以外の各言語においても、「手掛りの信頼性」と「手掛りの手に入れやすさ」の程度に応じて獲得の早さが予測されよう。この予測は、英語・ドイツ語・イタリア語 (MacWhinney *et al*., 1984)、ハンガリー語 (MacWhinney *et al*., 1985)、オランダ語 (McDonald, 1986) など様々な言語 (第八章参照) において裏付けられており、「手掛りの信頼性」と「手掛りの手に入れやすさ」は、動作主・被動作主関係を標示する文法システムの獲得において、交差言語間で普遍的に働く要因であると考えられている。

日本語の他動詞文において、動作主・被動作主関係を格助詞に基づいて標示する場合、格助詞ガとヲが用いられる。格助詞ガは、第五章ですでに述べたように、主格助詞として動作主や経験者等を標示するだけでなく、可能文・受動文では逆に被動作主・被経験者等をあらわす。一方、格助詞ヲは、受動文をはじめ、どのような文型でも動作主を標示する用法はなく、単文中で動作主・被動作主関係をあらわす場合には必ず被動作主を標示する。したがって、格助詞ガとヲの意味と形式の対応の程度 (「手掛りの信頼性」) についていえば、単文中では格助詞ヲは格助詞ガよりも格関係を明確にあらわす格助詞であるといえる。

第五章では、「手掛りの信頼性」が言語間だけでなく言語内においても文法

装置の獲得に普遍的に働く要因であると仮定し、日本語内の格助詞ガとヲでこれを検証している。すなわち、日本語において単文中で動作主・被動作主関係をあらわす時、必ず被動作主をマークする助詞ヲの方が、動作主・被動作主の両方をマークする助詞ガよりも意味と形式の対応の程度が明瞭であり格標示力が強いため、1) 発達的に、助詞ヲが助詞ガよりも早く獲得される、2) 単文で動作主・被動作主関係を特定する際、助詞ヲの方が助詞ガよりも文処理 sentence processing されやすい、という仮説を立て、この仮説を実証した。

意味と形式の対応の程度の明瞭性が、言語間だけでなく言語内においても形式の獲得において普遍的に作用するものなのか、それとも、日本語だけに作用する固有 (particular) な要因にすぎないのかは日本語のみを研究対象としているかぎり不明である。

韓国語には日本語の格助詞ガとヲに相当する格助詞がそれぞれある。日本語の格助詞ガに相当する韓国語の助詞は格助詞 i (イ) と ga (ガ) であり、日本語の格助詞ガと同じように、主格助詞として動作主や経験者等を標示するだけでなく、可能文・受動文では逆に被動作主をあらわし、意味と形式が 1 対 1 対応していない。一方、日本語の格助詞ヲに相当する韓国語助詞は格助詞 eul (ウル) と reul (ルル) である。格助詞 eul/reul は、空間・時間の移動補語 (道 eul/reul 通る ; 夏休み eul/reul 過ごす) や状況補語 (希望に満ちた時代 eul/reul 生きる)、位格として位置 (馬 eul/reul 乗る) 等に用いられることはあるが、単文中で動作主・被動作主関係をあらわす時は必ず直接目的語に付き、他動詞の被動作主をマークする[(1)]。

本研究の第 1 の目的は、第五章をうけて、以下に述べる 2 つの予測が、同形の文法構造を持つ韓国語でも実証されるかどうかを確かめることである。

①目的格助詞は主格助詞よりも、動作主・被動作主の関係を明示する場合、「手掛りの信頼性」が強い。したがって、目的格助詞文は主格助詞文よりも文処理されやすい。

②発達的にも、目的格助詞文の獲得は主格助詞文よりも早い。

もし、これら二つの予測が韓国語でも確かめられれば、意味と形式の対応の程度の明瞭性が言語間だけでなく言語内においても形式(本章においては格助詞)の獲得に作用するとする、我々が第五章でのべた主張は、日本語を超えて、より一般的なものとなる。

本研究の第2の目的は、日本語と韓国語では、単文中で動作主・被動作主関係をあらわす際の主格助詞と目的格助詞の形式と意味との対応の程度の明瞭性がほぼ同等であると考えられることから、以下の予測が正しいかどうか確認することである。

③発達的に、主格助詞・目的格助詞それぞれの獲得の時期は日本語母語話者と韓国語母語話者においてほぼ同時期である。

第3の目的は、文理解の方略における日・韓両言語の差異(言語特殊性 particular)を明らかにすることにある。従来の日・韓両言語の文理解方略の一連の研究(第四章、第五章、第六章)から、主題助詞・主格助詞において、日・韓両言語の差異として次の事柄が明らかにされている。

④名詞の意味が助詞と競合する文型では日本語話者の方が韓国語話者より名詞の意味要因の影響を受けやすい。これに対して、語順が助詞と競合する文型では韓国語話者の方が日本語話者より語順の要因の影響を受けやすい。

本実験では、これが再確認されるかどうかを、従来、研究されてきた主格助詞・主題助詞とは異なる目的格助詞で新たに調査する。

以上、①~④の各予測を実証するために、本研究では第五章で実施した実験を韓国語で追試することとした。第五章の実験の追試により、日・韓両言語間の直接の比較が可能となる。

なお本研究の韓国語主格助詞 i/ga の資料は、すでに第六章で報告したデータを利用している。

7－2　方法

第五章の実験計画を韓国語で以下のように踏襲した。

被験者　韓国語を母語とする韓国ソウルおよびソウル近郊の4、5、6、8、10、12、14歳、大学生の8群で、各群10名(男5名、女5名)、計80名。実験は1988年8月にソウル市内と水原(スウォン)市内で実施され、実験時の各群の平均年齢は、それぞれ4歳9ヶ月、5歳6ヶ月、6歳8ヶ月、8歳7ヶ月、10歳9ヶ月、12歳6ヶ月、14歳7ヶ月、20歳5ヶ月であった。

実験材料　刺激文を録音したカセットテープ、ミニチュアの動物と小物、テープレコーダー、A4の白紙、記録用紙。刺激文はTable 7–1に示すように2つの名詞(N)と動詞(V)からなる文で、目的格助詞の要因(3通り)×語順要因(3通り)×意味要因(3通り)により構成された27文型である。ここで目的格助詞の要因とは、第1名詞に目的格助詞を付け第2名詞には目的格助詞を付けない eul/reul ϕ (ϕ(ゼロ)は助詞の無いことを表している)、第1名詞に目的格助詞を付けず第2名詞に目的格助詞を付ける ϕ eul/reul、第1名詞・第2名詞ともに目的格助詞を付けない ϕ ϕ の3通り、語順要因とは名詞と動詞の位置によってNNV・VNN・NVNの3通り、名詞の意味の要因とは名詞が生物(A)か無生物(I)かで、両名詞が生物名詞(AA)、第1名詞が生物名詞で第2名詞が無生物名詞(AI)、第1名詞が無生物名詞で第2名詞が生物名詞(IA)の3通りである。この27の文型に対して、象(kokkiri)、ラクダ(nagta)、カンガルー(Kanggaru)、パンダ(panda)、馬(mal)、キリン(kirin)の生物名詞6種、箱(sangjya)、鉛筆(yeonpil)、スプーン(sutkarag)、ボール(gong)、クレヨン(cleyong)、ケシゴム(jiuge)の無生物名詞6種、「触った(manjyeotta)」「押した(mileotta)」「叩いた(tteryeotta)」「噛んだ(muleotta)」の動詞4種の中から無作意に生物名詞、無生物名詞、動詞を選びだし(ただしAA型の文では、Aは同一の生物名詞とならないようにする)、各文型に対して1文づつ、合計27の文を作成しテープに録音する。本研究で用いた方法を採用することにより、上述の各要因の主効果と交互作用を数量的に明ら

Table 7–1　Types and examples of Korean stimulus sentences

助詞	語順	文型番号	意味	文型	例文
		(1)	A A	Aϕ Aeul V	Kanggaru ϕ kokkiri reul muleotta
	N N V	(2)	A I	Aϕ Ieul V	Panda ϕ yeonpil eul tteryeotta
		(3)	I A	Iϕ Aeul V	Gong ϕ nagta reul muleotta
			A A	Aϕ V Ieul	Nagta ϕ manjyeotta mal eul
ϕ eul 文	N V N		A I	Aϕ V Ieul	Panda ϕ tteryeotta jiuge reul
			I A	Iϕ V Aeul	Sangjya ϕ mileotta kanggaru reul
			A A	V Aϕ Aeul	Manjyeotta sutkarag ϕ kirin reul
	V N N		A I	V Aϕ Ieul	Tteryeotta mal ϕ cleyong eul
			I A	V Iϕ Aeul	Kokkiri reul nagta ϕ muleotta
		(4)	A A	Aeul Aϕ V	Kokkiri reul nagta ϕ muleotta
	N N V	(5)	A I	Aeul Iϕ V	Kanggaru reul yeonpil ϕ tteryeotta
		(6)	I A	Ieul Aϕ V	Gong eul panda ϕ manjyeotta
			A A	Aeul V Aϕ	Mal eul manjyeotta panda ϕ
eul ϕ 文	N V N		A I	Aeul V Iϕ	Panda reul tteryeotta jiuge ϕ
			I A	Ieul V Aϕ	Sangjya reul mileotta kirin ϕ
			A A	V Aeul Aϕ	Muleotta kokkiri reul nagta ϕ
	V N N		A I	V Aeul Iϕ	Mileotta kokkiri reul sutkarag ϕ
			I A	V Ieul Aϕ	Manjyeotta cleyong eul kokkiri ϕ
			A A	Aϕ Aϕ V	Nagta ϕ kokkiri ϕ mileotta
	N N V		A I	Aϕ Iϕ V	Kirin ϕ gong ϕ muleotta
			I A	Iϕ Aϕ V	Sutkarag ϕ panda ϕ tteryeotta
			A A	Aϕ V Aϕ	Mal ϕ manjyeotta kanggaru ϕ
ϕ ϕ 文	N V N		A I	Aϕ V Iϕ	Kirin ϕ tteryeotta sangjya ϕ
			I A	Iϕ V Aϕ	Cleyong ϕ manjyeotta panda ϕ
			A A	V Aϕ Aϕ	Mileotta kanggaru ϕ nagta ϕ
	V N N		A I	V Aϕ Iϕ	Muleotta kokkiri ϕ sangjya ϕ
			I A	V Iϕ Aϕ	Mileotta jiuge ϕ kirin ϕ

かにすることが可能になる。

録音のスピードは各文を3秒で読み、読み終えて約7秒の間をとって次の文を読みはじめた。27文の録音の順番はランダムである。1本のテープは以上のように27の文型で各文型1文づつの27文とし、このようなテープを4本作成した。これとは別に、第1名詞が生物名詞、第2名詞が無生物名詞のA ϕ I eul/reul V 型の3文を録音したテープを作成し、練習文として用いた。

今回の韓国語の目的格助詞の獲得の報告は、韓国語の主題助詞と主格助詞の獲得の先行研究である第六章との直接比較を目的としているので、Table 7–1 に示す全文型のうち、文型番号 (1) ~ (6) の NNV 語順のみに限定して分析および考察の対象とした。韓国語の主格助詞の実験の例文については、第六章を参照していただきたい。

手続き　A4の白紙の上にランダムに置かれた12個のミニチュア、小物を命名し、練習文でアクト・アウト (ミニチュアや小物による実演) することができるかどうか確認した後、録音した4本のテープのうち2本をランダムに選び被験者に聞かせ、それぞれの文型をアクト・アウトさせた。具体的な続きについては第五章の方法に従った。なお、実験は本論文の著者の1人である韓国語母語話者および韓国語を母語とする大学生・大学院生が実験者となることにより、すべて韓国語で行われた。

7－3　結果

得られた結果を要約すると、① ~ ④の予測はすべて韓国語で確認された。以下にその詳細を報告する。

12 文型の各年齢群ごとの平均と全体平均：連携文と競合文

Table 7–2 は各文型ごとの第1名詞の選択数とその平均を示したものである。

本研究で「正答」とは、韓国語の目的格助詞 eul/reul の入った文型では eul/reul の付かない名詞を動作主として選択した場合であり、韓国語の主格助詞 i/ga の入った文型では、その助詞の付いた名詞を動作主とした場合とする。したがって、φ eul/reul 文・i/ga φ 文においては第1名詞を動作主として選択すると「正答」となるのに対して、eul/reul φ 文・φ i/ga 文では第1名詞を動作主とすると「誤答」となる。また、第1名詞が「正答」となる文 (φ eul/reul 文・i/ga φ 文) を正語順、第2名詞が「正答」となる文 (eul/reul φ 文・φ i/ga 文) を逆語順と呼ぶことにする。このため、第1名詞の選択数を示している Table 7– 2 では、正語順の (1) (2) (3) (7) (8) (9) の文型では第1名詞の選択数が正答数と一致する

Table 7–2　Number of first noun

助詞・語順 正答の位置	φ eul/reulV(正語順) <正答は第1名詞>				eul/reul φ V(逆語順) <正答は第2名詞>				eul/reul の文型の平均
意味水準	ＡＡ	ＡＩ	ＩＡ	平均(%)	ＡＡ	ＡＩ	ＩＡ	平均(%)	
文型番号	(1)	(2)	(3)		(4)	(5)	(6)		
語順要因 意味要因	連携 中立	連携 連携	連携 競合		競合 中立	競合 競合	競合 連携		
4 歳児群	20**	20**	16*	(93%)	13	14	10	(62%)	78%
5 歳児群	20**	20**	16*	(93%)	10	12	7	(48%)	71%
6 歳児群	20**	20**	16*	(93%)	7	7	2**	(27%)	60%
8 歳児群	20**	20**	19**	(98%)	0**	3**	1**	(7%)	53%
10歳児群	20**	20**	20**	(100%)	1**	2**	0**	(5%)	53%
12歳児群	20**	20**	18**	(97%)	1**	4*	3**	(13%)	55%
14歳児群	20**	20**	19**	(98%)	7	0**	3**	(17%)	58%
大 人 群	20**	20**	20**	(100%)	5*	1**	4**	(17%)	58%
平均	20.0	20.0	18.0	(97%)	5.5	5.4	3.8	(24%)	60%

下線をひいた3つのセルでは、「誤答」が有意に多かったことを示している。

のに対して、逆語順の (4) (5) (6) (10) (11) (12) の文型で正答数を求めるためには、「正答数 =20 − 第 1 名詞選択数」としなければならい (20 とは、各年齢群で被験者 10 名が同一の刺激文型を 2 文実施しているためである)。なお、φ eul/reulV と eul/reul φ V は今回の実験のデータによっており、主格助詞についての文型 (i/ga φ V • φ i/gaV) は第六章の実験結果によっている。

2 項分布による検定の結果を参考にしながら Table 7– 2 をみると、いくつかの特徴が明らかになる。

第 1 に、(1) (2) (3) (7) (8) (9) の文型では、全年齢で一貫して「正答」が有意に多い。(1) (2) (3) (7) (8) (9) の各文型に共通する性質は、語順と助詞が連携するということ、すなわち、第 1 名詞が「正答」となる正語順の文 (φ eul/reul 文 • i/ga φ 文) であるということである。これら正語順の文においては、4 歳児群以降のいずれの年齢においても第 1 名詞を有意に「正答」としていた。Table 7– 3 は、目的格助詞 eul/reul と主格助詞 i/ga の正答率を各年齢群について正語順、逆語順ごとにまとめたものである。この Table 7– 3 からも明らかなように、正

choice (Range: 0–20) (Korean data)

i/ga ϕ V(正語順) <正答は第1名詞>				ϕ i/ga V(逆語順) <正答は第2名詞>				i/ga の文型の平均
AA (7)	AI (8)	IA (9)	平均(%)	AA (10)	AI (11)	IA (12)	平均(%)	
連携 中立	連携 連携	連携 競合		競合 中立	競合 競合	競合 連携		
20**	20**	20**	(100%)	15*	11	8	(57%)	78%
16*	18**	17**	(85%)	13	15*	13	(68%)	77%
19**	20**	16*	(92%)	13	13	6	(53%)	73%
20**	20**	20**	(100%)	15*	11	10	(60%)	80%
20**	20**	20**	(100%)	10	10	5*	(42%)	71%
20**	20**	20**	(100%)	4*	1**	0**	(8%)	54%
20**	20**	18**	(97%)	6	3**	0**	(15%)	56%
20**	20**	19**	(98%)	6	3**	1**	(17%)	58%
19.4	19.8	18.8	(96%)	10.3	8.4	5.4	(40%)	68%

**p<.01 (0~3, 17~20)　検定は岩原(1957)の二項分布表を利用。
*p<.05 (0~5, 15~20)　文型番号はp.92とp.114の表に対応している。

Table 7–3 Correct answer according to the particle (Particle strategy use) (%) (Korean data)

	正語順 ϕ eul/reul V	逆語順 eul/reul ϕ V	正語順 i/ga ϕ V	逆語順 ϕ i/ga V
4歳児群	93	38	100	43
5歳児群	93	52	85	32
6歳児群	93	73	92	57
8歳児群	98	93	100	40
10歳児群	100	95	100	58
12歳児群	97	87	100	92
14歳児群	98	83	97	85
大人群	100	83	98	83
MEAN	97	76	96	60

語順の文型においては、正答率の全年齢の平均が目的格助詞で97%、主格助詞で96%と両助詞において高い。また、年齢においても4歳児群ですでに正答率がそれぞれの助詞で9割を超えている。

これに対して、第2名詞が「正答」となる逆語順の6文型(文型番号(4)(5)(6)

(10) (11) (12)) では、正答数に年齢間で有意差に違いがみられた。これらを、(5) と (11)、(4) と (10)、(6) と (12) の 3 組のペアで比較してみよう。

(5) Aeul/reul I ϕ V 文と (11) A ϕ I i/gaV 文は、語順 (文頭の名詞) の手がかりと意味の両手掛りが助詞と競合する文型である。すなわち、助詞に依存して格関係を決定した場合、第 2 名詞が「正答」として動作主選択されるが、語順 (文頭の名詞) の手掛りに依存しても意味の手掛りを用いても第 1 名詞が動作主として選択されてしまうという手掛りとして対立関係をもった文型である。これら 2 文型を比較すると、目的格助詞が第 1 名詞にある文型 (5) では、4・5 歳児群で誤答数の方がむしろ多く、正答数が有意に多くなったのは 8 歳児群からであり、それ以降の各年齢群では有意に正答数が多かった。これに対して、主格助詞が第 2 名詞にある文型 (11) では、5 歳児群で「誤答」の方が有意に多くなるなど 4 ~ 8 歳児群では誤答数の方が多く、正答数が有意に多くなったのは 12 歳群以降の各年齢群からであった。また、文型番号 (5) の全体の正答率は 73% であったが文型番号 (11) のそれは 58% であり、目的格助詞の正答率が主格助詞のそれを上回っていた。

文型番号 (4) A eul/reul A ϕ V 文と (10) A ϕ A i/ga V 文は、意味の手掛りは中立だが語順 (文頭の名詞) と助詞の手掛りが競合している文である。目的格助詞が第 1 名詞にある文型 (4) では 4 歳児群で誤答数すなわち第 1 名詞選択の方がむしろ多く、正答数が有意に多くなるのは 8 歳児群からであり、10 歳群、12 歳群、大人群で有意に正答数が多かった。これに対して、主格助詞が第 2 名詞にある文型 (10) では 4・8 歳児で誤答数が有意に多くなるなど 8 歳児群までは「誤答」の方が多く、正答数が有意に多くなったのは 10 歳児群のみであった。全体の正答率の平均は文型 (4) が 72.5%、文型 (10) が 48.5% で、文型 (4) と (10) を比較しても目的格助詞 eul/reul の方が主格助詞 i/ga よりも正答率が高かった。しかし、14 歳群と大学生群は正答数が 12 歳群よりも少なかった。この理由は、後に考察する。

文型番号 (6) I eul/reul A ϕ V 文と (12) I ϕ A i/ga V 文は、助詞の手掛りに対

して語順 (文頭の名詞) の要因は競合し第 2 名詞が「正答」となるが、意味要因は連携している文型である。目的格助詞の文型 (6) では、5 歳児群までは正答数が有意ではなかったが、6 歳児群以降の 6 群ではすべて有意に正答数が多くなり、全体の平均正答率は 81% であった。一方、主格助詞の文型 (12) では、8 歳群まで正答数に有意差が認められず、正答数が有意に多くなるのは 10 歳児群以降の 4 群で、全体の平均正答率は 73% であった。文型 (6) と (12) を比較しても目的格助詞 eul/reul の方が主格助詞 i/ga よりも正答率が高かったといえよう。

以上の結果から、正語順の文型においては、目的格助詞の文型 ((1) (2) (3)) であろうと、主格助詞の文型 ((7) (8) (9)) であろうと、各文型の平均正答率が 90% を超え、文型間の正答率にほとんど差はなく、4 歳児群においてすでに有意に正答に達していたことが明らかである。正語順の文型は格助詞以外の手掛りと格助詞とが連携した文型であり、これらの文型では格助詞に基づいて有意に正答数が多くなったのか、それとも格助詞以外の手掛りに依存した結果、正答率が高くなったのかは不明である。被験者が格助詞に依存していたのかどうかを明らかにしてくれるのは、格助詞が他の手掛りと競合する逆語順の文型の場合である。被験者が格助詞とは競合する他の手掛りに依存していたとすれば正答率は低下するのに対して、格助詞に依存していたとすれば正答率は高くなる。逆語順の文型では、正答数に年齢間で違いがみられた。これらの文型を (5) と (11)、(4) と (10)、(6) と (12) の各組で比較してみると、いずれの組においても、目的格助詞 eul/reul の方が主格助詞 i/ga よりも正答率が高く、年齢的にもより早い時期に有意に多い正答数に達したといえる。Table 7–3 で逆語順の文型を比較してみると、正答率の全年齢の平均が目的格助詞で 76%、主格助詞で 60% と目的格助詞の方が高い。この結果は、本研究目的の予測①が韓国語においても支持されることを示すものである。

Table 7–2 に戻り、正答が 12 の文型のいずれにおいても初めて有意に多くなった年齢群をみると、目的格助詞 eul/reul では 8 歳群、主格助詞 i/ga では 12 歳

群であった。このことから、韓国語母語話者の目的格助詞の獲得時期は8歳、主格助詞の獲得時期は12歳とするのが本実験からみて妥当であろう。この結果は本研究目的の予測②を支持するものである。第五章では、日本語母語話者において目的格助詞ヲの獲得が8歳群(小学校3年生)頃、主格助詞ガの獲得が12歳群(中学校1年生)以降であったと報告しており、このことは予測③をも支持する。

Table 7–2の文型番号(3)と(9)の両文型は、助詞の手掛りに対して語順の要因は連携するが意味の要因は競合するといった語順と意味が対立関係にある文型である。これら(3)(9)の文型では、4歳児群から一貫して第1名詞選択が有意に多かった。このことは、韓国語母語話者が、意味の手掛りが競合する場合でも、意味の要因にはほとんど影響されないことを示している。第五章の報告と本論文の(3)(9)の文型のデータを比較すると、日本語の格助詞ヲやガでは同型の文において意味要因の影響を特に幼児期の子どもが強く受け、正答率が韓国語話者に比べて低くなっている。また、文型番号(6)と(12)の文型は、助詞の要因に対して語順(文頭の名詞)の要因は競合するが、意味要因が連携し、語順(文頭の名詞)と意味が対立関係となっている文型である。これらの文型では韓国語話者では語順(文頭の名詞)の影響を受け、幼児期において正答数が有意とはならなかった。これに対して、第五章で示したように、日本語話者では格助詞ヲやガにおいて、同型の文で4歳児群から一貫して正答が有意に多い。これらの結果は、本研究目的の予測④を支持するものである。

本実験課題においては、動作主の第1名詞選択に対して、助詞の位置・助詞の種類・意味の各要因とそれら要因間の関係が複雑に影響を与えあっている。これらの関係を明らかにするため、以下のような分散分析を行った。

分散分析の概要

A(年齢:8水準)×B(格助詞の種類:目的格助詞 eul/reul と主格助詞 i/ga の2水準)×C(助詞の位置:正語順と逆語順の2水準)×D(名詞の意味:AA・AI・IAの3水準)の4要因の分散分析を行った。その結果を Table 7–4に示す。

Table 7–4 Summary of ANOVA
(from first noun choice data)

Source	SS	df	MS	F	POWER (%)
AGE (A)	23.17	7	3.31	9.04***	4.46
CASE (B)	5.70	1	5.70	15.59***	1.10
AB	9.75	7	1.39	3.80***	1.87
S/AB	52.70	144	0.37		
POSITION (C)	397.84	1	397.84	837.96***	76.53
AC	39.65	7	5.66	11.93***	7.63
BC	6.02	1	6.02	12.67***	1.16
ABC	11.47	7	1.64	3.45**	2.21
CS/AB	68.37	144	0.48		
ANIMACY (D)	9.76	2	4.88	20.91***	1.88
AD	5.58	14	0.40	1.71	0.00
BD	0.34	2	0.17	0.73	0.07
ABD	3.46	14	0.25	1.06	0.67
DS/AB	67.20	288	0.23		
CD	1.62	2	0.81	5.48**	0.31
ACD	2.05	14	0.15	0.99	0.39
BCD	2.03	2	1.01	6.86**	0.39
ABCD	1.44	14	0.10	0.70	0.28
CDS/AB	42.53	288	0.15		
TOTAL	750.65	959			

***p<.001　**p<.01　*p<.05

Cの要因は正語順と逆語順で第1名詞選択率が変動するかどうかの要因であり、助詞に基づく動作主選択(=助詞方略)をすると、この主効果は大きくなる。Dの要因は有生性 Animacy に基づく動作主選択(意味方略)の要因であり、一貫して有生名詞を動作主として選択すればDの主効果が大きくなる。

主効果では、A(年齢)、B(格助詞の種類)、C(助詞の位置)、D(名詞の意味)の4つが有意であり、1次の交互作用では、A×B(年齢×格助詞の種類)、A×C(年齢×助詞の位置)、B×C(格助詞の種類×助詞の位置)、C×D(助詞の位置×名詞の意味)の4つが有意であり、2次の交互作用では、A×B×C(年齢×格助詞の種類×助詞の位置)とB×C×D(格助詞の種類×助詞の位

置×名詞の意味）が有意であった。

年齢（A）

年齢の主効果が有意であったのは、目的格助詞と主格助詞の実験において、年齢が上がるにしたがって正答率が高まったことの反映である。逆語順の第1名詞選択率は年齢が増加すると低下しており、全般的に第1名詞選択率が低くなる。

格助詞の種類（B）

格助詞の種類の主効果が有意であったのは、Table 7–2 に示したように、目的格助詞 eul/reul の文型（φ eul/reul 文と eul/reul φ 文）の第1名詞選択率の全体的平均 (60%) と主格助詞 i/ga の文型 (i/ga φ 文と φ i/ga 文）の第1名詞選択率の全体的平均 (68%) との間に有意な差があることを示している。

年齢×格助詞の種類（A×B）

Table 7–2 にみられるように、目的格助詞 eul/reul の文型の第1名詞選択率の各年齢群ごとの平均が年齢の増加とともに減少傾向を示し、8歳児群以降の各群では 50% 台に低下しているのに対して、主格助詞 i/ga の2文型の第1名詞選択率の各年齢群ごとの平均は 10 歳児群まで 70% 以上であり、50% 台に低下するのは 12 歳児群以降である。年齢×格助詞の種類の交互作用が有意であったのは、これらの反映である。

助詞の位置（C）

この主効果は助詞を手掛りとする度合（助詞方略）をあらわしている。C の2水準の値の差が大きければ大きいほど正答率が高い。この要因の値が他の要因に比べて圧倒的に大きかったこと (Table 7–4 ; 検出力 power = 76.53) は、全体的に助詞によって文理解をしている反応が多かったことを示している。

年齢×助詞の位置（A×C）

A × C の交互作用が有意であったのは、助詞に基づく正答率が年齢によって有意に差があるということを表わしている。このことは、Table 7–2 で正語順と逆語順の差を各年齢間で比較してみると明らかである。逆語順の文型では

低年齢で第 1 名詞選択が比較的多く、助詞の手掛りを用いることが少なかったことによる。

格助詞の種類×助詞の位置（B×C）

Table 7– 3 に示した主格助詞の正語順の文型の平均正答率 (i/ga φ 文 : 96%) と逆語順の文型の平均正答率 (φ i/ga 文 : 60%) との差が、目的格助詞の正語順の文型 (φ eul/reul 文 : 97%) と逆語順の文型のそれ (eul/reul φ 文 : 76%) との差よりも大きく、目的格助詞は主格助詞よりも有意に正答率が高かったといえる。このことは、本研究目的の予測①をあらためて支持するものである。

年齢×格助詞の種類×助詞の位置（A×B×C）

目的格助詞は主格助詞よりも有意に正答率が高かった (B × C) が、A × B × C の交互作用が有意であったということは、年齢により両助詞の正答率に有意差がある時期とない時期とがあることを示している。

このA × B × Cの交互作用を詳しくみるために、目的格助詞 eul/reul の実験の 8 群と主格助詞 i/ga の実験の 8 群について、各群ごとに分散分析を行った。助詞の位置の要因 (C)、名詞の意味の要因 (D)、C × D に対して、それぞれの平方和の大きさの比率を表わす検出力 power を比較したのが Table 7– 5 である。検出力の値の比較により、各被験者内でのそれぞれの要因に対する主効果や交互作用の全体に対して寄与する割合を知ることができる。

Table 7– 5 より、意味の要因をほとんど用いず、ほぼ助詞のみに依存して動作主・被動作主関係を判断するようになるのは、目的格助詞で 8 歳群から (8 歳群での目的格助詞の位置の要因の占める割合は約 99%、名詞の意味の要因の占める割合は約 1%) であるのに対して、主格助詞では 12 歳群から (12 歳群での主格助詞の位置の要因の占める割合は約 98%、名詞の意味の要因の占める割合は約 1%) であり、A × B × Cの交互作用が有意となったのは、この差の反映であろう。この結果は目的格助詞が主格助詞よりも早期に安定した使用が開始されることを示すものであり、ここでも本研究目的の予測②は支持されよう。

なお、第五章の Table 5–4 で日本語の場合は A × B × D が有意であったのに、

Table 7–5 Cue strength of particle (C), animacy (D) and particle × animacy in "eul/reul" and "i/ga" : comparison of power from sub-analysis of variance in each group (16 groups)

Age (A)	Sentences with "eul/reul"(b1) Position(C)	Animacy(D)	C × D	Sentences with "i/ga"(b2) Position(C)	Animacy(D)	C × D
4 歳児群	75.68%	23.90%	0.42%	82.04%	8.98%	8.98%
5 歳児群	83.89%	15.42%	0.69%	78.12%	20.31%	1.57%
6 歳児群	90.70%	9.18%	0.12%	68.08%	28.57%	3.35%
8 歳児群	98.95%	0.59%	0.46%	87.27%	6.36%	6.37%
10歳児群	99.63%	0.18%	0.19%	92.45%	3.77%	3.78%
12歳児群	98.27%	0.71%	1.02%	98.31%	0.84%	0.85%
14歳児群	94.05%	3.06%	2.86%	95.09%	3.88%	1.03%
大 人 群	97.96%	1.02%	1.02%	96.78%	2.18%	1.04%

韓国語の場合は有意ではなかった。Table 5–5 と本章の Table 7–5 を比較すると、韓国語の場合には名詞の意味の要因の各年齢における値が小さく、年齢や助詞の要因による変動が小さかったためであろう。

名詞の意味（D）

名詞の意味が有意であったのは、韓国人の被験児・者が名詞の意味の要因（意味方略）を格助詞があっても用いていたことを示している。しかし、C × D および B × C × D の交互作用が有意であるので、さらに格助詞の種類の要因と助詞の位置の要因を検討することが必要である。

助詞の位置×名詞の意味（C × D）

C × D が有意であったのは名詞の意味とその名詞のついた助詞とが連携する

か(正答にあたる名詞が生物名詞)、それとも競合するか(正答にあたる名詞が無生物名詞)で動作主選択率が異なることを示している。正語順の文型において、名詞の意味と助詞が連携関係にある文型(Table 7–2の文型番号(2)と(8))の正答率の平均は99.5%であったの対して、同じ正語順の文型においても競合関係にある文型((3)と(9))の正答率の平均は92%と名詞の意味と助詞とが競合する文型での正答率はほとんど変わらず、その差は7.5%のみであった。逆語順の文型では、名詞の意味と助詞が連携関係にある文型((6)と(12))の正答率の平均は77%であったの対して、競合関係にあった文型((5)と(11))の正答率の平均は65.5%と、名詞の意味と助詞とが競合する文型の方が連携した文型の場合よりも正答率が11.5%低くかった。C×Dが有意であったのはこの差の反映であると考えられる。意味の要因が助詞の位置(語順)の要因と競合するときには助詞による動作主の選択をかなり妨害しているのは、日本語の場合と同じである。しかし、B×C×Dの二次の交互作用が有意であったので、その傾向は目的格助詞と主格助詞で異なる。

格助詞の種類×助詞の位置×名詞の意味（B×C×D）

連携文が競合文よりも正答率が高い(C×Dが有意)が、B×C×Dの交互作用が有意であったということは、連携文と競合文の正答率差は目的格助詞eul/reulと主格助詞i/gaで異なることを示している。正語順の文型において、名詞の意味と助詞が連携関係にある目的格助詞の文型(Table 7–2の文型番号(2))での正答率は100%であったのに対して、主格助詞の文型(文型番号(8))での正答率は99%、名詞の意味と助詞が競合関係にある目的格助詞の文型(3)での正答率は90%であったのに対して、主格助詞の文型(9)での正答率は94%であった。逆語順の文型においては、名詞の意味と助詞が連携関係にある文型で目的格助詞の文型(6)での正答率は81%であったのに対して、主格助詞の文型(12)での正答率は73%、名詞の意味と助詞が競合関係にある文型で目的格助詞の文型(5)での正答率は73%であったのに対して、主格助詞の文型(11)での正答率は58%であった。したがって、B×C×Dの交互作用が有意であったのは、正

語順では正答率が一律に高く、両助詞とも意味の要因はほとんど働かないのに対して、逆語順の場合、正答率は主格助詞の方が目的格助詞よりも低く、意味の要因の影響を比較的受けやすかったことによる。したがって、目的格助詞は主格助詞よりも「手掛りの信頼性」が強い(予測①)ことが、ここでも支持された。

以上の結果を要約すると、本研究目的の①～④の予測はすべて韓国語で確認されたといえる。

7－4　考察

本研究の結果は、目的格助詞 eul/reul の方が主格助詞 i/ga よりも、単文において動作主・被動作主関係を標示する手掛りの強さが強いことを示すものである。動作主と被動作主の両方に膠着することのできる主格助詞 i/ga よりも、ほぼいつも被動作主にしか膠着しない目的格助詞 eul/reul の方が「手掛りの信頼性」が高いことにより、文処理 (sentence processing) しやすくなると同時に、発達的にも早期に獲得されたといえる。形式と意味の対応の明瞭性の程度が文処理および獲得の早さに影響を及ぼし、それは言語間だけにとどまらず言語内においても作用するとする第五章の主張は、日本語のみならず韓国語においても認められる一般的な操作原理といえよう。

第六章では、韓国語の主格助詞 i/ga と主題助詞 eun/neun (日本語の主題助詞ハに対応)に対する単文中での動作主・被動作主関係を標示する手掛りの強さを調べ、主格助詞 i/ga の手掛りが主題助詞 eun/neun のそれよりも強いことを明らかにしている。この結果をふまえると、格関係についての助詞の手掛りの強さ(格標示力)は、目的格助詞 eul/reul> 主格助詞 i/ga> 主題助詞 eun/neun の順となる。この順番は日本語おける目的格助詞ヲ > 主格助詞ガ > 主題助詞ハの順番と同様である(第五章参照)。

本研究の正語順においては4歳児の「正答」数が有意となり、正しく助詞の機能に基づいて文処理を行っているかのように行動していた。これに対して、

逆語順の文型においては語順の影響を強く受け、格助詞の機能に基づいて文法的に正しく文処理できるようになるのは、目的格助詞 eul/reul で 8 歳 (小学校 3年生) 頃、主格助詞 i/ga では 12 歳 (中学校 1 年生) 以降であった。日本語においても、目的格助詞ヲが小学校 3 年生頃、主格助詞ガが中学校 1 年生以降であると第五章で明らかにされており、習得の年齢という点でも日・韓両言語における共通性が指摘される。

しかし、日本語においては意味の要因の影響を強く受けることが目的格助詞ヲの場合において第五章で確認されている。日・韓両言語の主格助詞と主題助詞において、名詞の意味が助詞と競合する文型では日本語話者の方が韓国語話者より名詞の意味要因の影響を受けやすいのに対して、語順が助詞と競合する文型では韓国語話者の方が日本語話者より語順の要因の影響を受けやすいことが明らかにされており (第四章と第六章参照)、本実験は目的格助詞についてもこのことが再確認されたといえる。この差異がなぜ生じるかについては、日本語母語話者、韓国語母語話者それぞれの文化的背景を踏まえた言語運用の違いを検討することが必要であろう。今後の課題である。

文理解の方略の先行研究 (MacWhinney *et al*., 1984, 1985. McDonald, 1986) においては、「競合文は連携文よりも処理が困難である」ことが普遍的であると考えられている。日本語ではこのことは顕著に認められるのに対して (第四章、第五章参照)、本研究の結果は必ずしもこのことが韓国語であてはまらない。例えば、Table 7–2 の文型 (10) と (11) を比較すると、助詞に対して語順と意味の要因が競合する文型 (11) の方が、助詞と語順が競合し意味が中立である文型 (10) よりも処理が困難と予想されるのに対して、「正答」数の平均は逆の結果を示している。韓国語母語話者は意味の要因にあまり影響されない傾向があり、このことが韓国語の文処理における問題を複雑にしているといえよう。

中国語 (Miao *et al*., 1984) や日本語 (第四章参照) の同種の研究においては、刺激文型により「児童期 ~ 青年期にかけてのある時期に文法に厳格・感受性の強い時期があるのに対して、大人になると逆に文法に対して厳格ではなくなるこ

とがある」(U 型カーブ。Strauss (1982)) ことが見いだされている。韓国語では、Table 7–2 の文型 (4) と (10) において 14 歳群と大人群は 12 歳群よりも正答数が少なかったが、中国語や日本語ほどはっきりとはあらわれなかった。意味の要因に影響をあまり受けない英語などの言語においても U 型カーブは報告されておらず、意味の要因が U 型カーブの出現に重要な役割をはたしているのかもしれない。さらに他の言語で交差言語的比較を進めていく必要があろう。

註

(1)　韓国語の目的格助詞 eul/reul は異形態であり、名詞句が母音で終るか、子音で終るかで使い分けられる。すなわち、名詞句が母音で終れば reul を、子音で終れば eul を後置させる。

第八章　文理解の方略の言語間の比較からみた日本語の特徴

【要約】第八章では、第三章から第七章までの実験をふまえ、日本語の助詞の特徴を、成人と幼児・児童に対する諸言語の文理解の方略の実験的研究と比較することによって明らかにすることを試みた。このような交差言語的方法により、日本語における文処理に果たす助詞の役割の強さと、語順の果たす役割についての弱さについて、これを英語・韓国語・イタリア語・ドイツ語・オランダ語を中心とする言語と比較して論じた。日本人にとって助詞は強い手掛りであるのだが、この文法的手掛りがない場合には次に重要であるのは意味の手掛り(有生性)である。日本人は有生のものを動作主と解釈しやすく、無生物を動作主と処理することに強い抵抗を示す。日本語の存在を表す表現(イル－イナイとアル－ナイ)は主名詞句が有生か無生かで使い分けられているが、韓国語の場合にはこの現象は見られないことと関連がありそうである。

8－1　言語普遍性と語順の問題

世界の言語を比較するためには様々な方法がある。ここでは諸言語を語順によっていくつかのタイプ(類型)に分類した研究を紹介する。この様な研究を最初に本格的に行ったのはGreenberg (1963)である。彼は、文の主要な構成素として主語(S)と目的語(O)と動詞(V)の3つ[(1)]が各言語で基本的にどの様な語順に配列されているかを調べた。順列の可能性からSOV・SVO・VSO・VOS・OVS・OSVの6つの語順が考えられる。Greenberg (1963)とそれ以降の諸研究の結果をまとめてあるのがTable 8–1である。

Table 8–1　世界の言語における基本語順の分布

文献	調査言語数	SOV	SVO	VSO	VOS	OVS	OSV
Greenberg (1963)	30	37.0%	43.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%
Ultan (1969)	75	44.0%	34.6%	18.6%	2.6%	0.0%	0.0%
Steele (1978)	63	47.6%	31.7%	15.6%	4.7%	0.0%	0.0%
Ruhlen (1975)	427	51.5%	35.6%	10.5%	2.1%	0.0%	0.2%
Malinson & Blake (1981)	100	35.0%	35.0%	9.0%	2.0%	1.0%	1.0%*
Tolmin (1979)	?	45.8%	41.5%	11.0%	1.5%	0.3%	0.0%
Tolmin (1986)	402	44.8%	41.8%	9.2%	3.0%	1.2%	0.0%

* Unclassified=11.0%

表にあるように、SOV と SVO の語順が圧倒的に多く、VSO がその次に多く、O が S の前に来る VOS・OVS・OSV を基本語順とする言語はごくわずかな数しかなかった。Greenberg (1963) は「名詞の主語と目的語を持つ平叙文において支配的な語順は、ほとんどいつも主語 «S» が目的語 «O» に先行すること」を類型論による言語普遍性の一つとしている。このことはそれ以降の諸研究でも裏付けられているといえる。

ところで Table 8–1 をみると Greenberg (1963) 以降の研究では、いずれの研究においても SOV 語順のほうが SVO 語順よりも言語数がやや多い。SOV 言語である日本語は語順による類型論という観点でみる限り特異ではなくありふれた言語なのである。動詞が文末にくるという日本語の構造的特徴を日本人の日本語による表現のあいまいさと結びつける主張は、柴谷 (1981) の指摘するように、語順による類型論の観点からは否定されざるを得ない。この主張が正しいとすると、世界の約 4 割もの言語による表現があいまい性を持つということになってしまう。

さて、実際の言語行動においても、S が O に先行するという言語構造の普遍性に対応するような特性が使用言語の違いを越えて普遍的に見いだされるものであろうか。これを明らかにすることが本節のテーマである。この疑問に

対しては、格変化語尾や格助詞などの格標識 case marker を文中から外した無標文[2]に対する文理解の研究が一つの答を与えてくれよう。これらの研究は、具体的動作をあらわす動詞を用いて、文中の二つの名詞のどちらが動作主すなわち動作の主体となり、もう一方が被動作主すなわち動作の客体となると解釈するかを幼児期から調べたものである。無標文の理解では、名詞の意味の手掛りが中立的な文(例えば「犬φ猿φ追いかけた」のようにSとOとを入れ換えても文が成立する文:一般に可逆文と呼ばれる。以下無標文の中立的な名詞をNで示す)においては、ある時期(4~5歳頃)に第1名詞を第2名詞よりも動作主すなわち主格とみなす傾向が、フランス語(Sinclair & Bronkart, 1972 ; Sinclair, 1973)、英語(Tager-Flusberg, 1978〔Hakuta, 1979 による〕、Bates *et al.*, 1981)、イタリア語(Bates *et al.*, 1981; Slobin & Bever, 1982)、ヘブライ語(Frankel *et al.*, 1980)等の SVO 言語にあらわれ、いずれも NVN の語順を動作主－動作－被動作主と解釈する傾向が VNN の語順を動作－動作主－被動作主としたり、NNV の語順を動作主－被動作主－動作と解釈する傾向よりも顕著であった。屈折や冠詞による格標識が名詞の性によって中立的になるヘブライ語(Frankel *et al.*, 1980)やセルボ＝クロアチア語(Slobin & Bever, 1982)やドイツ語(Mills, 1979〔Slobin & Bever, 1982 による〕)においても中立的な名詞2個と動詞による NVN 型の文は動作主－動作－被動作主と解釈された。

日本語においても、無標(助詞無し)の可逆文に対して文頭の名詞を動作主として文理解する傾向があることがことが確認されている(Hayashibe, 1975 ; Hakuta, 1979 ; 第三章)。また、有標文(助詞有り文)や有標・無標を混合した能動文の理解において、助詞の理解に到る前に文頭の第1名詞を動作主とする時期があることが明らかにされた(Hayashibe, 1975 ; 岩立, 1980)。このように、助詞などの格標識がない場合に文理解の手掛りとして、第1名詞＝動作主とする現象は日本語児にもそれ以外にも存在する。

文の理解のために用いられる様々な手掛りの利用の仕方について、知覚の方略 perceptual strategy を提起した Bever (1970) は、英文理解の過程をいくつか

の比較的単純な定式化によって整理し、一方でそれを知覚過程の一般的原理と結びつけて考察すると同時に、他方で英語における統語的構造との関連について論じている。英語の構造の中でも彼は語順を特に重視している。いくつかの方略の中で、とりわけ単文理解の獲得過程において興味深いのは、彼が「順次的ラベリング方略」または「方略D」と呼ぶ、語順を手掛りにして単文中の格関係を決定する方略である。方略Dでは、表層構造における潜在的内的単位の中にあるどのような名詞－動詞－名詞(NVN)の語順でも『行為主＝行為＝対象』と解釈する。この方略の存在は、子どもがある年齢段階において受動文を理解する際に、最初の名詞(すなわち主語)を「行為主」と誤解し、動詞の後の名詞(すなわち行為主)を行為の対象であると解釈してしまう事実(Bever, 1970 ; Maratsos, 1974 ; Bridges, 1980)によって何度も確かめられている。この方略は第1名詞＝動作主 agent とみなす方略であり、以下「第1名詞方略」と呼ぶことにする。子どもは、受動変形によって表層上に現れた標識(be 動詞、-ed、by などの前置詞)に気づかず、また気づいたとしても、動詞の前の第一番目の名詞が動作の主体を示すのだということの方が判断の基準になったため、正しく文処理できなかったのである。受動文におけるこのような第1名詞方略は、英語児のみならずフランス語児によっても確かめられている。(Sinclare & Bronkart, 1972)。日本語においては、文頭の名詞に格助詞ガがついていると、受動文においても「行為者」と誤って判断する時期があることを、Sano (1976)や Hakuta (1982)が確かめている。

以上のように、語順の要因が、子どもの文理解において重要な手掛りとなるのであるが、英語のように統語論上語順が主な役割を占める言語と、日本語のように語順よりも助詞が文中の格関係を主に決定するような言語との間では、その重要性が異なってくる。そこで、各国の子どもの文理解の発達を、使用する方略の変化ということに焦点を合わせて展望してみよう。まず能動文、受動文の研究を紹介する。

8－2　能動文、受動文理解における方略の変化

この節では、能動文、受動文の処理における子どもの方略を研究が比較的蓄積されている日英両言語についてみておこう。受動文では、被動作主が主格あるいは主語の名詞句となる。その名詞句は文頭すなわち第1名詞となる場合が圧倒的に多い。従って、動作主を選択する場合、語順の手掛りによる第1名詞方略と文法的な手掛りに基く方略(統語方略)が対立・競合する文型であると言える。

8－2－〔1〕英語児

Bever (1970) は、SVOから成る能動文をSとOの関係について(1)のように3種類の文型を作って、まず能動文で、2歳から5歳までの男女児の文理解を調べた。

(1) a. The cow kisses the horse. (可逆文 reversible sentence)

b. The mother pats the dog. (適合文 probable sentence)

c. The dog pats the mother. (不適合文 improbable sentence =nonreversible sentence)

2歳児から3歳児にかけては不適合文の成績が低いが4～5歳児では正しく理解する割合が高くなっている。2～3歳児ではNVN=SVOと解釈する第1名詞方略よりも動作主になりやすい属性を持つ名詞を主語とみなす意味方略が優位であり、語順による文処理は4～5歳の時期で意味方略よりも強力になる。そこで可逆文の能動文と受動文について同じ実験を行なうと、2歳前半では能動・受動の成績は変わらないが、2歳後半～3歳児では受動文の正答率が大きく低下した。これは第1名詞を行為主として選択したためであろう。4歳後半から5歳になると能動態・受動態のどちらでも正答率は高くなる。NVN=SVOという、単純な第1名詞方略から抜け出して、態を標示する文の変換に気付き、大人と同じ方略を使用するのである。

Maratsos (1974) もまた、3 ~ 12 歳児に受動態の可逆文を演示させることにより、第 1 名詞方略の存在を確かめた。

Slobin (1966) は、6 ~ 12 歳の子どもと大人に、絵を見せて、それに対する真又は偽の描写を能動文、受動文、否定文と受動否定文とで与え、真偽を判断させ、反応潜時を比較した。その結果、子どもも大人も、可逆文の場合には受動文の理解は時間がかかったが、非可逆文 (適合文と不適合文) の場合にはこの違いがなくなった。したがって意味的な手掛りによる文理解の方略は、能動・受動の態の違いという統語的な方略が獲得された後にも、ひき続いて文処理の有効な手段として働いていることが示された。

以上の英語児の能動・受動文理解に関する諸研究は、方略の使用の変化という視点から、次のようにいうことができる。

まず、意味整合文では、正しい動作主の選択をするが、不整合文では意味的に動作主になりやすい目的語を動作主として選択して語順を無視してしまうという意味方略優位の時期がある (幼児期前期)。第 1 名詞方略も存在するけれど、語彙の意味の方が、語の位置よりも判断の主な手掛りとなるのである。次に、NVN=SVO と解釈して語順を手掛りとする第 1 名詞方略が意味方略をおさえて優位になる時期が訪れる (幼児期後期)。子どもは語彙の意味的手掛りがない可逆文においてのみならず、意味的手掛りがかえって第 1 名詞の選択を妨げる働きを持つ不整合文においても第 1 名詞を動作主として選ぶのである。しかし、受動文においては第 1 名詞は主語であるが、意味的には動作の目的格として解釈されるべきことを理解していないので正答率が激減する。次の段階の子どもは態の変形に気付くようになる。もしも動詞句が「規準型 canonical」すなわち能動態ならば第 1 名詞は動作主であるが、もしも動詞句が「規準型」でない場合 (例えば受動態の場合) には語順による判断ができなくなってしまう。受動文の正答率は前段階より回復してチャンス・レベルに近づくのである。第 1 名詞方略という誤った方針は廃棄されたが、受動変形の文法的理解が達成されていない段階である。最後に受動文を統語的に正しく理解する時期に到達

する。大人と同じような統語的判断が可能なことから、この時期は統語方略が優位な段階と位置づけられよう。

8－2－〔2〕日本語児の場合

英語の場合には、文中の格関係は、主に語順によって標示されるのに対して、日本語は助詞という後置詞を持ち、とりわけ格助詞が格の決定に重要な役割を果たす。日本語の能動文と受動文の理解を研究したものとしてSano (1977)、Hakuta (1982)、鈴木 (1977) の研究がある。Sanoは、3歳半から6歳半の子どもを対象に文理解の実験を行い、能動文においてSOVの語順「～が～を～した」の方がOSVの語順「～を～が～した」よりも正しく理解されやすいことを示した。鈴木の文理解に関する実験の結果は、受動文理解が能動文理解より遅れ、第1名詞方略(鈴木は『語順方略』と呼んでいる)の存在を明らかにしたものとなっている。Hakuta (1982) の結果もこれらの結果を支持している。Hakuta (1982) は可逆的な能動文の理解を2：3～6：2の日本語児に対して演示法で実験したところ、SOV能動文はOSV能動文よりも理解されやすく、また能動文理解が受動文理解よりも容易であるとの結果を得た。能動文理解は3歳以前に習得されるが、受動文の正しい理解は5歳以降である。興味深いのは、4歳頃の子どもが、SOV受動文(「～が～に～された」)を第1名詞＝動作主とした誤りが高率であったことである。このような結果はなぜ生じたのであろうか。それを明らかにするために、日本語児の文理解の方略の発達的変化を英語児のそれと比較してみよう。OSV能動文が年少の子どもにとってむずかしい課題であり、答えがチャンス・レベルにあった、すなわち正答と誤答の数がほぼ等しかったことは、Beverのいう第1名詞方略が英語に適用できても、日本語に単純には適用できないことを示している。なぜならば、仮に日本語児がBeverの第1名詞方略に従うならば、第1名詞に助詞ヲが付いていても第1名詞を動作主として選択するはずであるからである。しかし同時に、答えがチャンス・レベルであったということは、助詞のみならず語順の要因も初期の

日本語理解にとって重要であることを示している。日本語児にとって理解が容易なSOV能動文すなわち、「~が~を~する」という文は、日本語の規準的形式である。規準的文型が子どもに最もよく理解されやすいということは、日英両言語とも共通した特徴である。そしてアメリカの子どもに、受動文を規準的文型を同じ手掛りで文処理をする——第1名詞方略を適用する——段階があるのと同じように、日本の子どもには、

第1名詞＋ガ＝動作主

という方略によって文処理をする段階があるとHakuta (1982)は主張する。それは最初の名詞句が「名詞＋ガ」であり文の主格であるSOV受動文(「~が~に~された」)の正答率が著しく低かったグループがあったからである。

日英両語の文理解の発達過程の比較で確かめられたことは、規準型以外の文型を規準型を解釈する方法によって誤って解釈してしまう時期があるということである。この時期を経てから能動態と受動態の違いを正しく理解する時期が訪れるのである。

文処理方略の発達的研究は、上述した日英両言語以外にも様々な言語で研究が行なわれている。次節では、様々な言語で文理解のための複数の手掛りを対立・競合させた実験計画(competition model)を用いた、文処理の発達に関する諸研究を概観してみよう。

8－3　文理解の方略の発達に関する交差言語的研究

Bates *et al*., (1984)ではイタリア語と英語を母国語とする成人を対象として、NVN・VNN・NNVの3水準の語順の要因と有生animate－有生(AA)・有生－無生inanimate (AI)・無生－有生(IA)の3水準の名詞の意味の要因、第1名詞強勢(ストレス)・第2名詞強勢・両方強勢無の3水準の強勢の要因、旧情報－新情報、新情報－旧情報、新情報－新情報の3水準の提題の要因からなる単文刺激

の提示後、主語 “the subject” (または目的語) はどちらかを答えさせた。その結果、イタリア人は、主に名詞の意味を手掛りにして有生名詞を主語に選ぶが、しかしNVN語順では、その傾向が少し弱まり、第1名詞を主語とする傾向があった。一方、アメリカ人は、意味の要因を少ししか用いず、主語 (または目的語) 選択の基準となったのは語順の要因であった。彼らの反応は単純な第1名詞方略ではなく、以下のような統語的な語順の手掛りによるものであった。

NVN=SVO

e.g. The dog kisses the cat. (The dog が主語)

NNV=OSV

e.g. The dog the cat kisses. (The cat kisses the dog. と解釈)

VNN=VOS

e.g. Kisses the dog the cat. (The cat kisses the dog. と解釈)

NVNの場合は第1名詞 = 主語だが、NNVとVNNの場合は第2名詞が主語と判断されたのである。このような方略を「統語方略」と呼ぶことにする。この方略は、VNをVOとみなしNVをSVとみなすという、英語の統語論にかなった方略[(3)]であるからである。英語とイタリア語両言語間の結果の違いは、英語の動作主と被動作主を含む能動肯定平叙文ではSVO唯一の語順しか認められないが、イタリア語では3つの語順 (NVN • VNN • NNV) が可能であり、格の決定は強勢 (ストレス) などの非統語的手掛りによって決まる。すなわち英語においては語順の制約は強制的であるが、イタリア語は語順が自由である。また英語においては語順が唯一の統語的手掛りになっているのにひきかえ、イタリア語では語順が統語上果たす役割は小さい。

さて、語順と意味と強勢の3要因に絞って2.5歳 ~ 5.5歳の子どもを対象とした実験の結果を見てみよう (Bates *et al.*, 1984)。英語児の反応は意味の要因よりも語順の要因に影響を受けた。この傾向が著しいのはNVN=SVOとする場合

であり、VNNやNNVの場合には、チャンスレベルに近い反応が多く、大人のように第2名詞を動作主とする傾向はなかった。一方、イタリア語児は主に名詞の意味による意味方略を適用し、有生名詞を動作主とする傾向にあり、語順の3水準間の差は小さい。しかし、4.5歳～5.5歳の時期に、全語順にわたって第1名詞方略が出現した。

「語順方略」という用語を本論文で用いず、「第1名詞方略」を使ってきたのは、このBates *et al.*, (1984)の研究におけるアメリカ人の幼児とアメリカ人成人の文処理の方略の差を明示したかったためである。すなわち、大人の「語順方略」は英語の「統語方略」であるのに、英語児の「語順方略」は文頭の第1名詞を動作主と解釈する方略であり、イタリア語児にも共通に見られたのである。

さて、イタリア語児の第1名詞方略と英語児のそれとは、語順の要因によって出現の仕方が異なる。英語児がNVNの文型にのみ、この方略を適用しているのに対し、イタリア語児は三文型すべてに適用している。英語児は規準的語順と非規準的語順を弁別し、前者のみ第1名詞方略を適用しているのである。

以上、見てきた限りでは、第1名詞方略は、適用の仕方が語順によって選択的かどうかの違いがあるにせよ、諸言語を獲得する途上に必ず出現していた。しかし、第1名詞方略が出現しない言語がある。それはトルコ語である。Slobin & Bever (1982)およびSlobin (1982)によれば、トルコ語児の格関係の理解は他言語児よりも早期に達成され(2歳以前)、SO型(SOV・SVO・VSO)とOS型(OSV・OVS・VOS)との正答率にほとんど差がない。トルコ語では、直接目的語の標示が接尾辞によって行われる。目的格接尾辞は目的語に強制的・規則的に付加され、格標示が明確なため、SVO・OVS・SOV・OSV・VSO・VOSのいずれも文法的であるという、語順に全く統語的手掛りのない言語である。

トルコ語と英語は、格標示が単一で強制的で規則的であるという共通点を持つのに、前者の獲得が後者よりも早期に達成されるのは、接尾辞vs.語順という格標識のシステムの違いであろう。接尾辞は、それ自身単一で名詞(語幹)

の格を示す、「局所的手掛り」(local cue)であるのに対し、語順は、単語と単語の位置(実際の話しコトバにおいては、時間的順序)の関係から判断する関係的手掛りであり、聞き手により多くの処理の手続きを必要とさせるのであろう。

日本語の助詞も「局所的手掛り」であるのに、なぜトルコ語の文理解よりも獲得の時期が遅く、語順を非規準型にすると理解上の困難をひきおこすのであろうか。

Slobin & Bever (1982)は、その理由として、(1)目的格の格助詞は話しコトバでは省略可能 optional であり、(2)目的語が文頭に来る場合は、目的格助詞ヲが主題助詞ハに代替されることがある——すなわち、トルコ語のように規則的、強制的な局所的手掛りではないことを挙げている。Bates *et al*., (1984)のデータによると、英語児が大人よりも意味方略の使用頻度が多いのは、NNV型での4歳半児の場合のみであり、全体的に大人よりも使用率が低かった。英語児においては、文の主語－目的語にとって重要なのは名詞の意味ではなく語順なのだという、語順に対する感受性が早期から形成されているらしい。

さて、文理解の方略の発達に関する交差言語学的研究は、上述したイタリア語、英語、日本語、トルコ語以外にも様々な言語で実施されている。Table 8–2は、Bates & MacWhinney (1989)のまとめに、本書で明らかになった日本語と韓国語の結果(第三、四、五、六、七章)を加えて、大人と子どもがどのような手掛りに依存して文処理するのかを、各言語についてまとめたものである。この表では、各言語の母語話者の大人と子どもが文処理に際して、依存する手掛りの度合が大きいものから順に並べ、その年齢の及ぶ範囲を示している。大人と子どもとの間で、依存する手掛りに大きな違いが見いだされる言語があることが理解されよう。

Table 8–2　各言語における成人の文処理の手掛りの強さの順序

言語および年齢	文処理の手掛りの強さの順序
英語	
大人：	SVO>VOS, OSV>Animacy, Agreement>Stress, Topic
5～7歳：	SVO>Animacy>Agreement>NNV, VNN, Stress
5歳以下：	SVO>Animacy>Stress, OSV, VOS>Agreement
イタリア語	
大人：	SV Agreement>Clitic Agreement>Animacy>SOV>Stress, Topic (NNV, VNNはStress・Cliticsの手掛りを組合せることによってのみ解釈が可能)
7歳以下：	Animacy>SVO>SV Agreement>Clitic Agreement>SOV, VSO (NNV, VNNとStress, Cliticsとの交互作用なし)
フランス語	
大人：	SV Agreement>Clitic Agreement>Animacy>SOV>Stress
6歳以下：	SVO>Animacy>VSO, SOV (Agreementについてテストしていない)
スペイン語	
大人：	Accusative preposition>SV Agreement>Clitic Agreement>Word order (Animacyについてはテストしていない)
ドイツ語	
大人：	Case>Agreement>Animacy>SOV, VSO, SVO
オランダ語	
大人：	Case>SVO>Animacy
10歳以下	SVO>Case>Animacy
セルボ・クロアチア語	
大人：	Case>Agreement>Animacy>SVO, VSO, SOV
5歳以下	Animacy>Case>SVO, VSO, SOV>Agreement

言語および年齢	文処理の手掛りの強さの順序
ハンガリー語	
大人：	Case>SV>Agreement>SVO, SOV>Animacy>V–O Agreement
3歳以下：	Animacy>Case>SVO>Stress (Agreementについてはテストしていない)
トルコ語	
大人：	Case>Animacy>Word Order
2歳以下：	Case>Word Order (Animacyについてはテストしていない)
ヘブライ語	
大人：	Case>Agreement>Order
10歳以下：	Case>Order>Agreement
Warlpiri語	
大人：	Case>Animacy>Order
5歳以下：	Animacy>Case>Order
中国語	
大人：	Animacy>SVO
日本語	
（第三章・第四章・第五章）	
大人：	Case (目的格助詞)>Case (主格助詞)>Animacy>SOV
8歳以下	Animacy>Case (目的格助詞)>Case (主格助詞)>SOV
韓国語	
（第六章・第七章）	
大人：	Case (目的格助詞)>Case (主格助詞)>SOV>Animacy
8歳以下	SOV>Case (目的格助詞)>Case (主格助詞)>Animacy

(日本語・韓国語以外は、Bates & MacWhinney (1989) より作表)

8－4　成人における文理解の方略の交差言語学的比較

子どもではなく成人の場合には、文理解に用いる方略は、まずその言語の文法構造から導き出される格標示システム(日本語・韓国語の助詞、英語・中国語の語順、ドイツ語・オランダ語の名詞・代名詞の格変化、イタリア語の動詞語尾変化、等々)に基づくということが予測される。Table 8–2にまとめてあるように、この予測が妥当であることは、様々な言語で示されている。この節では特定の言語に絞って、さらに論議を深めることにしよう。

本書の第三章・第四章では、ハとガが動作主選択に果たす手掛りの強さを明らかにし、また、Kilborn & Ito (1989)では、日本人成人は意味方略を多用しアメリカ人成人は語順に依存する傾向が第1言語のみならず第2言語においても存在することを示した。Kilborn & Ito (1989)と本論文の第三章・第四章も日本人成人のこの傾向を支持している。第五章では助詞ヲが助詞ガよりも文理解の強い手掛りとなることを示した(4)。

第六章では、韓国語における主題助詞(日本語のハに相当する)と主格助詞(日本語のガと対応する)の入った単文の理解の方略を発達的に調べた。全体的にいえば韓国人においては格標識に基づく助詞方略が最も強く、次に強いのが語順方略であり、名詞が生物か無生物かといった名詞の意味による意味方略は最も弱かった。第四章・第五章に示したように、日本語においては格標識による助詞方略が最も強く、意味方略がこれに続き、語順方略が最も弱かった。日・韓両言語において、助詞方略が格関係の決定に最も強い役割を果たすのは、両言語の語順が比較的自由であり、格助詞が格関係の決定に主要な役割を占めているという文法の特徴によるものであろう。この意味では両言語の話者の単文処理の様式は非常に似ているといえる。しかし、助詞という文法的手掛りが得られない場合、韓国語では、意味の要因よりも語順に頼るのに対して、日本語では語順よりも意味に頼る。第七章では、韓国語においても目的格助詞の方が、主格助詞よりも文処理で強い手掛りとなることを示し、日本

語と韓国語での共通性を明らかにした[5]。

MacWhinney *et al.*, (1984) は、英、イタリア、ドイツ語において、各々の成人母語話者が、語順 (NNV • NVN • VNN)、意味 (AA • AI • IA)、格標識 (名詞と動詞との 3 人称単数 vs. 3 人称複数の接尾辞の一致 ; agreement。ただし、ドイツ語においては女性名詞を使用)の 3つの手掛りをどのように単文理解において使用するかを、競合モデルによる実験計画で比較した。英語においては、語順方略が圧倒的に強く、意味方略は極めて弱く、格標識に基づく単文処理もほとんど見られなかった。イタリア語では、むしろ、格標識が極めて強く、意味方略がこれに続き、語順方略は極めて少なかった。ドイツ語話者は意味方略が 1 番強く、格標識がこれにつぎ、語順方略はほとんど全く見られなかった。MacWhinney *et al.*, (1985) は、ハンガリー語で同様の実験を大人と子供に行った。成人ハンガリー語話者は、格標識 (目的格の接尾辞、-t) が圧倒的に強く、語順の手掛りは極めて弱く、意味方略はほとんど全く用いなかった。

McDonald (1986) は、英語とオランダ語の単文処理について同様の実験を行い、格標識 • 語順 • 意味の手掛りのうち、いずれの手掛りが動作主の決定に強い影響力を及ぼかを発達的に検討した。彼女の得た結果は、英語においてはやはり語順方略が圧倒的に強く、意味方略は極めて少なく、格標識 (代名詞の主格または対格 ; 例えば he と him) に基づく単文処理はほとんど全くみられず、MacWhinney *et al.*, (1984) と共通する結果が得られた。これに対して、オランダ語においては格標識 (代名詞の主格または対格 ; 例えば hij と hem。これらは英語の he と him に対応) による方略が最も強く、語順がこれに続き、意味方略が最も弱かった。このオランダ語の格関係の決定における方略の順序は、韓国語のそれと同じである。しかしながら、McDonald (1986) の成人のデータを第六章の実験の成人のデータと比較すると、韓国語母語話者の方が、より格標識に基づく方略に依存し、意味方略については韓国語話者よりもオランダ語話者の方が意味方略への依存が大きく、語順方略の使用については韓国語の方がオランダ語に比べて低かった。以上の差異は、韓国語の単文処理において助

詞の果たす役割が極めて大きいことを示すものである。

日本語の助詞ハとガとヲ、およびハンガリー語の目的格接尾辞は、韓国語の助詞と同様に、格関係の理解において強力な手掛りとなっている。これら3言語の格標識に共通するのは、主格や主題、または目的格という単一の形式と意味が対応関係にあり、意味関係と機能的な形態素の形式が明確であるということである。また、これら3言語は膠着語的性格が強く、格標式は性や数に左右されない「単一の手掛り」(local cue ; Slobin and Bever, 1982)である。一方、英、ドイツ、オランダ、イタリア語では、上記の実験において、韓、日、ハンガリー語と比べて、相対的に格標識の果たす役割は弱かった。これら4言語では、主格と目的格の格標識の形式が性、数の条件によって同型となることがよくあるので、実際の言語行動における動詞に対する名詞の一致(agreement)の手掛りとしての強さは、さらに弱まると考えられる。

8－5　第八章のまとめ

本章では文理解の方略という観点から日本語の特徴を他言語との比較により考察した。日本語は、決して特異な言語とはいえない。また、韓国語との類似性も指摘された。しかし、もう一方では、意味方略の使用が多いことなど、日本語の言語構造の特徴を反映していると思われる事実も明らかにされてきている。文理解過程を人間の認知過程の一例と捉えると、言語の特徴が人間の思考や行動に影響を与えるという「弱いサピア＝ウォーフ仮説」を支持していると解釈することも可能であろう。

註

(1)　これら主語・目的語・動詞という文法的カテゴリーが全ての言語に普遍的に適用できるかどうかは議論の分かれるところであろう。例えば三上(1960、1975など)は主語のカテゴリーを日本語にあてはめるのは不適切であるとし、日本語の主語廃止論を唱えた。主語の概念が多様な属性を持つことが指摘されたり(Li and

Thompson, 1976)、主語はプロトタイプ的概念であって主語と主語でないものとの境界をはっきりさせることはできない (Comrie, 1981) との主張もある。

(2) 本論文では有標文に対する文理解の方略と無標文に対しての方略の両方の方略について言及しているわけだが、以下、特に断わらない場合は有標文についての研究である。

(3) 英語児が著しく語順の手掛りに依存する原因は、英語という自然言語の構造の特殊性に帰することができると思う。英語の特殊性とは、第一に語順が統語論 (構文) において決定的ともいえる役割を果たすことである。英語の語順について検討をしている Bever (1970) は、いくつかの興味ある文例を提出している。たとえば、

(a) Her and him liked the cannabis juice. (p321)

という文は受容可能な acceptable な文であると Bever は言う。ある英語の native speaker によれば、ある階層の人々にとっては (a) のように代名詞が目的格の形で文頭に置かれて、主語として使用することがあると言う。この例は、代名詞の格変化よりも、語順の方がより統語的に重要な手掛りになることを示している。また、複文において、例えば、

(b) The boy she pleased deserved the girl he kissed.

は、完全に受容可能な文であり、関係代名詞の省略はむしろ普通のことである。NNV=OSV と自動的に判断できる彼らにとって関係代名詞の whom、that、which 等は冗長に感じられるのであろう。これらの関係代名詞は書きことばにおいても省略可能である。

英語の第二の特殊性は、無生名詞が主語になりやすいということである。英語の規準的文には、たとえば、(c) のように、道具格 (instrumental) にあたる名詞句が主語になっても文法的である。

(c) His knife killed the policeman.

(d) He killed the policeman by the knife.

英語では (c) と (d) は acceptable である。

しかし日本語では (e) は acceptable でも (f) は acceptable ではない。

(e) 彼が警官をナイフで殺した。

(f) *彼のナイフが警官を殺した。

(4)　格標識としての助詞の機能の強さは、ヲ＞ガ＞ハの順であった。この順番は省略の頻度の少なさと対応していると思われる。すなわち、主題助詞ハは三つのうちで一番省略されやすい。ガとヲの助詞だけの省略率の高低は不明だが、ガ名詞句はヲ名詞句よりも他動詞文における省略率が高いのは間違いないことだと思われる。なお主題助詞ハと格助詞ガとの違いについては、第二章を参照のこと。

(5)　第七章で述べたように、韓国語においても格標識としての助詞の機能の強さは、目的格助詞＞主格助詞＞主題助詞の順であった。

第九章　本研究のまとめ

【要約】第九章では、各章ごとのまとめをおこない、全体の総括として、文法問題に対する心理言語学的アプローチの有効性と限界、日本語助詞ハとガの獲得困難性を第1言語において明らかにしたことの意義、多重機能性という枠組みの有効性、助詞の文法的機能の相対性、の4つの点から総合的考察を加え、今後の研究課題についての提案を行なった。

9－1　各章のまとめ

本研究で明らかになったことを、章の流れに沿ってまとめてみよう。

第一章では、本研究の目的と、言語発達の問題、日本語の助詞の交差言語学的な位置づけの問題、日本語と韓国語の助詞の共通性、本研究の方法的枠組み、本書の構成について説明した。

第二章では、本研究を進めるにあたり、全体的な問題の所在と日本語の助詞の理論的な枠組みとを述べた。ここでは、助詞ハとガの問題を中心に、これまでの言語学とくに語用論とよばれる分野での知見をふまえ、理論的な整理を試みた。なお、助詞ヲも(標示する格の違いはあるが)助詞ガと同じ機能を持つと位置づけられる。ここで本書が提出する中心概念は「多重機能性」である。複雑な文法的機能を持つ語の諸側面を相対的に独立したものとして抽出したもので、具体的には、ハとガ(およびヲ)の用法の違いを三つの機能すなわち、統語機能・談話機能・対照比較機能という観点から特徴づけ、本書の基本的な理論的枠組みとして論じた。助詞ハとガが、日本語を第2言語として学習する際に、頻繁に使用する助詞でありながら、使い分けが難しい文法項目であることを示した。しかし、韓国語を母語とする学習者はこの限りではな

い。それは、韓国語が日本語のハとガと同じように、主題助詞と主格助詞の使い分けをおこなう言語であるからである。このような類似点に着目して第六章・第七章の実験がおこなわれたのである。日本語を母語とする幼児についてこれまでの助詞ハとガの研究を概観すると、その出現は1歳台で早期であるが、本研究で明らかにしたように文法にかなった機能的な習得が完成する時期は遅く、思春期にまで及ぶことが示された。このような獲得の難しさの理由として、ハとガに多重機能性があるということが指摘された。すなわちTable 2–1にあるように、ハとガには、統語機能・対象比較機能・談話機能という3つのレベルで各々対比的な機能がある。この3つはレベルの違うものでありながら、機能的には連関しあっており、使用も独立になされるのではなく2つの機能が共起することもある。

第三章は、日本語を母語とする成人話者と日英、英日の二言語併用者、そしてアメリカ人の日本語学習者に2つの名詞句と他動詞からなる単文を聞かせた実験であった。一方の名詞句にハまたはガが付いた場合と両方の名詞句に各々ハとガが付いている場合のそれぞれで、ガの付いた名詞句が他動詞の動作の主体(動作主)として選択される率がハのそれよりも高いこと、ハよりもガの動作主性が高くなるのは、ガが他動詞文で主格をあらわす格助詞であるのに対してハは主題提示の助詞であり格関係をあらわす機能を備えていないこと、しかし、実際の言語運用では動作主にあたる名詞句は主題化されることが多いことから、ハは文法的には格関係を示さないが言語使用経験に基づいた経験的・心理的機能として聞き手に動作主であると解釈させる力があること等が明らかになった。しかし、この結果は4つの群の間に差が出ており、日本語学習者ではこのようなハとガの違いが獲得されているとはいえず、むしろガの被動作主をあらわす文型との混同・類推からの解釈があったことが示唆された。二言語併用者(日英、英日)は、日本語母語話者と日本語学習者の中間的な反応があったことも明らかにされた。第1言語の第2言語に対する干渉と第2言語の第1言語に対する干渉が問題とされる。無生物を動作主として解釈

することへの抵抗の度合の大きさ、逆からみれば動作主を決定するときの生物・無生物による意味方略の強さの比較により、第1言語の際に用いた方略が第2言語を処理するときにも同じように用いられたことが示された。この結果はHarrington (1986) とも一致している。

第四章は、第三章で問題にした助詞ハとガの動作主を標示する手掛りとしての強さが年齢の変化にしたがってどの様に変わって行くかという発達的研究であった。このような実験的条件のもとでも語順の影響を受けずに大人と同じような助詞理解のパターンになるのは10－12歳頃であることが見いだされた。また、発達における意味方略使用のU型カーブがみられた。すなわち、意味を手掛りにして文理解を行なう傾向は10－14歳までは減少してくるのだが、この頃から大人になるにつれ、文法的手掛りにではなく意味の要因に依存する割合が大きくなっていくことが明らかになった。この発達上のU型カーブは、中国語 (Miao *et al.*, 1984) にもみられた現象であった。

第五章では、日本語の「動作主－被動作主－行為」の文型において、動作主は主格助詞ガで標示され、被動作主は対格助詞ヲで標示されることから、前章をうけて、動作主－被動作主関係の文理解において、助詞ヲの手掛りの強さを主格助詞ガと主題助詞ハと比較し、発達過程を明らかにした。助詞ヲは意味的にガよりも単純であるため、(1)ヲの手掛りの強さはハよりも強い、(2)日本語児において助詞ヲは助詞ガよりも獲得時期が早い、という2つの仮説が立てられた。4、5、6、8、10、12、14歳児と大人の80人の日本語母語話者が、単文を聞いて、ミニチュアの動物とモノを使って演示法(アクト・アウト法)においてどちらの名詞が動作主であるかを判断するように教示を受けた。刺激文は、語順(NNV、VNN、NVN)×助詞(φφ、φ・対格、対格・φ)×名詞の有生性の組合せ(有生－有生、有生－無生、無生－有生)から成る、27文型で構成されている。NNV型の文型の結果が第四章のデータと比較され、仮説は2つとも支持された。第1名詞にヲがつけばついてない場合よりも動作主とは解釈されにくいことから、第四章の仮説的な方略のうちでは、「第1名詞に

ガまたはハが付けば動作主である」とするものが最も正しいことを示す証拠となった。

第六章は、第四章でおこなわれた主題助詞と主格助詞の統語機能の発達を、韓国語について調べ、日本語のハとガと比較したものである。日本語のハとガと同様の区別が行なわれているとみられる、韓国語の主題助詞 eun/neun と主格助詞 i/ga について、第四章の文理解の方略の実験と同型の実験を韓国語母語話者の幼児から成人までの 8 群に対して行った実験の報告であった。両言語に共通して、成人において主格助詞の方が主題助詞よりも動作主性が高かったことがわかり、語順の影響を受けずに助詞によって動作主を選択できる時期が 12 歳以降であることから、主題助詞と主格助詞の獲得の時期の遅さに 2 言語間での共通点がみられた。現代日本語と現代韓国語の基本語彙を比較すると類縁性がそれほど強くないが、文法的観点からみると両言語は類似性が高い。

第七章では、第五章と同型の実験を行い、韓国語の対格助詞 eul/reul も日本語と同様に主格助詞より獲得が容易であることを示した。

第八章では、第三章から第七章までの実験をふまえ、日本語の助詞の特徴を、成人と幼児・児童に対する諸言語の文理解の方略の実験的研究を多様な言語と比較することによって明らかにすることを試みた。このような交差言語的方法により、日本語における文処理に果たす助詞の役割の強さと、語順の果たす役割についての弱さについて、これを英語・韓国語・イタリア語・ドイツ語・オランダ語など様々な言語と比較して論じた。日本人にとって助詞は強い手掛りであるのだが、この文法的手掛りがない場合には次に重要であるのは意味の手掛り（有生性）である。日本人は有生のものを動作主と解釈しやすく、無生物を動作主と処理することに強い抵抗を示す。英語の無生物主語構文を和訳する場合の日本人の好みのスタイル（野呂，1987）は、日本人の意味方略の強さと大いに関係があるといえるのではないだろうか。日本語は、韓国語に対しても動作主に対する言語的な違いがあるようである。日本語の存在

を表す表現(イル－イナイとアル－ナイ)は存在の主体にあたる名詞句が有生か無生かで使い分けられているが、韓国語の場合にはこの現象は見られない。

9－2　総括と今後の課題

日本語における助詞、特にハとガの問題をその統語機能に絞って、心理言語学的なアプローチで、その解明に迫ったのが本研究であった。明らかにされたことについてのまとめは、すでに第二章・第八章でなされているが、ここでは異なった観点で本書を総括し、本研究では論じられなかった問題を以下に指摘しよう。

まず第一に、文法問題に対する心理言語学的アプローチの有効性と限界である。本研究では、ハとガの統語機能を中心にその比較を言語行動において実験的に進めてきた。第三章と第四章の結果からは、文法的機能の差異が言語行動上の差異として現れたことを見て取ることができる。このことからも、外国人のための日本語教育と日本人のための国語教育・文法教育において、ハとガを「主語」という用語で一括して扱うことの誤りが指摘できよう。日本語教育においては、第一章の指摘にあるように、ハとガの区別は(韓国語母語話者を除く)学習者の多くにとって獲得困難な項目であり、教師の側でハとガの用法の区別の問題に敏感にならざるをえない。日本語教育学会の雑誌『日本語教育』などにおいても、この問題が理論的にも教育的にも検討されてきている。しかし、この問題は、実は国語学の本質的な問題であるにもかかわらず、日本の子どもに対する国文法教育の場合、教科書通りに「主語」という概念で教えられていると推測される(1)。また、一歩譲って主語という概念を国語教育で採用するにしても、それを印欧語文法のsubject概念と同等とみなす誤りを防ぐ手だてが必要である。一文中に主語が二つ以上ある場合があり、主語無し文が存在すること等、日本語が印欧語と異なる特性を持つことをふまえることが必要である。

第二には、日本語の助詞の獲得の困難さについて、発達的なアプローチを

用いたことにより、第1言語においても助詞ハとガの獲得の困難さを実証することができたと考える。本研究の一連の実験的条件のもとでハとガの使い分けが完成するのは、おおむね中学生以降の時期である。英語の冠詞の定・不定の区別の獲得時期 (Maratsos, 1976 ; Warden, 1976) や、フランス語の冠詞の使い分けができる時期が9歳頃であるという印欧語の研究と比較してみると、ハとガの多重機能性の獲得はより遅い時期である。この獲得の遅さについては、何をもって獲得したといえるかの基準の問題もあるし、実験条件や手続きの違いによって課題の困難さが違ってくる等の問題がある。話しことばでは習得済みのようにみえても、書きことばでは、正しく使い分けられないということもありうるだろう。本研究では書字言語に触れられなかったが、現実の日本語教育・国語教育において習得するに重要な意味を持つのは、むしろこの書きことばの分野であるとも思われる。

ところで、同じ格助詞といってもガとヲでは格関係のような意味を表わす機能が、かなり異なることも、明らかにすることができた。我々はガを「主語」を表わす助詞とみなすことには否定的であるが、他の格助詞と比較しての、ガの持つ特殊な地位については、大変興味を抱いている。Table 2–1 に示したようなガの用法 (例えば排他の用法) が、他の格助詞にどの程度、適用可能かは、未解決の問題である。

第三に、多重機能性という枠組みの有効性を検証することが課題である。そもそも、この枠組みを文法獲得の心理言語学的研究に初めて用いたのはフランス語児の冠詞の発達を研究した Karmiloff-Smith (1979) であった。日本語の助詞の心理言語学的分析にも有効であると考えて、筆者らは、ハとガの機能の解明に取り組んできた。ハとガの対象比較機能につては、これまでに田原 (1984, 1985) の研究が有るのみであり、談話機能については田原・伊藤 (1985)、田原・伊藤・朴 (1990) で研究が進んでいる。

第四には、助詞の文法的機能の相対性の問題がある。格関係を明確にするために助詞を用いることは、日本語の文法にとって自明のことと考えられて

いる常識に対し、本研究は批判の一石を投じている。そもそも文法には「規範文法」と「記述文法」のふたつの立場がある。規範文法的な考え方からすると、文の格関係を明確に標示するために助詞の省略(脱落)はあってはならないことであるが、記述文法の立場からすると日本人の日本語使用にはしばしば助詞の省略がみられるということになる。本研究における一連の実験で明らかになったことは、日本人は格関係の理解に助詞のみを手掛りにしているのではないということである。

助詞を省略された文は記述文法から言えばありふれた現象であって、その省略の度合に方言差がある。九州地方では、主格にガだけでなく、ノを用いることが知られている。この使い分けは、主格名詞句に対する話者の心的態度によって行なわれる。また東北地方の方言では、主格助詞は一般的に省略されるとの指摘(柴谷, 1985)や[(2)]、関西方言は東京方言に比べ助詞の省略が多いとの指摘もある。このような様々な方言を母方言とする話者に対して、本研究でおこなわれたような実験を実施したいという計画も果たせず、実験は東京とその近郊でしかなされなかった。助詞使用の方言差とその発達は今後の検討課題である。

学校教育における文法教育との関連で日本語助詞の習得の問題を明らかにすることも、本論文ではできなかった。教授実験の方法も有効であるとおもわれる。野田(1985)のような用法中心の実践的な整理の仕方も参考にしつつ、発達的なアプローチとともに、教育的なアプローチも今後の課題である。

註

(1)　これは、実際に調査することによって裏付けをすることが必要である。日本の初等中等教育の教師に対して、助詞、特にハとガの用法についての理解の度合を知り改善の方策を取ることは、日本の文法教育の発展のために大切であると思われる。このような調査は我々の知る限り未だなされていない。

(2)　井上(1981)は、戦前の東北地方の国民学校の朝礼で、方言矯正が行なわれて

いたことを記述しているが、そのなかで助詞、特に格助詞を省略してはならないという指導が行なわれていたことを紹介している(文庫版 Pp23 − 24.)。

補章　助詞ヲと助詞eul/reulの理解の発達の比較

格標識の「手掛りの強さ」の言語間差

日本語で動作主・被動作主関係を理解するために使われる文法装置は主に格助詞である。例えば、「馬ガ箱 ϕ 噛んだ」という能動文を聞いた時、主格助詞ガが馬に付いているので、馬が動作主で箱が被動作主であると判断することが可能である。それでは、「馬 ϕ 箱ガ噛んだ」という文を聞いたときはどうであろうか。このとき、格助詞に基づけば箱が動作主で馬が被動作主と判断されるが、文の意味関係(この場合は動物か無生物かという有生性animacy)に基づけば生物名詞である馬が動作主、無生物名詞である箱が被動作主と判断される。また、語順に基づいて文頭の名詞(第1名詞)を動作主とした場合でも馬が動作主となる。文の動作主・被動作主関係を判断するために日本語においては助詞以外にも語順、有生性など様々な文法装置を使うことが可能である。動作主判断に対して助詞、語順、有生性の手がかりが対立する「馬 ϕ 箱が噛んだ」「箱が馬 ϕ 噛んだ」のような文で何を動作主とするかを調べることにより、依存する手がかりが判明する。

伊藤・田原(1986)は、日本語文中の動作主・被動作主を判断するために助詞ハとガ・語順・有生性のうち、どの手がかりが用いられているかを調べ、大人においては助詞に基づいて動作主・被動作主を判断していることを明らかにした。ただし、就学前期と小学校低学年においては有生性が主な判断の手がかりで助詞はあまり重要な手がかりではなく、助詞が有効な手がかりとなるのは10～12歳であることをつきとめた。

ところで、主格・対格の関係を表わすのに日本語と近似した文法装置を持った言語にトルコ語がある。トルコ語は名詞の語幹の後に格標識の接尾辞を膠

着させることで格関係を表示する言語で、トルコ語成人母語話者の動作主・被動作主の判断では、この格標識に基づいて動作主の決定をおこなう。Slobin and Bever (1982) によれば、トルコ語児が格標識に基づいて動作主・被動作主の判断ができるようになるのは非常に早く、2歳ですでに格標識に基づいて動作主・被動作主の判断ができるようになると報告している。

一方、英語においては、語順が格関係の理解に最も重要な手がかりである。Bates *et al*. (1984) によれば4歳で有生性に依存せず語順に基づいて動作主・被動作主関係を判断していたと報告している。イタリア語では動詞の変化により主語が同定され agreement、これが格関係を表す文法標識となる場合があり、Devescovi and Caselli (1985) によれば、低年齢時には有生性を手がかりとして用い、主語と動詞の一致を手がかりとして用いるようになるのは7歳になってからである。

以上より、日本語・トルコ語・英語・イタリア語の各言語を比較すると、動作主・被動作主関係を判断する際、その言語の成人母語話者が用いている文法装置 (手がかり) が異なること、また、成人の用いている文法装置に依存して動作主・被動作主判断をするようになる年齢は言語間で差があることがわかる。

競合モデル

競合モデル competiton model は、(1) 文法的判断をする際、依存する文法装置が言語間で何故に異なるのか、(2) ある言語ではある文法項目が早く獲得されるのに対して、別の言語では遅れるのは何故か、を説明するために、Bates & MacWhinney らによって提唱された言語処理のモデルである。

Bates & MacWhinney (1987) によれば、言語の表層形式 form は、なんらかの意図・意味 function を伝達するコミュニケーション機能のために創造され、支配され、制約され、獲得されると考える。言語の表層形式 formal level と意図・意味 function level は直接的な写像 direct mapping 関係にあり、文法獲得の生得的普遍論者、たとえばチョムスキーのように深層構造を想定しない。ただし、言語

の表層形式と意図・意味は、プロトタイプとして特定の言語の表層形式が特定の意図・意味と写像しやすいことはあっても、1対1の対応関係ではなく多対多の関係があると考えている。

競合モデルでは文を処理していく難易を決定する要因として手掛りの競合competitionと連携coalitionを想定している。手掛りの競合とは、日本語の例では「馬 ϕ 箱ガ噛んだ」の文で動作主を判断しようとするとき主格助詞ガに基づけば「箱」が、有生性や語順に基づけば「馬」が選ばれるように、依拠する手掛りにより格関係の理解の仕方が異なり対立する場合である。連携とは、競合とは逆に、例えば「馬ガ箱 ϕ 噛んだ」の文のように、動作主を判断する際に助詞・語順・有生性のいずれの手掛りに依拠しても「馬」が動作主となるように、いずれの手掛りにおいても同一の格関係が標示される場合である。手掛りが競合関係にある文は、当然ながら、処理が困難であり、処理のための時間が多くかかり、正しく理解できるようになる発達的時期も遅いということが予想される。逆に、各手掛り間が連携関係にある文は、処理されやすく、文処理時間も短くてすみ、発達的に早期に獲得されるであろう。Slobin and Bever (1982) のいう規準的文型canonical sentenceは、各手掛りが連携関係にある文型である。

彼らは、文法項目の獲得を決める主要な決定因として「手がかり妥当性cue validity (CV)」を想定している。手がかり妥当性は2つの要素からなり、「手がかりの手にいれやすさcue availability (CA)」と「手がかりの信頼性cue reliability (CR)」に分かれる。「手がかりの手にいれやすさ」とは、ある手がかりをどのくらい手にいれることができるかを、また、「手がかりの信頼性」とは、手がかりが存在するとして、その手がかりに依存すればどの程度正しい結論に導かれるかを示したものである。「手がかり妥当性」は「手がかりの手にいれやすさ」と「手がかりの信頼性」との関数であり、「手がかり妥当性(CV)」の確率は

$$CV = CA \times CR$$

という式によって表される値である。

McDonald (1986) は、英語とオランダ語で、他動詞文と関係詞それぞれにおいて語順、有生性、格標式(代名詞による主格と対格の標示)の「手がかり妥当性」を推定する手順を提示している。ここでは、他動詞文において語順、有生性、格標示の手がかりが動作主である「手がかり妥当性」を推定する方法を示すことにしよう。まず、両言語においてそれぞれ小説を選定し、その小説から任意に 100 文を選び出す。次に、状態記述文 (stative sentence: 例えば There is a book) は動作主を持たないので除去し、残された文について語順・有生性・格標示の手がかりがいくつあるか、また、その手がかりが何回動作主の役割を割り当てているかを調べる。例えば、状態記述文が 20 文あり、それを取り除き残された文が 80 文のうち、有生性の手がかりが 40 文あり、その 40 文のうち 20 文に動作主が割り当てられていたとしよう。このとき、有生性の「手がかりの手に入れやすさ」は状態記述文を取り除いた 80 文中 40 文に有生性の手がかりが存在していたので 40/80 で 0.5、「手がかりの信頼性」は有生性の手がかりを有していた 40 文のうち、その手がかりに依存して動作主が正しく割り当てられた場合が 20 文であるので 20/40 すなわち 0.5 であり、「手がかり妥当性」は (40/80) × (20/40)=0.25 となる。

競合モデルでは「手がかり妥当性」の高いものほど、その言語において手がかりとして依存しやすい言語装置であり、早期に獲得されると仮定している。したがって、各言語、例えば英語は動作主・被動作主の判断で語順に依存し、イタリア語では主語と動詞の一致 agreement に、日本語では助詞に依存するのは、これらの手がかりが他の手がかりに対して「手がかり妥当性」が高かったためであると競合モデルでは考える。また、トルコ語で格標識に基づいて 2 歳で動作主・被動作主を判断できるのは、それぞれの言語で格標識、語順の動作主・被動作主に対する判断の「手がかり妥当性」が、他の手がかりに対して極端に高かったということの反映であろう。トルコ語では格標識である接尾辞の主格・対格の意味的ガイドとしての「手がかり妥当性」は 100% で

あり、規則的で例外がない。これに対して、日本語においては助詞ガはしばしば省略されるのみならず、受動文では主格の被動作主を標示し、ある種の動詞句(見える•できる•好きだ等)に対しては被動作主を標示する機能がある。その結果として、主格助詞ガの動作主を判断する手がかりとしての妥当性は低くならざるえず、他の手がかりと比較して「手がかり妥当性」がきわめて高いとはいえない。そのため、日本語においては助詞による動作主•被動作主の判断が他の言語に比べて遅くなると考えられる。

競合モデルでは、言語使用をする人間がどの様に格標識やその他の手掛りを使用するかの度合という認知レベルでのものを「手掛りの強さ」cue strength とよび、言語形式レベルでの「手掛り妥当性」との区別を行なっている。Bates & MacWhinney (1987) によれば、「手掛りの強さ」とは「情報の妥当性についての個体の知識をモデル化する」ための「個体の主体的属性」であり、「手掛り妥当性と課題の頻度との関数であろう」と説明されている。つまり、手掛りについての人間個人の頭の中にある言語的な知識ないしは態度、行動様式である。これに対して「手掛り妥当性」は人間の主観とは独立したものである。

本研究では競合モデルの枠組みで日本語の格助詞ヲの「手掛りの強さ」について問題にする。Bates & MacWhinney (1987)のモデルと同等の実験計画が日本語の助詞ヲで可能である。この章の第 1 の目的は、競合モデルに基づく実験を助詞ヲについて行なうことにより日本語の格標識であるヲの「手掛りの強さ」を他言語と比較可能な形で明らかにすることである。

韓国語と日本語

韓国語(朝鮮語)は様々な言語の中でも構造的に日本語と文法的に類似性の高い言語である。基本語順は日本語と同じ SOV であり、機能語としては日本語のように後置詞(助詞•助動詞)を用いる。語順は名詞句の間では自由に入れ替え可能であり後置詞の省略も可能である。

韓国語の助詞について概観すると、韓国の学校文法は、助詞の種類は大き

くわけて格助詞・接続助詞および日本語の副助詞にあたる補助詞の3つがあるとしている。韓国語の助詞は、同じ機能や意味を表すものでありながら前におかれる名詞の終声(語尾の音素)が母音か子音によって異形態 allomorph を持つものがある。例えば(日本語のガにあたる)主格助詞には i と ga があり、(日本語のハにあたる)主題の助詞としては eun と neun があり、(日本語のヲにあたる)対格助詞には eul と reul がある。また、文中で格関係が明瞭な場合は助詞が省略されることがあり、特に主格助詞や対格助詞の場合にはしばしば省略される。日本語と同じく書きことばより話しことばでの省略が多い。Li & Thompson (1976) の世界の言語の類型論によれば日本語と韓国語は主題助詞と主格助詞をあわせもつ言語として同一の類型に分類される。これらの助詞の文中での機能については、主題助詞 eun/neun は対照の意味(久野 1973)で使われることがあることも日本語と共通である。また、洪 (Hong, 1983) によれば、この主題助詞は対照機能の他に新旧情報と対応する機能もある。つまり、伊藤 (1986 および本書第二章)が提示したハの3つの機能がそのまま韓国語の eun/neun でもあてはまる。また金 (Kim, 1985) によれば、主格助詞 i/ga の意味的な格は日本語のガと同じ様な分類(伊藤, 1986; 第二章参照)が可能である。

このように日本語と類似の機能の助詞をもつ韓国語と日本語の言語発達の交差言語的研究は興味深いものがある。本研究では日本語の助詞ヲとそれに対応する韓国語助詞 eul/reul の競合モデルに基づく比較を行い両言語の共通性と差異性を明らかにする。これを第1の目的についての重点としたい。

なお、韓国語児の助詞の獲得についての研究をみると、李ほか (1979) の自然発話での研究では3歳頃から、主格・対格・属格・補格・与格・副詞格の正しく用いられる率が93 − 100% に達している。

格助詞ヲの初出と発達

日本語において、文の主格、対格および主題はそれぞれガ、ヲ、ハで標示される。宮原・宮原 (1973) によれば、「カミ ナイ」「コレ ポッポチャン」などの

「主語－述語」関係、「カミ チョウダイ」「エンピチュ チョウダイ」などの「目的語－他動詞」関係を表わす文は1歳6カ月の幼児の発話において出現するのであり、幼児の話す最も初期の発話の中に助詞は出現しない。日本語幼児がガ・ヲ・ハを初めて発話で使用する時期(初出時期)は大久保(1967)によればいずれも1歳台の後半であり、これらの助詞の初出時期はそれほど大差はない。しかし、ガやハは年令が増加するにしたがってその使用が増加しコンスタントに用いられるようになるのに対して、ヲは年令が増加しても使用数が少なく省略される割合が高い。一方、宮原・宮原(1967)は、20カ月の幼児ではガは「主語＋ガ＋述語」、ハは「名詞＋ハ?」の形で現われるのに対して、ヲはその出現期がガ、ハに比較して少し遅れ23カ月になってからであったこと、一般に成人の発話において最も省略されるヲは幼児の発話でも極端に省略されること、ガ・ハにおいては出現の形式が定式化していたのに対して、ヲでは「イレタヨ アイアイヲ」「アイアイヲ イレタヨ」のように語順変換による表現ができることを報告している。また、永野(1959)の観察ではハとガの初出は2歳1カ月、ヲの初出は2歳3カ月であった。

以上の大久保(1967)、宮原・宮原(1967) 永野(1959)の知見から、ヲはガやハと比較してほぼ同時期またはそれ以降に出現し、省略される割合が高い助詞であること、この傾向は、ハ、ガが年令が増加するに従って省略されなくなるのに対して、年令が増加しても維持されるといえる。

日本語という言語内での格標識としての助詞ヲ

伊藤・田原(1986)は助詞ハとガが格関係の理解に果たす役割の強さを実験的に調べ、その発達過程を検討し、格助詞であるガが係助詞のハよりも動作主をあらわす力が強いということを示した。他の先行研究でも能動文・受動文の獲得過程や助詞無し文と助詞付き文の発達過程を比較したものは数多い。しかし、格助詞の間で格関係をあらわす強さの比較を取り扱った心理言語学的研究はない。本研究の目的の第2は、語順や有生性などの意味の手掛りに対す

る助詞の「手掛りの強さ」を比較するとともに、被動作主を表す対格助詞ヲについて、文理解における「手掛りの強さ」を、動作主を表す主格の助詞ガおよび「動作主性」をもつ主題助詞ハと比較することにより、日本語の言語内での格標識についての位置づけを明らかにすることにある。

方　法

(a) 日本語の実験

実験は、MacWhinney と Bates の競合モデルに基づいて計画された。保育園年中・年長、小学校 1•3•5 年、中学校 1•3 年、大人の 8 群各 10 名に対し、助詞ヲの位置の要因 (φ φ • φ ヲ • ヲ φ)、語順の要因 (NNV •VNN •NVN)、および名詞の意味の要因 (animate – animate: AA • animate – inanimate: AI • inanimate – animate: IA) からなる 27 文型を聞かせ、演示法 act out method によって動作主・被動作主を判断させた。

被験者: 東京近郊の保育園年中 (平均年齢 5;3)、年長 (平均年齢 6;1) の幼児、小学校 1 年 (平均年齢 7;3)、3 年 (平均年齢 9;3)、5 年 (平均年齢 11;4) の児童、中学校 1 年 (平均年齢 13;4)、3 年 (平均年齢 15;3) の生徒、大人 (平均年齢 22;2) の 8 群で、各群男女 5 人ずつの 10 名、計 80 名。

実験材料: 刺激文を録音したカセットテープ、ミニチュアの動物と小物、テープレコーダー、A4 の白紙、記録用紙。

刺激文は、全体の実験計画では助詞ヲの要因 (φ φ • φ ヲ • ヲ φ の 3 水準 : φ は助詞無しを示す)、語順の要因 (NNV•VNN•NVN の 3 水準 :N は名詞 ,V は動詞)、名詞の意味の要因がやはり 3 水準で (A•AI•IA : A は animate, I は inanimate) であった。すなわち、名詞 (N)2 つと動詞 (V) からなる文で、助詞ヲの組み合わせとして、第 1 名詞 (N1) にヲを付け第 2 名詞にヲを付けないヲ φ、第 1 名詞に助詞をつけず第 2 名詞 (N2) に助詞ヲを付ける φ ヲ、第 1 名詞・第 2 名詞ともに助詞をつけない φ φ の 3 種類の助詞の組合せと、語順要因として動詞の位置によって NNV•VNN•NVN の 3 語順、名詞の意味の組合せとして N1•N2 の名詞が生物 (A)

か無生物 (I) の 3 通りからなる 3 × 3 × 3 の 27 文型である。これら各文型に対して、象・キリン・カンガルー・馬・らくだ・パンダの生物名詞 6 種、箱、鉛筆、スプーン、ボール、クレヨン、ケシゴムの無生物名詞 6 種、「触った」「押した」「たたいた」「かんだ」の動詞 (厳密に言えば動詞と完了の助動詞「た」) 4 種の中からいずれかの項目を無作為に選び出した (ただし AA 型の文では、A は同一の生物名詞とならないようにする)。Table 1 はこれらの文型および例文を示したものである。

名詞の選択基準については生物名詞は子どもにとってなじみのある脊椎動物、無生物名詞は日常的に見慣れた物を選び、いずれの単語も 4 歳群児ですでに獲得済みであろうと思われるものである。動詞の選択基準は、子どもにとって理解が容易で、かつ一方が他方に対して行なう動作が観察しやすい他動詞を選んだ。

以上の 27 の文型に対して 1 文ずつ、合計 27 の文を作成し、テープに録音した。録音に際してのスピードは、各文を 3 秒で読み、読み終えて約 7 秒の間をとって次の文を読み始めた。この 27 文の録音の順番はランダムである。このようなテープを 4 種類作成した。これとは別に、第 1 名詞が有生名詞、第 2 名詞が無生名詞の N ϕ N ヲ V 型の 3 文を録音したテープを作成し、練習文として用いた。

手続き：A4 の紙の上のランダムに置かれた 12 個のミニチュア、小物を命名することができるかどうか確認した後、「今からテープレコーダーから、短いお話し (小学校 1 年以降は「文」) が聞こえてきます。そのお話し (文) をよく聞いて、目の前にあるものを使って、その通りにやってみせて下さい。その時、両手を使わないで片手でやってみて下さい」という教示を与え、練習文のテープを聞かせる。片手で実演するように教示したのは、両手を使って 2 つのものを持つと動作主の判断が困難になるからである。また、お話し (文) を聞き落としたときには何度でもテープを聞くことができることも告げておく。練習文で実演することができたら、ミニチュア・小物の位置を変えて、4 本のテー

Table 1. Types and examples of Japanese stimulus sentences

助詞	語順	意味	文型	例文
ヲφ文	NNV	AA	(1) AヲAφV	象　ヲ　らくだ　φ　噛んだ
		AI	(2) AヲIφV	カンガルー　ヲ　鉛筆　φ　叩いた
		IA	(3) IヲAφV	ボール　ヲ　パンダ　φ　触った
	NVN	AA	(4) AヲVAφ	馬　ヲ　触った　パンダ　φ
		AI	(5) AヲVIφ	パンダ　ヲ　叩いた　ケシゴム　φ
		IA	(6) IヲVAφ	箱　ヲ　押した　キリン　φ
	VNN	AA	(7) VAヲAφ	噛んだ　象　ヲ　らくだ　φ
		AI	(8) VAヲIφ	押した　象　ヲ　スプーン　φ
		IA	(9) VIヲAφ	触った　クレヨン　ヲ　象　φ
φヲ文	NNV	AA	(10) AφAヲV	カンガルー　φ　象　ヲ　噛んだ
		AI	(11) AφIヲV	パンダ　φ　鉛筆　ヲ　叩いた
		IA	(12) IφAヲV	ボール　φ　らくだ　ヲ　噛んだ
	NVN	AA	(13) AφVAヲ	らくだ　φ　触った　馬　ヲ
		AI	(14) AφVIヲ	パンダ　φ　叩いた　ケシゴム　ヲ
		IA	(15) IφVAヲ	箱　φ　押した　カンガルー　ヲ
	VNN	AA	(16) VAφAヲ	触った　らくだ　φ　象　ヲ
		AI	(17) VAφIヲ	叩いた　馬　φ　クレヨン　ヲ
		IA	(18) VIφAヲ	押した　スプーン　φ　キリン　ヲ
φφ文	NNV	AA	(19) AφAφV	らくだ　φ　象　φ　押した
		AI	(20) AφIφV	キリン　φ　ボール　φ　噛んだ
		IA	(21) IφAφV	スプーン　φ　パンダ　φ　叩いた
	NVN	AA	(22) AφVAφ	馬　φ　触った　カンガルー　φ
		AI	(23) AφVIφ	キリン　φ　叩いた　箱　φ
		IA	(24) IφVAφ	クレヨン　φ　触った　パンダ　φ
	VNN	AA	(25) VAφAφ	押した　カンガルー　φ　らくだ　φ
		AI	(26) VAφIφ	噛んだ　象　φ　箱　φ
		IA	(27) VIφAφ	押した　ケシゴム　φ　キリン　φ

φ（ゼロ）は助詞のついていないことを表す。

プのうちの1本を実験者が無作為に選び出し、被験者に実演させる。終了後、2、3分の休憩の後に、残った3本のテープのうちの1本を無作為に選び、同様の手続きで実演させる。

(b) 韓国語の実験

被験者：ソウル及びソウル近郊の幼稚園年中 (平均年齢 4;9)、年長 (平均年齢 5:6) の幼児、小学校1年 (平均年齢 6;8)、3年 (平均年齢 8;7)、5年 (平均年齢 10;9) の児

Table 2. Types and examples of Korean stimulus sentences

助詞	語順	意味	文型	例文
eul φ 文	NNV	AA	(1) AeulA φ V	Kokkiri reul nagta φ muleotta
		AI	(2) AeulI φ V	Kanggaru reul yeonpil φ tteryeotta
		IA	(3) IeulA φ V	gong eul panda φ manjyeotta
	NVN	AA	(4) AeulVA φ	Mal eul manjyeotta panda φ
		AI	(5) AeulVI φ	Panda reul tteryeotta jiuge φ
		IA	(6) IeulVA φ	Sangja reul mileotta kirin φ
	VNN	AA	(7) VAeulA φ	Muleotta kokkiri reul nagta φ
		AI	(8) VAeulI φ	Mileotta kokkiri reul sutkarag φ
		IA	(9) VIeulA φ	Manjyeotta cleyong eul kokkiri φ
φ eul 文	NNV	AA	(10) A φ AeulV	Kanggaru φ kokkiri reul muleotta
		AI	(11) A φ IeulV	Panda φ yeonpil eul tteryeotta
		IA	(12) I φ AeulV	Gong φ nagta reul muleotta
	NVN	AA	(13) A φ VAeul	Nagta φ manjyeotta mal eul
		AI	(14) A φ VIeul	Panda φ tteryeotta jiuge reul
		IA	(15) I φ VAeul	Sangja φ mileotta kanggaru reul
	VNN	AA	(16) VA φ Aeul	Manjyeotta nagta φ kokkiri reul
		AI	(17) VA φ Ieul	Tteryeotta mal φ cleyong eul
		IA	(18) VI φ Aeul	Mileotta sutkarag φ kirin eul
φ φ 文	NNV	AA	(19) A φ A φ V	Nagta φ kokkiri φ mileotta
		AI	(20) A φ I φ V	Kirin φ gong φ muleotta
		IA	(21) I φ A φ V	Sutkarag φ panda φ tteryeotta
	NVN	AA	(22) A φ VA φ	Mal φ manjyeotta kanggaru φ
		AI	(23) A φ VI φ	Kirin φ tteryeotta sangja φ
		IA	(24) I φ VA φ	Cleyong φ manjyeotta panda φ
	VNN	AA	(25) VA φ A φ	Mileotta kanggaru φ nagta φ
		AI	(26) VA φ I φ	Muleotta kokkiri φ sangja φ
		IA	(27) VI φ A φ	Mileotta jiuge φ kirin φ

φ（ゼロ）は助詞のついていないことを表す。

童、中学校 1 年 (平均年齢 12;6)、3 年 (平均年齢 14;7) の生徒、大人 (大学生：平均年齢 20;5) の 8 群で、各群男女 5 人ずつ 10 名、計 80 名。

実験材料　刺激文は (1) の日本語の材料を韓国語に翻訳したものである。各文型と例文を Table 2 に示す。そのほかの材料は日本語の実験と同じものを使用した。

手続き：日本語の実験と同じ手続きを用いた。実験者は韓国語を母語とする大学生・大学院生である。

結果と考察

日本語の文理解

Fig.1–a は日本語実験で各年齢における φ φ 文・ヲ φ 文・φ ヲ文での第 1 名詞を動作主として選択した割合を百分率であらわしたものである。

φ φ 文では助詞の手掛りがなく、問題となるのは語順のみである。Bever (1970) 以来、動作主が被動作主の前にある語順の方が被動作主－動作主の語順よりも文理解されやすいことが確かめられている。φ φ 文の第 1 名詞選択率は 4 歳群の 63% が一番低く、12 歳群の 77% を最高にして大人では 72% とそれよりやや低くなっている。ランダムに動作主を選択すると第 1 名詞選択率は 50% になることから、全般的にいって日本人には第 1 名詞を動作主とする方略は存在するが、その傾向は特に強いというわけではない。

φ ヲ文では第 1 名詞を動作主とするのが文法的に正しく、第 1 名詞を選択する率が文法的にいって正答率となる。φ ヲ文は語順の手掛りと助詞の手掛りが連携している状態にあるといえる。4 歳児ですでに 75% の選択率があり、大人の 97% に至るまで一貫して第 1 名詞を動作主とみなす傾向が強い。語順による動作主選択の方略と助詞ヲが被動作主を表すことの理解からくる助詞に基づく方略との相乗的な効果であると考えられよう。

ヲ φ 文では第 1 名詞を被動作主とするのが文法的であるので、正答率は 100% から第 1 名詞選択率を引いた数値である。第 1 名詞選択率は 39% から 4.4% と年令が上がるにつれて大きく減少している。とくに 4、5 歳の時期は語順の要因にかなり影響を受けているといえよう。Fig.1–a から日本人の場合には 6 歳頃から語順の影響を受けないで助詞ヲのみによって動作主－被動作主関係の文理解が可能であるといえよう。

Fig.2–a は、有生性すなわち名詞の意味の要因によって第 1 名詞動作主選択

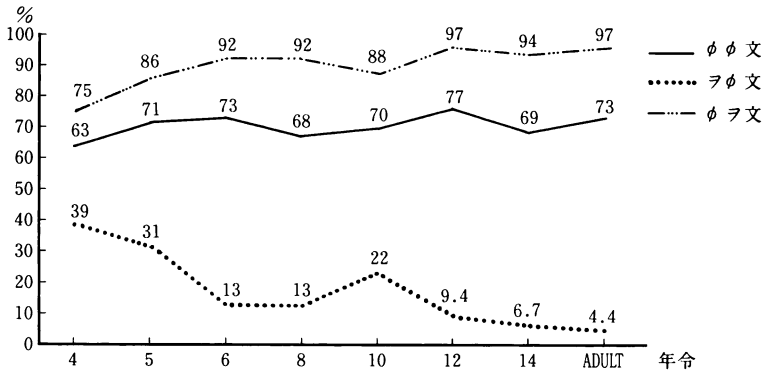

Fig. 1–a　ヲの理解 (第 1 名詞選択率)

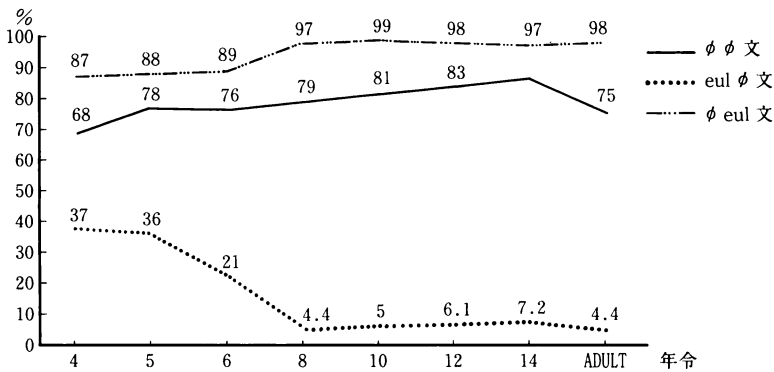

Fig. 1–b　eul/reul の理解 (第 1 名詞選択率)

率がどのように発達的に変化するかを日本人の各年令群ごとに示したものである。名詞の意味が中立的な文である AA 文では、72% から 59% までの範囲でしか変動せず年令差は小さい。AI 文は語順と名詞の意味が連携する場合であり、IA 文は語順で動作主を判断すれば第 1 名詞、有生性で動作主を判断すれば第 2 名詞を選択するということになるので、語順の手掛りと名詞の意味の手掛りが競合・対立する場合である。AI 文で 100% に近くて IA 文で 0% に近ければ、意味的な手掛りを用いていると考えられる。このような意味的手掛り

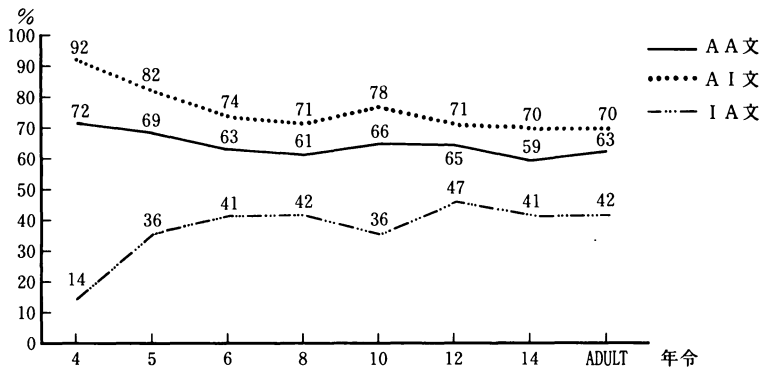

Fig. 2–a　ヲの理解(第1名詞選択率)－ANIMACYの影響－

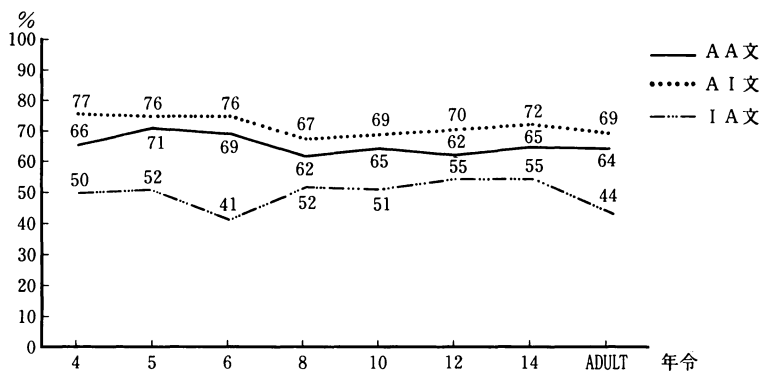

Fig. 2–b　eul/reul の理解(第1名詞選択率)－ANIMACYの影響－

に依存しているのはとりわけ4歳児群に顕著である。

伊藤 (1982b)・本書第三章の定義により、「意味方略使用率」(percent use of meaning strategy=PUMS: (AI文で第1名詞を動作主として選択した率) － (IA文で第1名詞を動作主として選択した率)) を各年令ごとに計算すると、4歳群が78%、5歳群が46%、6歳群が33%、8歳群が29%、10歳群が42%、12歳群が24%、14歳群が29%、大人群が28%であった。これは後に述べるが、韓国語被験者の結果より高い率となっている。

韓国語の文理解

Fig.1–bは韓国人の各年令群におけるϕ ϕ文・ϕ eul文・eul ϕ文の第1名詞動作主選択率を表したものである。助詞の手掛りの無いϕ ϕ文では68～88%という範囲で、大人群を除くと4歳から14歳まで第1名詞の選択が漸増している。第1名詞選択率は日本語被験者よりもすべての年令群で高い。助詞の手掛りのないϕ ϕ文型では日本語よりも韓国語のほうが第1名詞方略をより多く使うといえる。

ϕ eul文ではすでに4歳児から87%の高率で第1名詞が動作主として選択され、全年令で正答率が極めて高いことが示された。この文型では語順と助詞の両手掛りが連携して働くので日本語の場合と同様あるいはそれ以上に低年令から高い正答率となっている。

韓国語で語順の手掛りと助詞の手掛りが競合するeul ϕ文で、語順のマイナスの影響を受けることなく助詞に基づいて正しく第2名詞を動作主として選択できるようになるのはFig.1–bによれば8歳になってからであるといえるだろう。この文型での8歳以降の第1名詞選択率の割合はきわめて少ない(すなわち正答率がきわめて高い)。

このことはFig.2–bにみられるように、韓国語母語話者、とりわけ8歳から大人群までの被験者ではほとんど有生性の手掛りを動作主－被動作主関係の文理解に用いていないことと深い関係がある。すなわちFig.2–bを日本語のデータFig.1–bと比較すると日本語の場合には4、5歳では意味の手掛りが文処理に大きな役割を果たすが、韓国語幼児の場合にはそれほど意味の手掛りに頼らないばかりか、他の年齢群でも一貫して日本人の方が有生性の手掛りに依拠することがより多い。韓国人が日本人よりも名詞の意味の手掛りを用いる傾向が少ないのは、韓国語の実験での各年齢の「意味方略使用率」(PUMS)を算出すると4歳群が27%、5歳群が24%、6歳群が35%、8歳群が15%、10歳群が18%、12歳群が15%、14歳群が17%、大人群が25%であったことから

も確かめられた。いずれも6歳群を除いて日本語での各年齢群の数値を下回っており、韓国語母語話者は有生性の手掛りを用いることが少ないことが明らかとなった。

日本語の文理解と韓国語の文理解の比較：両言語の共通性と差異性

以上の結果から日韓の両言語で被動作主を標示する対格助詞の「手掛りの強さ」がきわめて強いものであることが示された。すなわち大人においては主要な格関係の判断の手掛りは格助詞であり、語順や有生性の手掛りは副次的な役割を担うのみであることが明らかにされた。また、発達的にいえばおおよそ6～8歳頃に本実験のような妨害的な条件の下でも語順や意味の要因に左右されることが少なくなっていることによってヲの機能の確かな獲得が早期であることが示された。伊藤・田原 (1986) では (NNV の語順のみのデータではあるが) 日本語のハとガの同様な実験的条件下での獲得の時期は 10～12歳頃としており、本研究でのヲの獲得時期よりも遅い。また、伊藤・田原 (1986) と同型の実験を韓国語の主題助詞 eun/neun と主格助詞 i/ga でおこなった田原・朴・伊藤 (1987b) の研究でも、獲得の時期は 10～12歳頃であって、本研究の対格助詞 eun/neun の獲得時期の8歳頃という結果よりもやはり遅い。したがって、同一言語内の助詞以外の手掛りとの比較という点からも、他の助詞との相対的な「手掛りの強さ」の比較という点においても日韓両言語で対格助詞の「手掛りの強さ」が強く、獲得の時期が早いということも共通している。

この結果は両言語での対格助詞の「手掛り妥当性」が高いという共通性を示唆するものである。すでに述べたように両言語の間には助詞の文法的類似性がきわめて強いことが原因となって、本研究の結果すなわち両言語での対格助詞の「手掛りの強さ」の類似性が生じたと考えられる。日本語の系統論について述べることは本研究の守備範囲ではないが、両言語の文法的かつ言語行動上の類似性は注目に値する。

しかし、両言語の差異点として、助詞以外の手掛り、すなわち語順と名詞

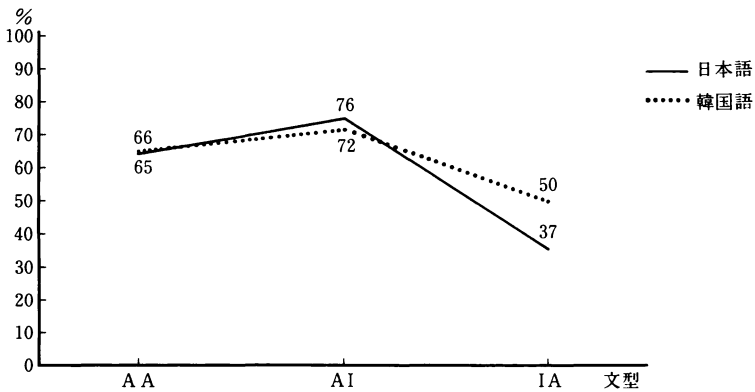

Fig. 3　両言語の ANIMACY の影響

の有生性のどちらを重用するかの対照的な違いが指摘されねばならない。それは、Fig.3 の、両言語での有生性の影響を AI 文と IA 文との第 1 名詞選択率の差をみることにより確認することができる。もし、意味に基づいて動作主を選択していたならば、AI 文では第 1 名詞を、IA 文では第 2 名詞を選択し、AI 文と IA 文での第 1 名詞の選択率の差は大きくなるのに対して、意味に依存していなければこの差は生じないことになる。Fig.3 より、日本語は韓国語以上に AI 文と IA 文の間に差があり、より意味に依拠して動作主判断をしていることが明らかである。「意味方略使用率」(PUMS) の全体的平均を算出すると、日本語母語話者の場合 39% であるのに対し韓国語母語話者では 22% であった。また、Fig.2–a と Fig.2–b を比較すると、韓国語話者の AI 文と IA 文の差が各年齢において日本語話者よりも小さく、語順と意味が競合・対立している IA 文において韓国語話者の方が、6 歳群で日韓両言語それぞれの話者が同率であることを除いて、各年齢において第 1 名詞選択率が日本語話者のそれよりも高い。このことから、発達的にいっても日本語被験者では語順よりも有生性の「手掛りの強さ」が大きかったのに対し、韓国語被験者では逆に語順の手掛りの方が重視されたといえよう。このような傾向は、すでに田原・朴・伊藤 (1987)

で、日本人は主格助詞と主題助詞の手掛り以外に語順よりも名詞の意味すなわち有生性に依存するが、韓国人は語順すなわち第1名詞を動作主として選択する傾向が強く、有生性の手掛りはそれほど強くないことが明らかにされている。本研究でもそれを再び裏付ける結果が得られた。このような両言語の違いとして、文法領域における有生性の果たす役割、すなわち競合モデルでいう「手掛り妥当性」の違いということが推測される。決定的に明確な証拠を得ているわけではないが、例えば存在を表す動詞は日本語ではイルとアルがあり両者を有生名詞か無生名詞かで使い分けるという選択制限があるのに対して、韓国語では itta という単一の動詞が用いられ、名詞句の有生性とは関係がない。このような違いは両民族の間の文化差的な根源までさかのぼって考察され得るのかも知れない。

他の言語との競合モデルによる比較

Table 3は、伊藤 (1987) のまとめに今回の実験で得られた結果を追加したものである。成人の文処理の方略をみる限りでは、英語を除いては語順の果たす役割は相対的に小さい。英語では語順が格関係を標示する手掛りであって格変化は副次的な役割しか果たさない。例えば Bever (1970) の論文の中には

Her and him liked the cannabis juice.

という例文が入っているが、これなどは英語の格変化の「手掛り妥当性」の弱さの1例であるといえよう。

言語発達研究でも一時期に語順と格関係の対応について問題にされたことがある。本研究でも日本語児において低年齢では語順の「手掛りの強さ」が大きいことが明らかにされた。Hakuta (1982) の研究などによっても助詞理解にその助詞の名詞句の語順の要因が就学前児の場合には影響が大きいことが示されている。しかしながら、英語と日本語の語順についての文法的な「手掛り妥当性」の違いを考慮に入れて語順の問題が論じられるべきであろう。その点で Clancy (1985) はこのような日本語の文法の特性に着目して多くの興味深

Table 3.　各言語における成人の文処理の手掛りの強さの順序

文　献	言　語	文処理の手掛りの強さの順序
伊藤 1982b	日本語	助詞ハ・ガ >animacy> 語順
伊藤 1982a	英　語	語順 >animacy
伊藤・田原 1986	日本語	助詞ハ・ガ >animacy> 語順
田原・朴・伊藤 1987	韓国語	助詞 eun/neun・i/ga> 語順 >animacy
MacWhinney	英　語	語順 >animacy> 単複の一致
et al. 1984	イタリア語	単複の一致 >animacy> 語順
	ドイツ語	(名詞格変化)>animacy> 単複の一致 > 語順
McDonald 1986	英語	語順 >animacy> 代名詞格変化
	オランダ語	代名詞格変化 > 語順 >animacy
(今回の報告)	日本語	助詞ヲ >animacy> 語順
	韓国語	助詞 eul/reul> 語順 >animacy

い観察をおこなっている。日本語の特徴をふまえた言語発達研究が今後進展することが期待される。

参 考 文 献

Bates, E. & MacWhinney, B. (1979). A functionalist approach to the acquisition of grammar. In E. Ochs, & B. Schieffelin, (Eds.), *Developmental pragmatics* (pp.167 − 211). Academic Press.

Bates, E. & MacWhinney, B. (1981). Second-language acquisition from a functionalist perspective: Pragmatic, semantic, and perceptual strategies. In H. Winitz (Ed.) *Annals of the New York Academy of Science Conference on Native and Foreign Language Acquisition*. (pp.190 − 214). New York : New York Academy of Sciences.

Bates, E., MacWhinney, B., Caselli, C., Devescovi, A., Natale, F., & Venza, V. (1984). A cross-linguistic study of the development of sentence interpretation strategies. *Child Development*, **55**, 341 − 354.

Bates, E. & MacWhinney, B. (1987). Competition, variation, and language learning. In B. MacWhinney (Ed.), *Mechanisms of language acquisition*. Hillsdale, N.J.: Laurence Erlbaum.

Bates, E. & MacWhinney, B. (1989). Functionalism and the competion model. In B. MacWhinney & E. Bates. (Eds.), *The Crosslinguistic Study of sentence processing.* New York : Cambridge University Press.

Bever, T. G. (1970). The cognitive basis for linguistic structures. In Hayes, J.R. (Ed.) *Cognition and the development of language* (pp. 279 − 362). Wiley.

Bridges, A. (1980). SVO comprehension strategies reconsidered : the evidence of individual patterns of response. *Journal of Child Language*, **7**, 89 − 104.

Chafe, W. L. (1970). *Meaning and the structure of language*. University of Chicago Press.

Chafe, W. L. (1976). Giveness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of views. In C. N. Li (Ed.) *Subject and topic* (pp.25 − 56). Academic Press.

Clancy, P. M. (1985). Acquisition of Japanese. In D. I. Slobin (Ed.), *The cross-linguistic study of language acquisition* , Hillsdale, NJ : Laurence Erlbaum Associates.

Clancy, P. M. (1986). The acquisition of subjects in Korean. (Unpublished.)

Clancy, P. M. & Downing, P. (1986). The use of wa as a cohesion marker in Japanese oral

narratives. In Hinds, J., Iwasaki, S. & Maynard, S. (Eds.) *Perspectives on topicalization : The case of Japanese wa.* Amsterdam: Benjamins.

Comrie, B. (1981). *Language universals and linguistic typology*. Oxford : Basil Blackwell

Cook, H. M. (1985). Frequency of nominal marker in the speech of Japanese child and his caretaker: A case study. *Descriptive and Applied Linguistics*, **18**, 13 − 24.

Cook, H. M. (1986). A psycholinguistic approach to Japanese particle WA : WA as a frame marker. MA/Screening paper. University of Southern California (Unpublished)

Cook, H. M. (1986). Japanese particles wa and ga used in the context of sports announcing. University of Southern California. (Unpublished.)

Crystal, D. (1980). *A first dictionary of linguistics and phonetics*. Andre Deutsch.

Daneš, F. (Ed.) (1974). *Papers on functional sentence perspective*. Mouton.

Devescovi, A. & Caselli, C. (1985). Acquisition of subject-verb agreement by Italian children. Manuscript, University of Rome [Bates, E. & MacWhinney, B. 1987 より引用]

Dubois, J., Giacomo, M., Guespin,L., Marcellesi, J. B., & Mevel, J. P. (1973). *Dictionnaire de linguistique.* Libraire Larousse. (伊藤晃・木下光一・福井芳男・丸山圭三郎 編訳 1980 ラルース言語学用語辞典. 大修館書店)

Fillmore, C. (1968). The case for case. In Bach, E., & Harms, R. T. (Eds.), *Universals in linguistic theory* (pp. 1 − 90). Holt, Rinehart & Winston.

Firbas, J. (1974). Some aspects of Czechoslovak approach to problems of functional sentence perspective. In Danes, F. (Ed.) *Papers on functional sentence perspective* (pp. 11 − 37). Mouton.

Frankel, D. G. & Amir, M., Frankel, E., & Arbel, T. (1980). A developmental study of role of word order in comprehending Hebrew. *Journal of Experimental Child Psychology*, **29**, 23 − 35.

Fraser, C., Bellugi, U., & Brown, R. (1963). Control of grammar in imitation, comprehension, and production. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **2**, 121 − 135.

藤友雄暉 (1976). 幼児における口頭作文の研究Ⅱ. 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 164 − 165.

言語, (1984). **13**(8). 大修館書店.

Givon, T. (1979). From discourse to syntax : grammar as a processing strategy. In T. Givon (Ed.) *Syntax and semantics*. 12, Discourse and syntax. New York : Academic Press [Harrington 1986]

後藤慶子 (1987). 4・5歳児における格助詞「が」「を」の使用と判断:横断研究と言語障害児への課題適用の試み. 上智大学言語障害児研究コース修士論文(未公刊).

Greenberg, J. H. (1963). Some universals of grammar with particular reference of the order of meaningful elements. In J. H. Greenberg (Ed.), *Universals of grammar* (pp.73 − 113). MIT Press.

Hakuta, K. (1982). Interaction between particles and word order in the comprehension and production of simple sentences in Japanese Children. *Developmental Psychology*, **18**, 62 − 76.

Halliday, M. A. K. (1970). Language structure and language function. In Lyons, J. (Ed.) *New horizons in linguistics* (pp.140 − 165). Penguin.

Harrington, M. (1986). Processing strategy transfer and interlanguage variation. Unpublished manuscript. International University of Japan.

秦野悦子 (1976). 助詞「は」「が」の獲得:自由再生課題を通して. 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 162 − 163.

秦野悦子 (1979). 子どもにおける"は""が"の獲得の研究. 教育心理学研究, **27**, 160 − 168.

Hayashibe, H. (1975). Word order and particles : A developmental study in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics,* **8**, 1 − 18.

林部英雄 (1979). 文における既知情報と新情報の弁別に関する発達的研究. 特殊教育研究施設報告(東京学芸大学), **22**

林部英雄 (1983). 文における既知情報と新情報情報の弁別に関する発達的研究 II :イントネーションの手掛りについて. 特殊教育研究施設報告(東京学芸大学), **30**, 1 − 5.

林部英雄 (1983). 文における新−旧情報の弁別に関する発達的研究. 心理学研究, **54**, 135 − 138.

ハインズ, J・岩崎勝一. (1987). 談話分析の現状. 月刊『言語』, **16**, 12月号, 71 − 80. 大修館書店.

Hinds, J., Maynard, S. K., & Iwasaki, S. (Eds.) (1987). *Perspectives on topicalization : The case of Japanese 'wa'*. Amsterdam : Benjamins.

洪思満 (Hong, Sa-man) (1983). 国語特殊助詞論 学文社(韓国語).

市川保子 (1987). 取り立て助詞「ハ」の位置と対比:「花子がコップは割った」は何

故おかしいか. 日本語教育学会研究例会発表資料(1987年7月25日).(未公刊)

池弘子 (1979). 知能障害児の話しことばに関する研究:助詞の使用について. 心身障害学研究, **3**, 67 − 75.

池弘子 (1982a). 助詞の習得過程:「が」と「を」について. 教育心理学研究, **30**, 1 − 11.

池弘子 (1982b). 知能障害児の助詞の習得過程:「が」と「を」の習得段階の設定. 特殊教育研究, **20(3)**, 27 − 35.

井上ひさし (1981). 私家版日本語文法. 新潮社(文庫版1984).

井上和子 (1986). 日本語分析からみたGB理論. 言語, 15(12), 72 − 82.

伊藤武彦 (1981). 単文理解の方略:第二言語としての日本語と英語における通言語的研究. 東北大学教育学研究科修士論文(未公刊).

伊藤武彦 (1982a). 英文理解の方略:アメリカ人, 日本人留学生, 日本人学生の比較. 日本心理学会第46回大会発表論文集, 190.

伊藤武彦 (1982b). 日本語の「は」と「が」の動作主性:日本人, 二言語併用者, アメリカ人日本語教師/学習者の比較, 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 24 − 25.

伊藤武彦 (1983a). 日本語助詞なし文理解の方略:日本人, 二言語併用者, アメリカ人日本語教師/学習者の比較. 日本心理学会第47回大会発表論文集, 319.

伊藤武彦 (1983b). 文理解の方略の発達的研究:言語獲得における言語普遍性と言語相対性. 東北心理科学研究, **6**, 16 − 22.

Ito, T. (1984). Strategies of sentence comprehension in native speakers, bilinguals, and second language learners : A cross-linguistic study of Japanese and English. Paper read at the XXIII International Congress of Psychology. Acapulco, Mexico.

伊藤武彦 (1986). 日本語の助詞ハとガの多重機能性. 和光大学人文学部紀要, **21**, 95 − 105.

伊藤武彦 (1987). 日本語の特徴:文理解の方略の言語間の比較から, 和光大学人文学部紀要別冊「エスキス'87」76 − 88.

伊藤武彦 (1990). 日本語における助詞の獲得:ハ・ガ・ヲの発達心理学的研究 東北大学大学院教育学研究科 博士論文(未公刊)(1989年1月24日提出)

伊藤武彦・林部英雄・石黒広昭・町田重光 (1985). 言語発達研究への機能主義的アプローチ. 心理学評論, **28**, 280 − 305.

Ito, T. & Tahara, S. (1985). A psycholinguistic approach to the acquisition of

multifunctionality in Japanese particles wa and ga. *Descriptive and Applied Linguistics,* **18**, 121 − 131.

伊藤武彦•田原俊司 (1986). ハとガの動作主性の発達. パン F. C.•八代京子•秋山高二(編). ことばの多様性, (pp.87 − 106). 文化評論出版.

伊藤武彦•田原俊司•朴 媛淑 (1987). 被動作主をあらわす助詞ヲの獲得. 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 208 − 209.

伊藤武彦•田原俊司•朴 媛淑 (1989). 格標識としての日本語助詞:日韓両言語間の発達心理言語学的比較. F. C. Peng, V. M. Peng, 三宅英文, 佐々木真, 渡辺鉄太(編). 個人の言語と社会の言語 (pp.93 − 111). 文化評論出版.

伊藤武彦•田原俊司•朴 媛淑 (1991). 被動作主をあらわす助詞ヲの獲得. 教育心理学研究, **39**, 75 − 84.

岩原信九郎 (1957). 教育と心理のための推計学. 日本文化科学社.

岩立志津夫 (1980). 日本語児における語順•格ストラテジーについて. 心理学研究, **51**, 233 − 240.

岩立志津夫 (1986). 個人差•個人内差•課題差研究(1):助詞獲得と課題差. 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 102 − 103.

岩立志津夫•稲葉礼子 (1987). 就学前児における助詞ハとガの獲得:新旧情報との関連において. 教育心理学研究, **35**, 241 − 246.

Karmiloff-Smith, A. (1979). *A functional approach to child language: A study of determiners and reference.* Cambridge University Press.

柏崎秀子 (1986). 発話者の心理的姿勢からみた助詞選択:助詞「は」と「が」の使い分けの検討. 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 104 − 105.

柏崎秀子 (1987). 発話者の心的態度からみた助詞「は」と「が」の使い分け. 教育心理学研究, **35**, 57 − 64.

Keppel, G. (1982). *Design and analysis: A researcher's handbook*. 2nd ed. Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall.

Keenan, E. L. (1976). Toward a universal definition of "subject". In C. N. Li (Ed.), *Subject and topic*. Academic Press.

菊池康人 (1987). 「XはYがZ」構文の整理. 日本語教育学会研究例会発表資料(1987年7月25日).(未公刊)

Kilborn, K. & Coorman, A. (1986). Sentence interpretation strategies in adult Dutch-English bilinguals. (Unpublished.)

Kilborn, K. & Ito, T. (1989). Sentence processing strategies in adult bilinguals. In B. MacWhinney & E. Bates. (Eds.), *Cross-linguistic studies of language processing*. New York : Cambridge University Press.

金敏洙 (Kim, Min Su) (1985). 国語意味論. 一潮閣 (in Korean)

Kitagawa, C. (1982). Topic construction in Japanese. *Lingua*, **57**, 175 − 214.

近藤一政 (1978). 助詞ガとハの使い分けの発達. 東京大学教育心理学科卒業論文. (未公刊)

久野 暲 (1973). 日本文法研究. 大修館書店.

久野 暲 (1978). 談話の文法. 大修館書店.

久野暲 (1982). 談話の構造 —— 日・英語. 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明 (編). 講座日本語 12 外国語との対照Ⅲ. 明治書院.

Kuno, S. (1973). *The structure of Japanese language*. Cambridge, MA : The MIT Press.

Kuno, S. (1978). Japanese : A characteristic OV language. In W. P. Lehmann. (Ed.), *Syntactic typology* (pp.57 − 138). Austin, TX : University of Texas Press.

李仁燮 (Lee, In Sup) (1986). 児童言語発達. 開文社 (in Korean)

李延燮 (Lee, Yun Sup) • 権敬顔 (Kweon, Kyeong An) • 鄭仁実 (Chong, In Sil) (1979). 韓国児童構文発達 (I). 韓国教育開発院. (in Korean)

Li, C. N. & Thompson, S. A. (1976). Subject and topic: A new typology of language. In C. N. Li (Ed.) *Subject and topic*. Academic Press.

MacWhinney, B., Bates, E., & Kliegel, R. (1984). Cue validity and sentence interpretation in English, German, and Italian. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **23**, 127 − 150.

MacWhinney, B, & Bates, E. (Eds.) (1989). *The Crosslinguistic Study of Sentence Processing*. New York : Cambridge University Press.

MacWhinney, B., Pleh, C., & Bates, E. (1985). The development of sentence interpretation in Hungarian. *Cognitive Psychology*, **17**, 178 − 209.

前田紀代子 (1977). 乳幼児の言語発達に関する調査研究 (IV). 日本教育心理学会第 19 回総会発表論文集, 362 − 363.

前田紀代子 (1987). 乳幼児の言語発達に関する調査研究 (第 XIII 報). 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 202 − 203.

Mallison, G. & Blake, B. (1981). *Language Typology*. Amsterdam : North Holland [Tomlin, 1986]

Maratsos, M. (1974). Children who get worse at understanding the passive : A replication of Bever. *Journal of Psycholinguistic Research,* **3** , 65 − 74.

Maratsos M. P. (1976). *The use of definite and indefinite reference in young children: An experimental study of semantic acquisition*. Cambridge : Cambridge University Press.

McDonald, J. L. (1986). The development of sentence comprehension strategies in English and Dutch. *Journal of Experimental Child Psychology*, **41**, 317 − 335.

Miao, X. (1981). Word order and semantic strategies in Chinese sentence comprehension. *International Journal of Psycholinguistics*, **8** − **3{23}** : 109 − 122.

Miao, X., Chen,G., & Ying, H. (1984). Re-examination of the role of word order and word meaning in sentence comprehension. Paper presented at the Conference of Shanghai Psychological Association. (In Chinese、原題 : 繆小春•陳国鵬•广厚昌 (1984). 詞序和詞叉在漢語語句理解中的作用再探.)

三上章 (1955). 現代語法新説. 刀江書院 (くろしお出版).

三上章 (1960). 象は鼻が長い. くろしお出版.

三上章 (1975). 主格•主題•主語. 三上章論文集 (pp.51 − 61). くろしお出版.

宮原英種•宮原和子 (1976). Language development in a young Japanese child : Mainly on the acquisition of particles. 福岡教育大学紀要 (教職科編), **26**, 91 − 97。

宮原和子•宮原英種 (1973). 幼児における文法発達の諸相. 日本心理学会第 37 回大会発表論文集, 698 − 699.

Miyazaki, M. (1979). The acquisition of the particles wa and ga in Japanese: A comparative study of L1 acquisition and L2 acquisition. Unpublished Master's thesis. University of Southern California. (Unpublished)

永野 賢 (1959). 幼児の言語発達について : 主として助詞の習得過程を中心に. 国立国語研究所論集 1: ことばの研究 (pp.383 − 396).

Nakamura, K. (1992). Referential structure in Japanese children's narratives : The acquisition of *wa* and *ga*. To appear in *Japanese Korean Linguistics Conference Proceedings (SDSU)*. Stanford University Press.

野田尚史 (1985). 日本語文法セルフマスターシリーズ 1 はとが. くろしお出版.

野地潤家 (1976). 幼児期の言語生活の実態. 文化評論出版.

野呂元 (1987). 英語の無生物主語構文の訳し方についての一研究. 1987 年度東北大学教育学部研究生論文. (未公刊)

大久保愛 (1967). 幼児言語の発達. 東京堂.

大野晋(編) (1987). 日本語の本性. 現代のエスプリ, 237. 至文堂.

尾上圭介 (1979). 助詞「は」研究史に於ける意味と文法. 三十周年記念論集, 神戸大学文学部, 365 − 386.

朴 媛淑・田原俊司・伊藤武彦 (1987). 主題助詞と主格助詞の動作主性の発達:日・韓両言語の比較. 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 210 − 211.

朴 媛淑・田原俊司・伊藤武彦 (1988). 韓国語において被動作主を表す助詞-eul/reulの獲得. 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 90 − 91.

Ruhlen, M. (1975). *A Guide to the Languages of the World*. Stanford : Language Universal Project, Stanford University [Tomlin, 1986]

Russell, R. A. (1985). An analysis of student errors in the use of Japanese -WA and -GA. Papers in Linguistics, **18(2)**, 197 − 221.

崎山 理 (1987). 言語人類学と文法の発見. 日本語学, Vol.**6**, No.**3**, 36 − 44.

Sano, K. (1976). An experimental study on the acquisition of Japanese simple sentences and cleft sentences. *Descriptive and applied Linguistics,* **10**, 213 − 233.

佐藤亮一・沢木幹栄・小林隆・W.A.グロータス (1987). 方言文法の発見:方言文法全国調査から. 日本語学, Vol.6, No.3, 45 − 55.

Scollon, R. (1977). A real early stage: An unzipped condensation on child language. In E. Ochs, & B. B. Schieffelin, (Eds.) *Developmental Pragmatics* (pp.215 − 227). Academic Press.

柴谷方良 (1981). 日本語は特異な言語か?:類型論から見た日本語. 月刊『言語』, **10(12)**, 46 − 53。

柴谷方良 (1985). 主語プロトタイプ論. 日本語学, Vol.**4**, No.**10**, 4 − 16.

Siewierska, A. (1988). *Word order rules*. London : Croom Helm

Sinclair-de Zwart, H. (1973). Language acquisition and cognitive development. In T. E. Moore (Ed.), *Cognitive development and the acquisition of language* (pp.9 − 25). New York : Academic Press.

Sinclair, H. & Bronkart, J. P. (1972). S.V.O. a linguistic universal ? : A study in developmental psycholinguistics. *Journal of Experimental Child Psychology*, **14**, 329 − 348.

Slobin, D. I. (1979) *Psycholinguistics.* (2nd ed.). Glenview. IL : Scott, Foresman & Co.

Slobin, D. I. (1982). Universal and particular in the acquisition of language. In L. R. Gleitman & E. Wanner (Eds.), *Language acquisition: State of the art*. Cambridge : Cambridge

University Press.

Slobin, D. I. (Ed.) (1985). *The cross-linguistic studies of language acquisition*. Vol. I, II. Hillsdale,NJ : Lawrence Erlbaum Associates.

Slobin, D. I. & Bever, T. (1982). Children use canonical sentence schemas : A cross-linguistic study of word order and inflections. *Cognition*, **12**, 229 − 265.

Steele, S. (1978). Word order variation : A typological study. In C.N. Li (Ed.), *Universals of Human Languages* 4 (pp.585 − 624).

Strauss, S. (Ed.) (1982). *U-shaped behavioral growth*. Academic Press.

鈴木情一 (1977). 日本の幼児における語順方略. 教育心理学研究, **25**, 200 − 205.

鈴木忍 (1978). 文法 I 助詞の諸問題 1. 国際交流基金. 凡人社.

田原俊司 (1984). 助詞「は」「が」の多重機能 (plurifunctionality) の獲得. 東京大学教育学研究科修士論文 (未公刊)

田原俊司 (1985). 助詞ハ・ガの対象比較的機能の獲得. 日本教育心理学会第 27 回総会発表論文集, 240 − 241.

田原俊司・伊藤武彦 (1984). 新−旧情報を表す助詞「は」「が」の獲得. 日本教育心理学会第 26 回総会発表論文集, 650 − 651.

田原俊司・伊藤武彦 (1985a). 助詞ハとガの談話機能の発達 心理学研究, **56**, 208 − 214.

田原俊司・伊藤武彦 (1985b). 日本語のハとガの獲得に対する機能的アプローチ 東京大学教育学部紀要, **25**, 227 − 236.

田原俊司・伊藤武彦・朴 媛淑 (1988). 日・韓両言語において主題助詞と主格助詞は先行文脈に基づいて使い分けられているか. 日本教育心理学会第 30 回総会発表論文集, 92 − 93.

田原俊司・伊藤武彦・朴 媛淑 (1990). 韓国語の主題助詞 -eun/neun・主格助詞 -i/ga の談話機能の発達 : 日本語の主題助詞ハ・主格助詞ガとの比較. 神田外語大学紀要, **2**, 81 − 97.

田原俊司・朴 媛淑・伊藤武彦 (1987a). 新旧情報をあらわす助詞の獲得 : 日・韓両言語の比較. 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 212 − 213.

田原俊司・朴 媛淑・伊藤武彦 (1987b). 韓国語単文理解における主題助詞と主格助詞の動作主性とその発達 : 日本語の助詞ハとガとの比較. 教育心理学研究, **35**, 213 − 222.

徳田政信 (1987). 松下文法の発見したもの. 日本語学, Vol.**6**, No.**3**, 11 − 23.

Tomlin, R. S. (1986). *Basic word order : Functional principles.* London : Croom Helm.

Ultan, R. (1969). Some general characteristics of interrogative systems. *Working Papers on Language Universals* 1 (pp.41 − 63). Stanford : Language Universal Project, Stanford University [Tomlin, 1986]

瓜生淑子 (1986). 1•2才児における非日常的内容の「対象語－行為語」構文の理解について. 教育心理学研究, **34**, 306 − 314.

ヴィゴツキー, L. S. (1934, 1962訳) 思考と言語. 柴田義松(訳). 明治図書.

横山正幸 (1987). 幼児初期の助詞「ガ」の誤用について. 言語発達研究連絡会発表資料, 1987年10月, 東京. (未公刊)

横山正幸 (1989a). 幼児による助詞の誤用の出現時期と類型. 福岡教育大学紀要, 第**38**号, 第4分冊, 225 − 236.

横山正幸 (1989b). 幼児の連体修飾発話における助詞ノの誤用 : R児の場合. F. C. Peng, V. M. Peng, 三宅英文, 佐々木真, 渡辺鉄太(編). 個人の言語と社会の言語 (pp.76 − 92). 文化評論出版.

横山正幸 (1989c). 幼児による助詞の誤用の出現時期と類型について : R児の場合. 第15回日本言語科学研究会(ICU)発表資料, 1989年7月, 東京. (未公刊)

横山正幸 (1990). 幼児の連帯修飾発話における助詞ノの誤用の発達的意義. 発達心理学研究, **1**, 2 − 9.

Yokoyama, M. & Schaefer, R. (1986a). Suspension of the case particle o in the acquisition of Japanese. *Working Papers in Language Development*, Vol.**1**, No.**1**, 77 − 104. Child Language Program, University of Kansas.

横山正幸 • Schaefer, R (1986b). 幼児初期の助詞の誤用. 日本心理学会第50回大会発表論文集, 456.

吉本哲 (1982). 「は」「が」: それぞれ機能するレベルの違いに注目して. 言語研究, **81**, 1 − 17.

Warden, D. A. (1976). The influence of context on children's use of identifying expressions and references. *British Journal of Psychology*, **67**, 101 − 112.

趙明翰 (Zoh, Myeong-Han) (1983). 言語心理学. ソウル : 正音社(韓国語)

趙明翰 (Zoh, Myeong-Han) (1984). 韓国児童における言語獲得研究 : 策略模型. ソウル大学出版部(韓国語)

おわりに

筆者の一人が文理解の競合モデルによる実験的研究を始めたのが1981年であり(伊藤, 1981)以来、あしかけ13年が経過した。本書で扱ったのは、ハとガ(そしてヲ)の統語機能の研究であり、談話機能と対象比較機能の研究は次の機会にぜひまとめてみたいと願っている。関心のある方は、談話機能については、田原・伊藤(1984, 1985a)、田原・伊藤・朴(1988, 1990)、田原・朴・伊藤(1987b)を、対象比較機能については田原(1985, 1986)を参考にしていただきたい。

本研究をまとめるにあたり、伊藤武彦をご指導いただきましたUniversity of California, BerkeleyのProf. Dan Slobin とProf. Evrin-Tripp, 東北大学教育心理学研究室の宮川知彰教授(現放送大学教授)、寺田晃教授、細谷純教授、宇野忍助教授、菊池武剋助教授、片岡彰助手、本郷一夫助手(現鳴門教育大学)をはじめ、お世話になった多くの方々に厚く感謝いたします。田原俊司の研究活動を暖かく見守っていただいた、芝祐順東京大学教授(現人間測定研究所顧問)に心から感謝いたします。朴媛淑の漢陽大学の恩師である李南杓教授と李秀遠教授および日本留学中に御指導を受けてきた東京大学の柴田義松教授、藤岡信勝教授に深く感謝いたします。韓国で実験を行なうに際しては李秀遠教授と故・尹相烈先生の援助をうけました。両先生のご援助がなければ韓国での実験はできなかったと思います。両先生をはじめ、3人の研究活動を支えていただいたすべての方々に感謝いたします。

1993年　2月

伊藤武彦
田原俊司
朴　媛淑

著 者 略 歴

伊藤武彦(いとう　たけひこ)

三重県四日市市に生まれる。名古屋大学・東北大学・カリフォルニア大学(バークレー校)で学生生活を送り、1985年より和光大学人文学部人間関係学科で心理学・教育心理学を教える。

現在、和光大学助教授。

[連絡先]〒195　東京都町田市金井町2160　和光大学人文学部
電話　044-988-1431　　FAX　044-988-1435

田原俊司(たはら　しゅんじ)

山口県小野田市に生まれる。埼玉大学・東京大学に学び、1988年より神田外語大学で教育心理学・心理学を担当し、現在に至る。

1993年2月現在、神田外語大学専任講師。

[連絡先]〒261　千葉市美浜区若葉1－4－1　神田外語大学
電話　043-273-1233　　FAX　043-272-1777

朴　媛淑(パク　ウォンスク)

本籍、大韓民国慶尚南道山清郡。漢陽(ハニャン)大学大学院を中退し、文部省国費留学生として東京大学大学院教育学研究科修士課程を経て、1993年2月現在、同大学院博士課程に在学中。

専門は学校教育学。

1993年2月20日　印刷
1993年2月28日　発行　　（検印省略）

文の理解にはたす助詞の働き
—日本語と韓国語を中心に—

定価 8,240円
（本体 8,000円）

著者　伊藤武彦
　　田原俊司
　　朴　媛淑

発行者　風間　務

印刷者　千代田オフセット（株）

発行所　株式会社　風間書房

〒101　東京都千代田区神田神保町1の34
電話03(3291)5729番　振替東京1-1853番

（矢嶋製本）

ISBN4-7599-0842-0